

Refrain - Welsh
Dragon :
Ddraig × Ddraig

桜咲く日に

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

再び、ここまで築こうか、共に。なあ、相棒。

D r a i g — ドライグ

目次

紅い糸	213
行方の知れない	195
185	
枝の花色は、彼女の目を揺らして	
エピソード 彼との秘密	169
別れには鈴を鳴らして	109
愛しき愚王様	89
錯覚好意	70
再度、……再度。	53
面影	39
雪結晶	24
Refrain	1

愛share	312
哀愁愛輪廻	345
帰還	376
涙のほくろ	382
優しいバカは好きだよ。	398
紺碧	418
グッドラック	427
勘弁してやる	437
迎撃の備えを	449

R e f r a i n

暗い暗い暗い。

視界を覆う。

今度は赤い赤い赤い。

視界を埋める。

暗闇に放り出された体に灯がともる。

とても力強い紅だ。

紅蓮の赤だ。

『……紅蓮の煉獄。地獄より辛い俺の煉獄だ』

誰の声？ 彼の声。

記憶にあるかと言えば、きつとあるのだろう。

低く、低く、響く声音は恐怖を助長する。

しかし、安堵さえも助長する。

相容れない感情。

矛盾の想い。

『また、共に生きようじゃないか。相棒』

頬に何かが落ちた。

紅が視界を過ぎる。

紅の髪が綺麗に映る。

どこかの記憶から引つ張り出されたものが現れたかのように見えた気がした。

『世界はそう、易々と目的を明かしちゃくれないさ。俺たちの目的はなんなのか、そう簡単に知らせちゃくれないさ』

緑色の双眸が見つめる。

『……だが、俺たちの根幹が変えられるわけじゃない。やがては同じ所を目指すんじゃないか、なあ相棒』

翼が広げられる。

炎が地を走る。駆けた。

姿が火に煽られ、見えてくる。

『俺らはこれから自分そのものを奪わなければいけない。それは仕方のないことさ。なんせ、世界に同じ質の存在が二つ、いていいはずもない。だが、それでも俺たちは俺たちだ。死んだわけじゃない。』
『共に生きるのさ』

世界の始点と終点は結ばれている。だから、平行は生きている。

始まりと終わりの結び目がきつく結ばれていて、その過程のみが重なる世界ごとに少し、また少しとズレをもたらししていく。

『終点はいつも終焉と決まっていた。それを知っただろう、相棒？ ならば、誰かが終点を変えなければいけないのさ。終点を変えなければどの世界もみんな死ぬ。それは決まりだ』

物語はバツドしか用意されていない。そういう風に世界は決定したのだ。

だから。

だからこそ、任された。

決められた。

選ばれた。

そして、もう一度生を生きろと命じられた。

紅い紅いあれに。

『その心臓、大切にしろよ。龍と獣の死闘は起きるだけで世界を終わらせる。始めさせるな、相棒』

点火された花火のように、燃え上がりを見せた炎。

それは一匹の龍を視界に収めさせた。

『一度、忘れてもお前は相棒だ。ゼロからここまで築こうか。再び』



どのくらい待っただろうか。

眠りから醒めるのをどれくらい待ったのだろうか。

封印されているように、固く閉じられたら瞳はゆっくりと開く。

『……ああ。今回は随分と長い長い眠りだった。寝ている間に宿主が変わった、なんていうことはないといいが』

ひどく体がだるい。

いや、体などはとつくに無くしてはいるが、感覚としての話だろう。

失った体の部位が時々うずくのと同じ様に。

双眸がギラつく。

狙うものを射抜くように濃く、光りを灯す。

『……俺が起きたんだ。つまりは宿主もそれなりに目覚めをきかすころだろうよ』

その推測は遠からず、といった所だろうか。

今、まさにそれに近しい状況、いや、目覚めさせるには必要かもしれない状態にある

のだから。



墮天使。

黒い翼。

光槍。

元、神の駒。

それらははぐれをなし、やがて群をつくり、果ては種族とまで成り上がった。

背いた罰、証として彼らの翼は純白から漆黒へと色を変える。

これは神からの知らせなのかもしれない。欺こうとした、天使として正しく生きようとしなかった者共への印。

正しく、天使との分別を図るための一種の旗だった。

「兵藤くんですよね？」

可憐な少女が話をかける。

兵藤一誠という少年は一瞬、誰にかけられたものかも理解できずに反応が遅れるが、やがて、顔を彼女の方向へと向け、視線と視線を同じにした。

「ああ、ごめん。俺のこと——」

「えっと、こつち来てくれないかな」

少女はいきなり一誠の腕を強く掴むとそのまま歩き出す。

「な、なんだよ、あんた……」

「……いいから黙って来なさい」

少女の顔は一誠には見えない。

先頭をぐんぐんと歩いていく彼女の歩は多少の荒さを孕み、しかし、それでいて優雅

さもかねそろえている。

容姿からしても強引なお嬢様。

今の二人を見れば、彼氏を無理やり連れて行こうとする不機嫌な彼女といったところ

だろうか。

空は茜。

二人の頬を赤く染め上げ、そして、まもなく夜を迎える。

少女は進む。

その表情は確かな確信を得た何かを持っていた。



当たりを引いた。

少女はそう感じていた。

強い、強すぎる神器の匂い。

中身は知らないが、それでも持っていることに疑いの余地はないと判断した。

濃いのだ。匂いが。

ともかくにも濃い。

それは、近づかなければそんな分かる訳でないのだろう。

でなければ、一誠がここまで一般に混ざり過ぎているなど普通ではない。どこぞに

監視はいないものかと探してみても、やはり、ない。

ならばと少女は行動した。

手を触れる。

人は随分と暖かいな、などと戯れ言を感じてしまった。

しかし、それ以上にピリツとくる。

静電気ではない。

神の贈り物。

神器のそれだ。

彼女がこの町にきたのは一誠のこと、そしてもう一つの事柄のこともある。

しかし、彼女が集中すべきは一誠、ただ一人のこと。

彼女は握っていた手をついに離した。

その手には汗が付着し、夕陽による日光でキラキラと光っている。

彼女はそれを気にもとめずに服をさっと撫でて拭い去ると口を開いた。

「いまさらだけど、こんには。それとも人はこういうとき今晚、だったかしら」

彼女は顔を半分ほどに地に沈めた太陽をバックに妖艶に笑む。

来ている服装は学生のもの。しかし、顔——表情はそうではない。

大人の艶美。魅力。

そう、まるで天使のような神聖なものを汚したような背徳感を思わせるなんとも言い

難い美しさ。

最早、人ではない。

「……なんか怖いな、あんた」

一誠は恐怖を募らせている。

不思議な感覚だった。

手を握られた。

この容姿。

男なら喜んだっていいのだ。

それでも、やはり恐怖が大きい。

しかし、彼女はそれを聞いてより笑む。

嬉しそうに、楽しそうに。

「ええ。怖いでしょ？ だってね、あなたを殺すんだもの。怖くなくちやいけないわ」

うふふ、と口から漏れるそれは死をもたらす呪いにしか聞こえない。

夜が来る。

死を迎えに来る。

このタイミングを待っていたのか、どうか。

それは知る由もない。

だが、彼女は薄暗い空に同調させるように背から何かを出した。

「……は？ お、おい。背中からなんか生えてるじゃねえか！」

「あら、不思議？ そうね。人からすればとても不思議ね。綺麗でしょう？ 美しいで

しょう？ この羽、冥土土産に一本いかが？」

彼女は翼から一本の羽を抜き取り、手元で遊ばせた。

黒い、黒い翼が双壁をなし、宙を舞う。そのたびに翼から落ちる羽が一誠の周辺へと

落ち、一誠はわざわざ一本もらう意味が解らなかつた。

「妖怪かよ、お前……ッ！」

歯軋りが響く。

「ふうん、随分と精神が強いよね。殺したくて、殺したくてたまらないのにもつたいたくなく感じてきたわ」

ボンテージ姿の彼女。

その肢体はつまり、エロい。

もう何回か羽ばたけば見えそうなほどにはエロい。

しかし、それでもその殺気を前に、股間を増長するよりも、恐怖の助長のほうがよっぽど早かった。

「……ねえ、あなた、私と来ない？ 来れば殺さないであげてもいいのよ。可愛がつてあげるわ」

甘い声。

飴玉をころり、ころりと転がしたようなとても甘い声。

味はイチゴミルクといったところか。

彼女は翼をはためかせ、ゆっくり、そつと一誠へと近づく。

そして、その手で一誠の頬を触れた。

優しく撫であげ、耳元にそつと息を吹きかける。

いい匂いがした。

「おねえさんと来ない？　ね、イツセーくん」

名前は呪いの言葉。

呪術的なのかがあつたのか、一誠の思考は塗り替えられる。しかし、一誠の目に映る女はひどく何かと重なった。

彼の何か、琴線。トラウマ的ものに触れたのかもしれない。

怒り顔。憤怒。哀しみ。

二種類の感情が上手に表情筋を操り、形をなしてゆく。

「……………てめえ、レイナーレか……………ッ！」

「……………は？」

一誠の口から聞こえた文字。

外人のような、とにかく日本のものではない。その前に、姿が人のものではないが。

「あれ……………。今、俺、なんて言つて……………」

一誠は自身の感情に戸惑いを見せた。知り得ない言葉までも吐いて、涙を一瞬のうちに流し、唇を噛み締め、血を流す。

意味も理解できずに、ただ、数秒前の感情を紐解いていく。

それは彼女が出来たという嬉しさからの下落か、シスターの死を目の当たりにした記

憶か。

両方か。

ここは世界。

別の世界。

“まだ” 生きている平行の場所。

死にいった平行は終わりを迎えた所で止めたビデオのように時を止め。

やがて、この世界もそこへ行きつくはずなのだ。

まったく、同じ世界などない。

必ず、違う。

レイナーレがここで一誠をすぐ殺害しなかったように、じわりじわりと違いが重なる。

空から降りゆく雪の結晶は、同じものが二つないという。

まったく違いが分からないのに、きつと雪同士ならばまったく違うと言いはるほどに違うはずなのに。

“外” から見ればただの丸く青い星なのだ。どの世界も。

今まで何万何億と、おそらく生き物が考えられる量よりずっと多く、雪の結晶はあった。なのに、全部違う。

同じ戦いは二度とない。

同じ恋も、二度とないのだ。

「……あれ、私、名乗ったかしら。まあいいわ。それよりも、どうするの？」
再び、勧誘。

持っている神器がただの『龍の手』程度ならばどうでもいい。

しかし、もともとは危険視され、ここまで嗅ぎつけた。

そして、触れてわかる。

「お、俺は——」

——さっさと起きろよ、小僧

謎の声。あの声。

——なぜ、貴様ほどに霊格が高いガキが起きていない

その声は恐怖と安堵を増加する。

——“人”と悪魔、そしてドラゴンの質を最初から持っている霊質、見たことがない
な

悪魔。

——目の前の女はただの敵だ、そんな下級にこの赤龍帝が頭を下げるなよ

もう、下準備は出来ている、いや、出来ていた、整っていた。

最初から、この時まで。

魔力を目の前で感知する時まで、生命危機を煽る殺気を浴びる日まで。最初から、神帝は龍帝に託していた。

想いを喰らい、無限を超える。

人の夢とは想いの形。

あまりのエネルギーをようし、世界の均衡を破るのも想い。

なればこそ、無限を寄せ付けず、夢はそれを超える。

ドライグは起きているのか？

混ざり合ったドライグは起きているか？

どこかで前のドライグが言っている。

——己の想い、心臓に夢幻に吸収できるか？
“相棒”

世界は、目的を教えず、しかし、二人はそこを目指すはずだ。

「いて……痛えええええッ！」

一誠は頭部を激しく抑えこむ。

後に胸に手を当て、強く震える。

「……チツ。私の力に当てられたか。厄介ね。暴走でもされたらたまらない。……まずは致命傷だけ負わせましょう」

レイナーレは一誠から飛び退き、後退した。それと同時に手元に光槍を出現させ、それを数本形成する。

「……ちよーと、痛いけどゴメンねえ。Mだと助かるわ」

一瞬の投擲。

人間の数倍の力。

それは槍投げのアスリートを軽く凌駕し、当然ながら、ミサイルのようなスピード。人には見切れない。

だが、一瞬。投擲する前の一瞬。

機械音が公園に響いた。

空は暗闇。

虫が鳴いていた。



『Ddraig Over Boost!!』

視界が鮮やかな緑色に変わる。

美しい宝玉。

染み込みように、深い緑。

その中に龍の瞳が見えたような気さえする。

「……………」

意識は離れている。

一誠の目は、何を映している。

ただ、勢いを留めない槍の光が緑の景色を切り裂きながら向かっている。

それを、見ている。

そして、捕らえている。

『Boost!!』

重なり合う機械音。

“手から肩にかけて” 嵌められた、赤い腕。

刹那に指先から片口までを覆い尽くしたその腕。

そして、その“両腕”。

『Draing Booster Left second revolution

!!』

片方、左の腕が形を変える。

爪先が大きく、鋭く。

宝玉がより輝きを増し。

“龍”のそれに近づいていく。

目の前まで迫る槍。

音速。

風を裂きながら、血の花を咲かせようとすする死の槍。

公園は既に緑とかし、それを破るように駆けるのは槍。

複数の槍が四股を射抜くだろう。

動きを封じ、彼女——レイナーレは一誠を墮天使の巣窟へと持ち帰る。

だが。

おそらく、叶わない話だ。

一誠が一本の槍に指を向けた。

ビー玉ほどの魔力が生まれる。

そして、指を弾いた。

——赤い一撃。

当初、神を凌駕した天の龍。

世界最高神を上回るそれを下に位置させた神格持ちの龍を除く、最高の龍帝。

赤い一撃。

流星の如く、空を刈るそれは、槍を破壊してもまだ足を止めない。

そのまま、通過しながら、公園に張られた結界すらも多大に破壊していく。

そして、一撃により起きた暴風に煽られ残りの槍は一誠に当たることなく、力尽き、地に落ちた。

「な、なんなのよ……。D d r a i g ってあのドライグなわけ!? いや、まさか……。龍の手の亜種程度なら儲けものくらいしか考えないつてのに……。ッ」

狼狽。

隠すことはできない汗。

彼女は止まらない脇汗を隠すことなく、ただ、女性として見せてはいけない表情をしていた。

「こんなガキに……。ッ！」

至高（と、思いこんでる）な彼女は許せない。

なぜ、このような少年やシスターにあのようなものが宿り、自身はただの墮天使なのか。

ただ、理不尽な怒りだった。

「むかつく……。ッ！」

彼女は展開についていけない。

結界が破れていることも、悪魔たちが異変に気がついたことも、理解していない。

『D r a i g B o o s t e r L e f t t h i r d r e v o l u t i o n ! ! 』

再び、機械音。

さらに、左腕は形を変化させ、より、禍々しく、より忌々しく、三の種から見れば憎らしいほどに近くなっていく。進化、していく。

いや、進化などしていない。

本来の、あつたはずの籠手へと“戻っている”だけなのだ。

だが、片口まで覆われていてはどうにも籠手ではないかもしれないが。

体はいまだ、人。

しかし、その心臓は違う。

その心臓から漏れる血は龍の血で。

その心臓は一誠とドライグの想いを喰っている。

その心臓は、心臓と同質ではない肉体に包まれている故に、他者の夢を見ない。

しかし、自身の夢は永遠に喰らえる。

ただ、増加すればいい。

そのための龍帝だ。

『B B o o s t t ! ! 』

増加、増加、増加。

増えることに緑は光り、赤く濃い色を腕に見せる。

「伝承と違う……。なぜ、両手に籠手が……」

怖いのだ。

未知が怖い。

知らないことは怖いはずだ。

そして、意識があるのか、ないのか。わからないコイツが怖い。

狂戦士のような、そんな雰囲気があるわけではないが、理性があるのか判断しかねる相手ほど恐ろしいものはそうない。

意味わかんないからだ。

考えてるのかも、全部わからない。



『起きたか、小僧』

視界を収めるのは紅蓮の炎。

赤い世界。

『——随分と遅刻したわけだが、気分はどうだ』

一誠の目の前にいる巨大。

首が痛いほどに見上げなければわからないそれは、ドラゴン、とでも言うべきそれだ。『そう怖がるなよ。これでも懐かしさを感じているんだ。以前に出逢ったことのある宿主かもしれないとな』

時を経て、再び、肉体を変えながらも赤い龍を宿した、そんな推測を楽しそうに語る。『起きるのに時間がかかったのは俺のせいでもあるのだろう。俺自身、目が覚めたのは先刻だ。——なあ、お前、なんだ？』

なんだ？

首を捻る龍は滑稽だ。

しかし、その目は冗談を欲しているわけではない。

ただ、知りたいのだ。これからのために。

『俺の力がバグを起こしている。片腕にしかないはずの籠手が——いや、籠手ではない。腕全てを覆うあれはなんだろうか。まあ、いい。それが両腕にある。そして、左の“部屋”には誰もいない。右には歴代の奴らが鎮座している。それも怨念が薄い。吹けば飛ぶほどに。生前の力さえも戻っているものがある……。おまえ、知らないか』

聞き覚えのない言葉。そして、懐かしく失われた言葉。

声。

知らぬ間に涙が伝う。

『……泣く、か。そうだな……。俺もどこか泣きそうな気分だ。なあ、相棒』

相棒。

「——ドライグ」

ドライグ。

『……やつぱり、俺を知っている。ああ、もちろん覚えているとかではない。心が知っている。お前の魂が俺の名を残している。……そんな感じがしないか？ 兵藤、一誠』

盟約。

世界は目的を隠す。

そう、簡単に教えちゃくれない。

なぜなら、終点を終焉としたのは世界だ。

しかし、心は、想いは世界に逆らうのだ。

神器は世界に逆らい、流れの反対をいき、そして力を掴む。

たとえ、世界が記憶を封印したとして。

この絆はとめられるか？

『嬉しい誤算だ。この力。お前の心臓。おかしな事しかない。まるで、何かを成せとい

う啓示のように』

その心臓が何かはわからない。

匂いはする。

それ自体も世界は隠そうとしている。

だが、あればいい。使えれば。

それが何か、知らなくてもいいのだ。知ったところで誰も信じない。

『ただ、いつか意味を知るだろう。なぜ、この力が今、俺たちに必要だったのか。なれば

こそ、詮索の意味はない。ただ今は、俺と共に生きようか』、相棒』

笑う。

裂けた口元を歪める。

一誠は彼に近づき、触れた。

ドライグが顔を降ろしてくる。

今はドライグの鼻先を撫でながら、

「俺は兵藤一誠だ。ドライグ」

『ああ、赤龍帝ドライグ。お前の相棒の名だ。——二度と忘れるな』

雪結晶

「――部長」

「ええ、わかってる」

とある旧校舎。

上階にて、ロウソクが揺らめく。

オレンジ色の炎をゆらゆらと灯しながら、その横を通り過ぎる黒髪の女性につられて大きく右側に逸れた。

「やばそうなのが入ってきたわね」

その表情は緩い。余裕なのか。

彼女――リアス・グレモリーは顎をしゃくり、黒いケースを持って来させる。

「どれだけ生きがいいのかしら。とつても楽しそう。さあて、下僕に出来るほど知能があるのか、それとも……ただの獣か。見に行きましょう」

意地の悪い笑みを浮かべている。

それに呼応するかのように黒髪の女性も笑んだ。

外は夜。

蝙蝠が舞い、鳥が身を沈め、悪魔が微笑む頃。

雲行きは月を隠しては、現す。

紅の魔法陣が室内にて、光りを示す。



目は確かか。

映しているか。

時として、僅か数秒。

それは、時間の進みが違うのだろう。それしか、説明がつかない。

兵藤一誠は虚ろな瞳に人としての意識を戻す。

腕を覆う紅蓮の龍腕。

燃え上がるほどに色をつけて、彼を歓迎する。

爆発したかのような大きな緑光。

公園一帯を囲むように、存在を示していたそれは徐々に宝玉へと吸収されていく。

込める。

「……赤龍帝。忌々しい、化け物が……。なぜ、こんな辺境の東の島に——」

レイナーレが歯を強く、合わせる。その際に僅かばかり、欠けるような音がした。血が出るほどに強く握る拳。

生み出そうとする槍。

しかし、それは形を形成しない。

パキパキ……と情けない音を立てては地に墜ちる。

破片が飛び散り、四散する。

その様は、まるで線香花火のように儂く、弱い。

街灯が点滅している。

時々、二人の顔を隠しては、見せる。

一誠はただ、彼女を見ていた。

強く、強く、見ていた。

『おい、女』

化け物とのたまったものの声音が広く、響き渡る。

耳から鼓膜を揺らすそれは、やはり、人型のものとは桁が違う。

畏怖を感じさせるには充分なほどの重圧。重さ。

強さを誇示する雄の威嚇。

レイナーレは頬に一滴の汗を垂らしながら、歯噛みする。

ただ、目は見開き、一挙手一投足を追っていて。そして、全身の神経を尖らせる。勝てるなど傲慢なことを言うつもりはない。

人が墮天使を化け物と思うように、墮天使はアレを化け物とする。わずか、目覚めて数分。

しかし、なぜだろう。

逃れることができるとも思えない。それほどに気がピリピリと肌を刺激する。レイナーレから見えて一誠は、ただの少年ではなくなっている。

強くこちらを見つめるその目には、奥に牙をむく龍がいる。

——見えている。見ている。

一誠に重なるように、すぐそこにいるように。

そして、射抜くようにレイナーレを見ている。

ただ、赤い赤いアレがにやりと、彼女を目で追っている。

「……な、に」

先ほどまでの余裕などつくに喰われた。

龍帝の声は、下級のやからなどに手を出させる間もなく、掌握してしまう。

必死に喉元から出した言葉は二文字にもかかわらず、ひどく震えている。

赤い一撃。

あれを喰らえば、肉片すら、飛ぶ。

『この男を連れ去り、俺を抜き取ろうとしたな？ 墮天の女よ』
怒りのものではない。

遊んでいるような、とにもかくにも高圧的なそれだ。

上からでもない。

天から見下ろすように、ゆつくりと赤い龍は言葉を紡ぐ。

さつさと、殺しておけばよかったものを――。

くつくつと笑い声が木霊する。

ひたすらに木霊する。

「いい、や……、そんなこと、そんなことしないわッ！ ただ、私はアザゼル様に献上しよう――」

『憚るなよ、小娘。舐めるなよ、天龍を』

見てわからないとでも？ ドライグはただ低く言葉を返す。

レイナーレは知らなかった。あのような化け物が封印された代物だとは思ひもしない。

世界に13種しか存在を確認されていない神滅具に、一生で出逢うことなど宝くじでしかない。

しかし、それは幸運のものではないが。

「——レイナーレ」

一誠が口を開く。

静かに、言葉を発し、そして前へ歩いていく。

「だ、だから、なんで知ってるわけ!? 会ったことなんてないじゃない! それもさつきまで何も知らないガキだった男がッ!」

一誠は、それに返さない。

知らない。なぜ、名前が浮かんだのかは知らない。

胸うちに残ったあの感情は偽物ではないだろう。しかし、その感情を“この”世界でひけらかしても意味などない。

「どうすんだよ、殺しにくるか」

おぼろげ過ぎてなにもかも夢心地のようだ。

既視感があるようで、初めて見るようだ。

おかしいな感覚だった。不思議でたまらない。

「こないで……、来るなッ! 来るんじゃないわよッ!」

一歩、進めば、一歩下がる。

その幅は狭まらない。

歩きたび、踏みしめるたび。

怖くなる。

一誠がもう一度、歩を進めようとした、その瞬間だった。

紅が丸く、地に描かれてゆく。

精密な動きをしながら、優雅に、そして激しく文様を刻み込んでいく。

「——あら、どこぞの化け物でも入り込んだのかと思えば、ウチの生徒じゃない」
紅い髪。

長いそれを右腕でふわりと払う。

気品に満ちた動作に、場を支配される。

文字通り空気が変わった。

肢体豊かな女性。雰囲気から見て取れるほどに嬢としてのものを備えている。

「あらあら、かわいい生徒さんと……あら、穢いですわ。墮天使さんがいらつしやつたのですね」

黒髪の女性が連れて現れる。

手元に手をやり、笑みをこぼす。

しかし、瞳にはどこかイラつき——レイナーレに対して——を見せていた。

そのせい、口調に威圧があり、指先を弄んでいる。

レイナーレはこれで、一誠と挟まれたような形になってしまう。

レイナーレが憎々しげに口を開く。

「グレモリーの娘か……ッ」

怨敵にでも吐くかのような口調。

レイナーレは光槍を数本形成するが、やはり、通常のものよりも小さく、うまく力を使えていない。

「あら、ごめんあそばせ。……でも、爵位もなにもない下級墮天使にそんな口を聞かれるいわれはなくてよ。それに——なに、この縄張りに入ってくれてるのかしら」

リアス・グレモリー。

公爵の位を持つ名家生まれのお嬢様。グレモリー特有である紅髪を靡かせ、彼女は眼光を光らせそう言った。

悪魔の目は暗闇でこそ、力を最大限に使える。それほどに、妖しい眼差しがレイナーレを射抜いていた。

「……人間の地域に寄生する蝙蝠風情がッ！ 縄張り？ ふざけんじやないわ。ここは人間の里よ。我らは干渉せど、ここを私有地にするなど傲慢じゃないのかしら」

怒りに任せて出た言葉は汚く相手へ飛来する。しかし、レイナーレは冷静を取り戻しつつ、皮肉げに主張した。

リアスはそれに対して鼻を鳴らし、苦笑する。

「へえ……そもそも、ここが人間のものだと誰が決めたのかしら」

「は？　悪魔は脳がないの？」

何を言っているのか、レイナーレはただバカにしたように相手を見下す。

一誠はただ、両者から目を離さない。リアスもチラチラと一誠の腕を一瞥しながら話を進める。

「だつたらこの地にもともとあつたかもしれない山は？　埋め立てた海。さらには迫害

し、殺し尽くした生き物。人は人間以外の種を荒げてここに住んでるんじゃないやなくて？」

暴論である。しかし、一誠には輪郭程度ならば理解ができた。

野山に住む動物を殺し、山を壊し、土地を変えてきたのも人である。人がそれを肯定している以上、悪魔が最悪、人をなぶり殺しにし、支配するのも極論としては有りなのだ。

武器がなければ、全ての人間は、同型の話せる犬のようなものだ。生きる年月、能力、力がそれこそ、有りすぎる故に。

彼女、リアスは、

「植民地もそう。弱い者が強い者に統治されるのは摂理よ。それに、私はここに入ったはぐれやあなたのような人間を誑かす悪鬼を始末するのが仕事。人に直接手を出すこ

「とはない」

リアスからすれば正直、このような説明はどうでもいい。

とにかく、早く片を付け、レイナーレの後方で突っ立つている少年とコンタクトがとりたいたのである。

「さあ、選びなさい。死ぬ？ 逃げる？」

「屁理屈を……ッ」

レイナーレは焦りを隠さない。

悪魔ならばと下に見てはいたが、彼女は上級悪魔である。

それも魔王の妹君。

本来ならば、敵対していい階級の相手ではない。

後方に龍。前方に紅髪の悪魔。さらにその眷属。

分が悪い、とすら言えない。

選ぶしかないのだ。死か、生か。

「……チッ」

レイナーレは上空に飛び退き、そのまま月と重なる方へと翼をはためかす。

リアスの介入で、和らげられた一誠の重圧。それにより、彼女はびつしりと汗をかきながらも体を動かすことができた。

しかし、その際に置き土産として、槍を数本放っていくのは、彼女が小物であることを体言しているかのようだ。

「朱乃」

「はい、部長」

朱乃と呼ばれる女性が手元から魔法陣を形成する。

向かいくる槍は三本。

彼女は片手をかざし、それらをいなす。

「……脆い槍、墮天使かもあやしいわ」

ガラス細工を叩きつけたような音が辺りに響き、キラキラと光りながら四散する。そして、地に落ちるころには姿を消していた。

「さて——あなた、二年の兵藤とか言ってたっけ？」

肩を軽く解しながら、歩を進める。長い髪を少し鬱陶しそうによける。

そして、腰に手をおき、ジト目で一誠を見つめる。

「な、なんすか」

「ふふん、いい顔してんじゃん。あ……してるわね」

恥ずかしそうに頬を染め、こほん一つ。

仕切り直しと言わんばかりに、表情は改まっていた。

「春先で少し寒いし、お茶でもしながら話さない？」



連れられてこられたのは、怪しげな部室。その名は『小悪魔研究部』。

部屋の中には、ロウソクが幾本も立てられており、魔法陣も複数描かれている。リアスは部室に入った途端に、胸元のリボンを軽めにし、座椅子に腰をかけた。

「ああ、この名前のこと？」

いまだに入り口にかけられた部室の名前プレートに目をやる一誠にリアスが尋ねる。

「あ、はい。こんな部活よく申請通りましたね……」

「まあね。無理矢理よ、無理矢理。ぶっちゃけ眷属の隠れ蓑だもの。名前なんて適当でいいよ」

「まあ、嘘ばかり。理想の王子様が現れるまでに、人間で流行りの小悪魔を目指す、なんて言って一年生の時創設しましたのに。『悪魔の私なら小悪魔くらい楽勝ね!』なんて……今は恥ずかしいの？」

「は、はあ!？」

なんとなくダルそうな様子で説明するリアスに一誠は苦笑いする。

しかし、朱乃の思わぬ暴露によつて一誠の彼女に対するイメージはきつと変わつてしまふだろう。

必死に羞恥で真つ赤に染めた顔を晒しながら弁解しようとする彼女は年相応の乙女である。

朱乃に至つては「そうなの、それは可愛らしい」などとからかつてゐるばかりだが。

それらが収束し、朱乃がお盆に紅茶を入れたカップを持ち、それぞれに手渡してくる。

その数、四つ。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

一誠は手渡された紅茶を啜りつつ、朱乃を目で追つていた。

なぜ、四つなんだ？ そんな事を頭に思い浮かべながらまた啜る。

朱乃は一誠の背後へと移動していた。

「はい、小猫ちゃん」

「ブツ——」

一誠は思わず、紅茶をこぼしてしまふ。

大きく見開かれた瞳に映つたのは、

「もしかもしや、もきゆもきゆ、ごくん。ズズー……ごほつ！」

物凄い睨みながら、ひたすらにお菓子（洋菓子と菓子なんでもござれ）を頬張り、紅茶を飲み干す白い何か。

そして、目があつた途端に、全身の毛を逆立て、喉に詰まらせている。

「あらあら、紹介していませんでしたわね。この子は塔城小猫ちゃんですわ」

「朱乃、それを言うなら私たちも紹介してないじゃない」

「あら、そうでした」

笑い合う二人。長身美人の二人が頬を緩める姿はとても絵になる。

まあ、睨みながら、お菓子を食べる小猫がいなければ。



「改めて紹介するわね。私がこの部活の部長、リアス・グレモリー。で、こっちが」
「姫島朱乃と申します」

「……お前から名乗らないならやです」

「小猫ちゃん、もう紹介しちやいましたわ。忘れましたの？ ふふ」

顔を赤くしながら朱乃の服をぐいぐいと引つ張り、キツと睨む。

ただ、小柄さ相まって、その動作は駄々っ子のようにしか見えない。

それでも微笑ましくする朱乃に、小猫は地団駄する。

「小猫、男嫌いだから。兵藤君を特別に嫌っているんじゃないわ。あなたも含めて男が嫌いなだけだから安心してね」

リアスが眉を逆さにして、困った風に笑いながら言うが、安心の二文字の意味が一誠には分からなかった。

そして、正面に向かってリアス・グレモリー。その右側に姫島朱乃。

そして、左に塔城小猫。

全員が席につき、

「まあ、後一人いるんだけど、今は『契約』に行ってるのよ。ごめんなさいね」

リアスは話を進める。

「――で、悪魔って知ってるかしら？」

緩やかな雰囲気から一転。

温度が下がった。

面影

夜に鳴く。薄く光を注ぐ月に被る黒いもの。

悪魔とは、何者か。

蝙蝠の化身か。

それは吸血鬼だ。

では、その背に生える翼はいかに。

人を騙し、とりつく悪の象徴。

果たしてそれが悪魔なのか。

人は、悪魔をどう見ている。妖怪のように、幽霊のようにあやふやなものとして認識しているものもいる。

そんなイメージで記憶している。

しかし、目の前の存在が否定するだろう。

彼らも“生き物”に変わりはない。

「——悪魔、ですか？」

一誠は神妙な表情でリアスに問う。

若干薄暗い部屋に、唾液を飲み込む音がした。

彼女——リアスは背もたれにかけていた背中を起こし、多少前のめりになりながら彼の眼を覗いている。

「ええ、悪魔。さつきからいろいろな単語があつたでしょう？　眷属、契約。それに……

あの墮天使」

黒い翼、宙を優雅に舞う姿。

殺気。

見た。墮天使を見た。

時折日常に影を見せている裏の者たち。しかし、人はそれに気がつかない。

一誠もまたそう。

知りえない。

ただ、心が赤い龍を覚えている。

記憶よりもずっと曖昧な認識。

それでも、知っていた気がした。

そして、再び。

懐かしさに視界を歪めるくらいには、感情を揺らして、その感覚をもう一度知る。

「平たく言えば私たちはあの墮天使の敵側とでも言えばいいのね。そこらへんは聖書でも読めばわかんじゃない？」

「部長、すこし適当になっていきます。ほら、足もすっかりなさい。だらしがいいですわ」
読めば頭を痛める書物へ丸投げをしようとするのはどうだろう。

リアスは足を組み直し、息を吐いた。終始、面倒くさそうな彼女が真剣なそれになつたかと思えばこのような有り様だ。

朱乃はリアスの足を右手の甲でピシャリと叩き、綺麗な姿勢へ正すように諭す。

リアスは顔をしかめ、文句を言いたそうに口元を尖らせるが、やがて諦めがついたように、こう口にした。

「ざつと言うわ。眷属つてのは貴族悪魔が従える従者みたいな感じね。下僕ともいうけど、私は好きじゃなくてね。後は契約は、悪魔がする人とのギブアンドテイク。魂を抜くとかいうけど、そんな事はしない。するとすれば、契約による奇跡でしか起こせないような事象ね。例えば死んだ息子を生き返らせるとか。まあ、そこは何十億払つても出来ないことをするわけだし、実際に何十億も払えば破産で死ぬだろうから、息子が助かるだけ得でしょう」

リアスは饒舌に説明する。

少し早めに動かされた口からはさつきさと説明を終わらしてしまおうといった意図が

汲み取れる。

そんなことは、今はいいじゃない、とでも言いたげで、先ほどから指を椅子の肘掛けにトントンと鳴らしている。

「ま、魂抜くとかしたことないけど」

そんな事を笑いながら話す彼女を見て、一誠は悪魔というものを認識し始めていた。合理的。しかし、感情は豊かである。

死を恐れる。泣く。恨む。笑う。

おそらくは人より損得勘定が発達でもしているのか。

ただ、彼女は、多分——聞くに及ぶ、人の認識内の存在とはかけ離れた人物であると、一誠は思う。

そこまで話を終えて、リアスは楽しそうな声をあげた。

座椅子の肘掛けを両手で掴み、ずいっと身を乗り出している。

「そんなことよりさ、ねえ、見せてよ。なんかすっごいの持つてんでしょ？ ドラゴンよ
ね？ ね？ 初めて見るわあ！ 朱乃！」

話を終えたあたりから、そわそわしていたのはこのせいかな。

ドラゴンの神器は『龍の手』以外であれば、希少なものがおい。

というよりも、名のある龍以外が神器となれば、龍の手となり、それ以外であれば名

龍のものとなる。

彼女の反応は決しておかしなわけではなかった。

動物園に連れてこられた子供のような反応。

これが彼女の性格なのだろうか。

「部長、悪い癖が出ていますわよ。グレモリーの名において、少なくとも客人の彼の前でその態度はよろしくないんじゃないやなくて？」

「……な、なによ。はしゃぐわよ、私だって。……まだ、17なんだから。名前ばかり重くて肩が凝るわ」

「また、そんなこと……。兵藤君。あなたはついさつき『神器』を初めて使ったという認識でいいのですか？」

朱乃が口調を窘める。再びリアスが身を乗り出しそうになれば、腕で遮り、ため息をつく。

先ほど、墮天使に対して仰々しい物言いをしていたりアスではないかのように、目を輝かせていた。

口調すらもどこか『素』に戻ったみたい。

朱乃の質問に一誠は答える。

「は、はい。そう、ですね。……なんだか使い慣れているような感覚があるんです。それ

に——持っていることが当然というか、とにかく違和感がないんです。どうすればいいのか、もとから入っていた情報を引つ張り出せばいいような。……なにいつてるか分かりませんよね」

一誠の困惑。

神器という単語すら、知っているような気がする。

分かってしまうのだから、仕方がない。

こうなると知っているだけなのだから、説明できない。

ただ、リアスにとつてそれは僥倖である。

心の中で、盛大にガッツポーズを決め込むくらいには。

強い仲間が増えるのは、例え、どの種族であろうと等しく嬉しい。

強くなくとも、新しい仲間には心が躍る。家族が増える。

もしかしたら。

そんな気持ちに笑みを零してしまう。

「ふふ……ああ、ごめんなさい、気持ち悪かったわね。いきなり笑って。よし、兵藤く——

いや、『イツセー』って呼んでもいい？」

悪魔笑みを浮かべていたリアスは、それに気づいたのか自重し、一誠に尋ねる。

『イツセー』

親しみを込めて、名を呼ぶ。

その、形いい唇から紡がれる名前。名前には呪いがある。
幾星霜。

どんなに変わっても。

また。もう一度、呼ばれる名前は、一誠でなく、"イツセー"で。

その時、一誠の目に影が指したような気がした。暗い影ではない。

『イツセーって呼んでいいかしら？』

誰かの面"影"だ。

「はい、そのほうがしつくりきます。——とても」

一誠は笑みながらそう、答えた。

どんな顔をしていたか、彼は覚えていない。

切ない。

なぜ、人は、別れを悲しむのだろうか。

再び会えた人が変わっていたら、嫌だろうか。

それでも会えたなら、きつと、笑うのだろうか。

脳には、今も消えかけている笑顔がある。じわじわと、消されていく声がある。

心のそれさえ、世界に持って行かれる。

ただ、今は目の前の彼女の優しそうな顔を、声を「誰か」に重ねて覚えていよう。忘れないように。

砂浜に描いた一つの絵は、波がくるごとに薄くなる。

いつか、必ず綺麗な浜に姿を戻す。

どこかの自分が叫んでいる気がした。

嫌だ、消えるなど叫んでいる気がした。

重なる何かと目の前の人。

今だけ、頭に描いて残してみよう。

今度は消えませんが。

時刻は既に7時を越えている。

春の夜はそれなりに冷える。

部室の窓から見える夜桜は、夜風に煽られ花を散らしていた。



『……二つの意思を感じる』

赤い龍が腰を降ろしている。

尾をとぐろのように、前方へと持ってこさせ、そこに顔を埋めていた。

『少しずつ、薄れていく』

時計が針を進めるごとに、後ろにあつた数字が墜ちていく。

それをひたすら、繰り返し、繰り返し。

ドライグは、夢を見ている。

よく、目の当たりにする。

不思議な感覚の夢。

残響。肺から全てが吐き出される。心臓に異常を確認。視界は血で染まり、よく見えない。

『相棒！ 目を、目を開けろ！』

リンクしている体から、感じる冷たさ。俺の、相棒。

目の前で、泣いている女がいた。

綺麗な容姿を歪め、辛そうに泣いていた。

紅髪を涙で滲んだ頬にべったりとつけ、血でより染めた髪を相棒の顔へと垂らし。

とても痛そうだ。龍の俺がそう感じてしまった。

神経は仕事を止めようと脳に指令でも出されたか。あまりの苦痛に手をあげたか。

相棒から伝わる痛みは薄い。

もう、あまり痛くはない。

なだれ込んでくる感情。

怖い。

俺の感情ではない。

俺は恐怖を感じたことなどない。

認めたことなどないのだ。

しかし、相棒は恐れている。

みんなが死ぬことを恐れていた。

目の前の女が死ぬのを、心底。

その女の腕は片方しか残っちゃいない。千切られたように、無くなっている腕を庇お

うともせずに、相棒を抱いている。

口元から血を吐いた。

もう、死ぬな。この女は。

何千と生きて分かったことがある。それは生き物の死ぬ時だ。

何万と殺して知った。

こいつはもう死ぬ。

万華鏡を覗いたような空が不快だ。空を覆い、地を食い始めていた。

二匹の化物が殺し合い、反動が起こる。ありとあらゆる次元が破壊され、消され、そこに現れたのはこんな世界だ。

雲もない。太陽もない。

見えるのは、万華鏡だ。

黒い髪も、青い髪も、金の髪も。みんな、みんな寝ていた。

ただ、寝息はない。

黒い翼、白い鎧。

ああ、俺のライバルも消えたのか。

彼らの顔は安らかではない。憤怒や困惑、理解の範疇を超えたもの。様々な感情を面にだして、固まっていた。

死後硬直を向かえたのか、そのままに。

しかし、それも後僅かだろう。

万華鏡がそこまで迫っていた。

辛さは心を砕く。

神器というのは厄介だ。

こんな小僧の思いさえも俺は共感できる。
知りたくなかった。こんな辛いのならば。

ただ、こいつと見る夢は実に楽しい。こんな男に宿れたのは、なんの偶然だったのだ
ろう。

逢えてよかった。

お前でよかった。

最期の時に。お前で。

ただ……わがままを最期に言ってもいいか？

相棒。

次があるのなら、二度、三度。

俺は――、

――お前がいい。

体が一瞬、宙に浮いた。

体を支えていた力が失われる。

相棒の目がこれを映せないで良かった。いや、わかっているのだろう。それでも。

彼女の最期を見なくて良かった。

既に、色とりどりの髪色はない。

目の前まで迫る万華鏡に、息をつく。諦め。
もう、眠ろうか、相棒。

俺は、目を閉じる。

しかし、その瞬間、紅の鱗が過ぎった気がした。

ドライグは感じている。

これは一つの心。

もう、一つは「今まで」の自分とそっくりである。

同じ。

しかし、今の彼は違う。

何かが混ざり合い、そして生まれた一つの人格。

『——懐かしく、辛く。これが、相棒との記憶だとすれば』

終わりが来るのか。いつか。

『夢が短くなっている。溶けていくように、失われているように』

忘れるのだろうか。

ドライグはこの夢を、伝えることはしない。

壊れかねない、想いなら。

なくしてもいいじゃないか。

もう、会えない人を想って意味はあるか？

これが、ただの夢見の暴走で、ありえない事を映す夢の一つならどれだけ楽になるのか。

ドライグは、己をごまかした。

『もう、見たくはないな』

本を閉じ、本棚の奥に仕舞い込むように、記憶を閉じた。

再度、……再度。

心が浮遊していた。

例えるなら、雲の上に寝転がっているみたいに、ふわふわと浮かんでいるように、体が軽い。

そこから眺める景色は憎いものが多いが、それでも目を離すことは出来ない。夢とはそういうものだ。

遠ざかる意識は、消えない。

変な感覚だった。

遠くなっていくのに、いつまでも見えている景色は、色褪せない。

それでいて、とても残酷なものだった。

色褪せないからそこ、嫌だ。

どうせならば、消えてほしい夢。

しかし、残しておかなければいけないと、誰かがすぐ隣でつぶやいていた。横は覗けない。首が曲がらない。目が追えない。

全部、全部。夢のせいだ。

しかし、目が覚めれば全てが消える。こういうときだけ、本当に夢らしい。涙を流していても、内容は忘れていく。

とても、夢らしい。

そんな日が、続いていた。



重なる笑顔にはつとずる。

どこか別の位置へと送っていた意識を心へと戻す。

こういう時は本当に、現実との境目が難しいなと一誠は思う。

時々、分らない。

今が夢なのか、現実なのか。

実際に夢のような、おかしなファンタジーが自分を迎えているのだから仕方がない。

しかし、そういうのとはまた違う。

比喩的なものでなく、感覚として、分からないときがある。

一誠は妄想したことがあった。

この世界と夢の向こうの世界。

睡眠という扉を介して、向こうにも同じように世界、現実があるのではないかと。夢のことは覚えていない。

だから、向こうの世界に行っている間は、この世界のこととも夢と思い、覚えていないのではないか。

そんな妄想をしたことがある。

睡眠の6〜7時間は夢の世界で、こちらと同じ起床している時間ぶん。

いわゆる時間の流れが違うのではないか、などとかかなりおかしな妄想をしていた。ただ——夢であってほしいと切実に願う。

起きる度、吐きそうになる。

振られたような、殴られたような。昔見た映画のようで、ヒロインが奪われる、殺される、取られる。

そんな時と少しだけ似ているような気がした。

異常だと思っていた。

たかが夢のくせに——現実には干渉しすぎだと思った。

体調にすら影響する夢など夢の範囲であっていいはずもない。

どこか、精神的に病んでいるのだと決めつけ、病院で薬を処方して貰うこともあった。おかしな人間だと思った。

しかし、その気持ち悪さも夜には消える。そして、再び夢を見ては、忘れながらも――

夢を何度も何度も忘れた。

しかし、自分のどこかにある意識が度々見せようとしてくる。

そして、何度も何度も消された。

それはもう、朝は吐きそうであつたのに、突然消える。

そして、どうしてここまで苦しかったのか理解出来ない。それほどにそのときの感覚はなくなる。

本当におかしな感覚だつた。

——そう。まるで夢を、喰われているかのように。

「イツセー?」

優しい彼女の瞳が彼を覗く。

下の位置から、一誠を上目で見るように。

「あ、ああ。すいません。ボーとしちやつて」

込み上げる感情。

知らない。

覚えのない、感情。

失礼だと思つた。

初対面同然の彼女に対して抱くにはどこか重々しい。

しかし、体が勝手に動いてしまう。

抱きしめたい——そう、思つてしまう。

誰だ。誰のせいで、こんなことをする。

やはり、知らなかつた。

意志とは違い、ただ触れたいと、指先が動く。動いた。

一誠の手がリアスの頬へと伸びる。

きよんとするリアスに、寂しそうな瞳と抗いの心を映した表情の一誠が。

その男らしいゴツゴツとした右腕がリアスへ伸びようとして——、

「君、何してる」

言葉と共に剣が飛んできた。

一誠の右腕に刺さる位置。剣が飛んできた。

正確過ぎる投擲。

銀色を光らせる刀剣は、どこか悪魔退治にでも使われそうで。

一誠に向けて、殺意を乗せて。

剣は飛んできた。

『Boost!!』

右腕に紅蓮の炎が盛る。

一度に部室を赤く染め上げ、音声と共に緑光を充満させた。
籠手で弾かれた剣は粒子のように宙へ消えゆく。

「——っ」

息をのむ。

殺意は二度目だが、そう慣れない。だが、心臓に高鳴りはなかった。おかしい心臓に、
変わりなどなかった。

扉はいつの間にか開いている。

音なく、開閉され、侵入してきたものがある。

見えたのは、金の髪色だった。

サラリと流れるような質感に、特徴的な涙ホクロ。

目元は美しく、口元は無表情に結ばれていた。

その彼が口を開く。

「——この気、やはりドラゴンか」

その青年は口元に歪みを見せた。

右手に光の粒子が集い、形を成していく。

夜をより濃く、黒く染める。

「ちようどいい。この剣、主の騎士としてその不躰者に捧げよう」

黒い刀身に、赤い線が渦を巻いていた。毒々しい。

彼はその剣を一誠へと向ける。

「祐人：!? どうしたのよ!」

リアスが軽い叫びをあげた。

朱乃は何かを悟ったような顔をした。お菓子を非難させ頬張り続けているとはいえ、小猫も睨みながら訝しげな瞳を向けている。

「龍の血の匂いがしたからね。いや、まさかだとは思ったけれど。——ドラゴンは問わず殺さねばならない」

憎い。

ただ憎い。

それだけを映す眼光は、鋭い。

剣眼とでも言おうか。

見るだけで、刺そうとする彼の目は殺気のみで作られていると言っても信じてしま
う。

強烈な意思だった。

『——相棒。それを今喰らうなよ？ あれは龍殺しの力がある。大した力もないが、人の肉体ではな』

ドライグが一誠にのみ聞こえるよう、口にした。

この会話もどこか慣れたものだと言つた一誠は思う。

そこに違和感など、ない。最初から。

「祐人！ その剣は使つてはダメだつて言つたじゃない！ あなたにかすりでもしたらどうするのよ！」

「部長。自身の剣に裂かれるならそれは、騎士として消えるべきです」

「それにイツセーはお客よ！ よしなさい！」

リアスの制止。

しかし、祐人はそれを一瞥するが、どうにも納得などしてはいない。

ただ——彼がその剣で身を汚した場合、どうしてそこまで危険なのか。一誠は現時点では図れなかった。

彼は言葉を吐いた。

「ドラゴンはね——世界の力なんかじゃない。戦、悪意を呼ぶ笛だ。いつの世も、龍は殺されてきた。わかるかい？ 龍は、人を苦しめる。意志でなくとも、利用されたとして

も。その強い因子は——人を壊したんだ」

まるでそれを見てきたかのように語る。呟く。

更に訴える。

あらゆる伝達の意識を持って、当人は一誠へ届けた。

龍が憎い。

「君のことは知らないよ。同じ学校ということくらいしか。それでも——部長に龍を宿す手で触るんじゃない」

言い切る。

そこまで、言い切る。

彼はそこまで言った後、剣を消した。まるで、意識が戻った後のように、ハツとしていた。

そして、腰を曲げる。

「……申し訳ありません、部長。多少興奮してしまいました。彼に非もないのは理解しています——抑えられずすいませんでした」

恥を込めた謝罪だった。

後悔ともいう。

一時の感情に振り回されたことを真に悔いていた。

一誠は、先ほどまで憎々しく口を開いていた祐人の切り替えに驚いた。

「それを言うのはイツセーによ」

リアスが咎めるようにそう口にする。祐人は、渋い顔をしながらも一誠に向き直り、視線を合わせた。

「すまなかつたね。……神器関係は意識をしないように心がけてはいたんだ。人は選べない。しかし、あまりにも龍気が強くて……ごめん、どうかしてたよ。同級生を斬ろうとするなんて」

頭を下げた。

どうしたらこのような意識の切り替えが出来るのだろうか。あまりに激しい。痛々しく、嘆きの意志。

よく止められたと、そう誉めてしまいそうなほどに。

激情。

ただ——、祐人はそこで一旦言葉を切り、再び一誠を睨み、見据えた。

「二応聞くけど——君は、人間、でいいのかい？」

たった、一行。それだけを問う。

しかし、それに意味はどれだけ乗っているのだろう。

ずしりと重圧のある言葉に、一誠は言霊というものを僅かばかり信じた。

よく今までバレなかつたな、とでも言いたげな表情。

一誠は返答した。

「どういう意味なんだ？」

「正直——人の気配より、龍の気配が濃い。神器がある以上、人であると信じたいけれど、神器は移植が可能だ。年を重ねれば人に化けることも出来ると聞かし、君は——」

リアスが口を開こうとした。

止めさせようと思つたのだらう。

しかし、それより早く、部屋に声を響かせた者がいる。

それは、帝王の令だつた。

『おい、小悪魔。あまり、調子に乗り、しこくするなよ』

嘲笑のこもつた声音。それでいて、ものをいわせぬ圧倒感。

部活の名の通り、貴様など小悪魔だ。ふざけた調子で、そう言う。

しかし、龍のふざけは相手を食らう前の遊びだ。猫がネズミを取るときのように。

「イツセー……今のは」

リアスが手と手を握り締めながら、恐る恐るといった様子で聞いてくる。

——窓を震わせたそれ。

体を否応なく縛り上げ、聞くものの思考をどこか抗いがたいなにかに変更させる言の力。

まさしく、帝王の令だった。

祐人の額に汗が浮かんだ。

朱乃の笑顔が消える。

小猫が菓子を食べるのをやめた。

『Boost!!』

左腕にも右腕同様の炎が駆けた。

包み込むそれは、やがて緑光を発し、形態を露わにする。

一誠の両腕を覆う、紅蓮の帝王。

その、腕。

『悪魔と会話をするなど “生前の戦争” 以来だな。リアス・グレモリー』

天から見下ろす龍の瞳は、上級、下級などと定めることもしない。どれも変わらず、ただ、悪魔である。

「……もしかして。いや、でも……赤い……、でも両手に籠手では——」

リアスが自身の知識を走馬灯のように素早く逡巡させた。

その中に、両手の籠手は資料にない。肩口までを覆うものもない。

つまり、知らない。

『赤龍帝ドライブ。名前くらい聞いたことがあるはずだ』

部内に電撃が走り抜けた。

唇を震わせている。

戦慄した。

この世界に置いて、ドライブの名は大きすぎる。それこそ、見つけ次第、宿主は処刑されたほうがいいとまで言われるほどに。

鼓動を早くさせる。

「……赤龍帝？」

「……リアス、これは眷属どうこうなどという軽いものではありませんわ。報告義務が起きます」

リアスの呆けた声が部室に木霊した。朱乃のが彼女の耳元で囁き、深刻そうな顔をす
る。

「……魔王を殺し、神を瀕死にしたところで再び喧嘩を始め——共に相死にした最強の
一角。将棋で言えばきつと飛車角の……角」

小猫がそこでひさびさに口を開く。今は飴を舐めていた。

しかし、その説明からもわかるように、やがて死にかけて神が最期に行った業が、二

匹の封印でもある。

ただ、神が死んだとは、伝えられていない。

「……なぜ、赤い龍帝が」

祐人から漏れた言葉。

途方もない。

力を肉体の許す限り、永遠に増加する化物が目の前にいた。

彼は、自分がバカだと思った。

桁が違った。

龍が憎いからと、簡単に手を出していいような存在ではない。

世界中の神、そのヒエラルキーの頂上に構えていた神を超えるとされた龍の帝王。

神格持ちの龍でしか、相手にはならず。

三種の軍すらも、何億という兵士を引き連れた軍すらも止められなかった二匹の片割れ。

触れてはいけない。

書物でしか、見たことのない伝説の龍が言葉を発し、

籠手からこちらを凝視しているのが分かる。

「……ドライブ。一つ、聞いてもいい？」

『なんだ、娘』

リアスは息をのんだ。

兄より、上の存在はいないと信じていた。

そう、教わってきた。

周囲にも緊張が走る。

「い、ん。ごほん。イツセーは……あなたの力に呑まれない？」

聞きたいこと。それは彼の安否。

平気なのか。

生きることに支障はないか。

不安だった。

不思議と気をかけてしまう。

何故だろう。

世話を焼きたい。

『ああ、問題などないな。むしろ——俺はこいつを死なせない』

リアスは見えたような気がした。

籠手越しにはない。

一誠の背後に首を持ち上げ、双眸で射抜く龍の影が見えたような気がした。

「……イツセー。よく聞きなさい」

「は、はい。なんですか?」

リアスは一誠の肩を強く、両側から掴んだ。

そして、顔を近づけ、視線の位置を同じくする。

睫毛さえ、数えられるほどに距離は近い。

「あなたの中にいるのは普通じゃない。世界を滅ぼせるほどに暴れまわったドラゴンよ。意志だけはしっかりしなさい。忘れないで。あなたが手綱を握るの。離しちやダメよ。いい? なにかあつたら言いなさい」

冗談などは微塵もなかった。

ちよつと前までの面倒臭そうな彼女ではない。

一誠にそのような危険物を宿したような意識はない。

それでも、外から見れば、それはやはり危険であり、暴走すれば容易く国が消える。もはや、彼一人の責任ではない。

知ってしまった。

だから、

「……ありがとうございます」

愛しく感じる、想い。

どこの、世界であっても、彼女の根幹は変わらない。

どこまでもお姉さんで、優しい。

優しい、人だった。

「お願いがあります」

離れたくない。

わかんない。どうして、こんな思いが湧き出るのがを教えてくださいませんか。

「先輩の眷属に俺を加えることって出来ますか？ 悪魔へ人が仲間に入る方法はありませんか？」

どこまでも、抑えの効かない魔法にかかったように、一誠は、再び彼女のもとへ。

——リアスの所へ。

錯覚好意

彼女との出逢いは遙か——昔。何てことは言えない。

昔なんてなかった。

過去なんて存在は、もう失った。

世界の軸は少し、ずれている。

ならば、一誠に人以外の過去なんて、ない。

文字通り、世界が違う。

彼もまた、違う。

心はどこかに残っていたとして、魂は一度砕かれ、混ぜられ、戻らない。

牛乳に垂らしたコーヒー。

その二つを元通り分けることなどもう出来ないのだ。

彼は消えた。

そして——やり残した後悔と苦痛と嘆きと、後一つ。

目的がこびりつくように残っている。

まだ、どこかで彼女の姿を追いかけ、苦しんでいた。

人を失うという想いに徹底的に固執した恐ろしさが、どこかに想いを喰われず、残っていた。



肩を強く掴んだりアスが息をのんだ。少しだけ、指先が振動している。

彼女はずつと怖かった。

どうせならば、出逢いをなくしてしまえば楽なのだ。

話を聞いたときから、知ったときからずつと怖い。

それでも、一誠の身を案じた。彼女は王である。悪魔である。グレモリーである。

しかし、その前に。

優しい、悪魔であった。

心を痛めることをあまり知らない。

人の世に居すぎたか。

たまたま出逢った男の子を見過ごせないのは、人に触れすぎたか。

俗の八割の悪魔ならば、一誠をこの場で処刑するものもいよう。

封印をかけながら、洗脳するものもいるに違いない。

すぐさま報告し、コキュートスへと墮とせば、赤い龍は二度と日の目を見ることはない。

そうやって、少しずつ消していけばいい。しかし、

「……本当に？」

彼女にはそう、出来ない。

悪魔は人を愛せる。

人は、悪魔を愛せる。

ほぼ確信している。

心を通わせる、言葉を通わせる。

やはり、愛せる。

彼女は、家族として——赤龍帝を愛せる。

「……俺は、先輩の眷属になれるのでしょうか」

少し伏し目の一誠がいう。

部室には、冷たさが通っていた。

不安、だった。

理由など知らない。ただ、脳内に浮かぶ景色。

それは紅色に染まり、そこに誰かがいるのだ。

その紅は血なのかはわからない。

しかし、その誰かの心が痛い。

餓えている。

誰かは誰かの温もりに餓えていた。

離さないでいたい。

違くとも。

存在が本当は違うとして。

二度目——。

離さないで、いたいんだ。

『私は……ここにいる兵藤一誠を愛しています』

俺の脳内空耳現象もここまですれば病気ではないかと、一誠は思う。

そして、どれだけ。

そう、どれだけ。

彼女に恋をしているのか。

この気持ちは分からない。

まるで誰かの想いにリンクしているように、その気持ちを共有しているように。

誰か、取り憑いているのでは？

彼女が好きで好きで好きすぎた青年が、告白して振られ、そしてしょんぼりと道路を歩いているところへ二トントラックが。

そんなものが取り憑いているんじゃないかと疑いたくなる。

胸が熱い。焦げるように、熱い。

おかしい。

本格的に俺はおかしいと一誠は思う。どうしてしまったのだろう。

幼き日に好きな子くらい、いた。

その子と話していてもこんな心音は弾まない。正確には、心音とは違うが。

好き。好きだ。触れて、触れられ、言葉を交わし、彼女の目を見る。

ああ、そっくりだ。

誰と？

さあ。

一秒会えば、三秒蘇る。

三秒見れば、もつと会える。

だから——誰と。

そして、それを喰っていく。端から“心”臓は喰っていく。

想いを、夢を、食べちゃうんだ。
心を心臓に。

魅力の魔力でも彼女は使っているのだろうか。

この進む気持ちにはなんだろうか。

リアスが数秒瞳を閉じてから、再び見据える。

どこか、覚悟が決まっているように見えた。しかし、それでいて、複雑な顔もしている。

「ダメ。……なんて言いたくないわ。本当は。それでもすぐに決めちゃダメ。だって、あなたには両親がいる、家族があるんだもの。……私達はね、みんな家族がいないの。いや、私はいるんだけど——眷属のみんなは。このグレモリー眷属はね、ただのグループでもない。部活でもない。みんなが、寄り添って出来た家族なんだ。……ねえ、イツセー。あなたは——悪魔になって、〃二つ〃の家族を持てる？ 人を捨ててまで私達、グレモリー眷属の家族に入りたい？ あなたは選べる。この子たちは選べなかった。自分の家族か、私達かなんて選ぶ余地がない。〃私達〃しか、いないんだもの。よく考えなさい。人の世は悪魔には少し明るいわ。……あなたが本当に、いや、私達家族が文字通り人生、運命を変えるに値するのかわ、悩みなさい。その力がある限り簡単に生きられるとは分からない。けれど、すぐに決めちゃいけないわ。……あなたの〃人〃と

しての人生は安くないのよ」

リアスは言った。

彼女は、己を悔いていた。

少し前、眷属へと入れてしまおうか、などと心の中で口軽に吐いていたことに。そうだ。

彼には、家族がいる。

この子たちと違う——。

愛してくれる、お父さん、お母さんがいる。

簡単に決めさせてはいけない。

彼が生きたためには、必ずこれから裏の「掘り所」が必要となるだろう。それでも、リアスはギリギリまで悩ませたかった。

いや、悩んでほしい。

悪魔も人も弱いものだとしてリアスと思う。

結局、彼女は彼の両親の気持ちを易々と裏切れない。「悪魔」になれない。なりきれなかった。

それでも、リアスと思う。

相手を想わず、ただ人を利用するのが悪魔ならば。

自分はこのまま、心は人でいよう。

そう、思った。

悪魔でなくとも、心と言葉を持つ“生き物”であるならば、人の心はとても温かい。人が好きだ。

優しい人が好きだ。

この学園に来てそのような人を見てきた。

上級悪魔として例え行動を誤ろうと、“生き物”として正しくありたい。

私は——間違っていない。

決めた。彼女は決めた。

「一旦帰りなさい。そして、家の物をよく見るの。お母さんのご飯をたくさん食べるというわ。写真も、編まれたマフラーも。全部、見てきなさい。それから、あなたの心の先を見て。後悔しないように。——泣かないように」

人を悪魔にする場合、後悔する者が多いという。

悪魔は、“悪”だ。

文字通り。

人は、悪魔を負うものだと認識している。常識として、そうある。

化物になってわかる。

母から戴いた体を化物にして、生き物として違うものになって。

そして、殆どの悪魔眷属は、冥界へ行き。もう、家族と会うことは殆どなくなるのだ。そして——辛くて泣く。

慣れるまで、きつと。

「どこかへ引つ越すわけじゃない。でもね、人が悪魔になるのつて、それくらいのことよ」

リアスは微笑みながら、そして少しおどけながら、右手の人差し指を一誠の唇へと当ててこう、言った。

「後輩よ、よく悩みなさい」



「ただいま」

玄関に吊してある鈴が賑やかな音を響かせる。

家が歓迎しているような気がした。

ドタドタとスリッパと靴下の重なり合う音。そして、慌てる声が入る。

「一誠！ 高校生が帰る時間にしては少し遅いつて自分で思わない!? メールも電話も

出ないもんだからお父さん、今自転車ですこら中、走ってるわよ！」
怒り顔。

皺が増えていた。

手には携帯電話。

お母さんだった。

時刻はあれから随分と経っている。部活もなにもしていない彼が帰るにはどうにも遅い。

「あ、悪い……。マジ、ごめん。部活の見学にいつててき」

「……もう、わかっただから。手を洗って。ご飯は？ お腹空いたでしょう。今日のお弁当、あんまり持たせてなかったから……。さ、早く靴脱いで」

「あ、うん。ありがとう」

リアスの言っていたことがわかる。この温かさを知ってしまった——失えない。ぬるま湯ではない。

心も体も芯まで温める温泉のような、そんな感覚だった。

それから汗だくで帰宅したお父さんと一誠は夕食をとった。

三人で会話をしながら、箸を進める。

どこにでもある、ただの一コマ。

これを彼らは知らないのだろうかと一誠は少し、寂しさを覚える。「見学つてどこ行つたんだ？」

父が聞く。

「……こゝ、小悪魔研究部つてとこだよ」

「なんだそれは！ 今の高校はそんなのがあるのか！」

食卓に響いた笑い声はどこまでも空に伸びていくような気がした。笑い声と共に目端に滲む涙を、父と母はきつと勘違いしている。

笑い涙なんかじゃないんだよ。これは。

一誠はリアスに心で頭を下げた。

幸せだった。

幸せすぎた。

一つ、別のところから見ると家庭の中身はこんなにも。

それから、一誠は自室のありとあらゆるものを漁る。

写真もあつた。

幼い頃に編んでくれたセーター。

初めてもらった年賀状。

これらは、雑に仕舞われていた。

何でもないもの思っていた。

しかし、人から離れるという目線から見れば全てが特別なものへと変わっていく。

『もつと記憶に留めておけ。……どんな感情も想いも消えないように、目で残しておけ』

一誠は頷く。

一誠は過去の感情を思い出しにくい。

喰われていく想いたちを引き止めることが出来ない。

それでも、心で映しておこうと思った。今だけは、心の中に映して。

そして――、

「決めた」

この日、兵藤一誠は人を辞めると、紅髪の王に連絡を入れたのである。



「彼から連絡はありましたか？」

深夜の部屋。

何も灯りはついていなかった。

悪魔の瞳だけが、その闇を明るく映している。

「ええ、あったわ。――彼はグレモリー眷属に加わる」

リアスがそう口にする。

「……どの道、彼はどこかに行かなければならなくなる。そうでなければ、刺客を大量に送られた時に対処できない」

リアスが月を見上げながら、呟いた。それを朱乃が拾い、言った。

「……そう、ですわね。祐人君は大丈夫ですか？」

「眷属入りするのならば、大丈夫だと思わう。彼は私に従うそうよ。イツセーがはぐれにならない限りは手を出さないと誓ったわ」

少しため息をつきながらリアスは言う。それに朱乃が「あら」と声を出し、

「あらあら、今はプライベートなのでですから、口調、楽にしても平気ですわ」

朱乃は少しからかうように言った。リアスはそれを聞いてから、肩を回し、背伸びをする。

「あく、慣れてってほんと怖い。朱乃以外誰一人いないのにさ。——で、朱乃は話があるんだよね？」

わずかに空気が変わった。

朱乃は緩めていた頬を引き締めながら、少し聞きづらそうに言う。

「リアス……彼を眷属にするのはもう決めたのですか？」

不安げな口調。瞳を落とし、指を少しそわつかせている。

彼女の癖なのかもしれない。

リアスはそれを見ながら、若干言いよんどんでから言った。

「うん。……もしかして朱乃は嫌、かな。それでも私は——」

「いえっ。そういうわけではないんです。しかし……赤龍帝は神器の中でも暴走した例が抜けています。神滅具の中では中間とされる神器ですが、破壊という点において比類するものがありません」

彼女の手に魔法陣が出現した。そこから現れた数枚の書類を手に、朱乃はそう、説明する。

「……やっぱり、そうだよね」

「白龍皇に関しては暴走事例でもそこまでひどくはありません。……おそらくは生前から血の気が赤龍帝よりも薄いほうである、という伝承と、能力にあると思われます。白龍皇は力を奪いますが、それは相手がいてこそ。暴走した白龍皇を相手に生き抜ける猛者は多くないのでしょう。力を奪うまでもなく亡くなることが多々あつたそうですから……。しかし、赤龍帝は違います。暴走状態では死に絶えるまで増加させる。それこそ、彼らの禁手は、そのままでも上級悪魔を凌ぐと聞きました。それを増加させ、暴走されては——暴走状態の彼らは生前の天龍にかなりの割合で迫ると聞きます。死ぬまでが遅くないので、あまりの大事にはなりません。かつての天龍に迫る——考えたく

もありません」

再び、魔法陣。

そこには、本来ならば、視覚不可能の魔法をかけられ、嚴重に保管されている映像、それが浮かび上がった。

古の悪魔ならば歯をむき出しにしながら、怒りに震えるであろう。

「——今回、赤龍帝の事案により、一時的に使用許可が降りました」

三大勢力と二天龍の戦争。

赤い一撃。

白い一撃。

白い龍の通り過ぎた後に残る軍の魔力光線。しかし、それは一瞬にして失われていく。

赤い龍の一撃。

口に溜め込む赤い弾が、一瞬にして、数十倍に膨れ上がった。

「それでも……。赤龍帝、神滅具は違うってことか……。今までさ、私ね、おとぎ話だと思っただけ聞いていたんだ。昔に話された絵本の中のお話だと思っただけ。でもね……。目の前にそれが現れて……。あそこでは頑張っただけでグレモリーをやれたけどさ、物凄く怖い。でもさ、彼の目を見たら——そんなことは後回しだっただけで思っただけ。わかんないよ、

どうしてこうなるのか。それでも……やっぱり、あの子を離しちゃいけないって思う。わかんないけど……なんか、ダメなの。他の誰かに取られるくらいなら、もし世界から敵みたいな扱いされちゃうくらいなら——私のもとで離さない。私は手を離さないから」

睨むように朱乃を見やる。

朱乃はそれに対して、不本意だといった手振りをする。

「……そんな顔で見ないで。誰も取り上げるなんて言わないですわ。ただ……リアス。覚悟はあるのね？　あなたが飼うのは、悪魔なんてものじゃないわ。暴走を起こせば日本を一刻もなく、海に変えるような存在です。……彼の神器は異例の神滅具。それも、籠手が二つの亜種。報告は済みましたが、サーゼクス様もかなり危惧されています。かつて赤龍帝の死因の八割は覇龍です。……彼が悪魔という人よりも身体的に優れた種になるのも本来危険なんです。その上、彼は増加を両手の四倍で行います。単純に今までのそれらと比較が出来ません」

朱乃の次から次へと飛んでくる言葉の槍に、リアスは顔を渋くした。

「……なんか、すごい咎められてる気分。でも、朱乃は……いつも助けてくれるね。いろいろ調べてくれたんだ。——ありがとう」

リアスが優しく微笑めば、朱乃も同じく微笑みを浮かべる。

そして、首を柔らかく振り、言った。

「私はリアスの女王ですわ。あなたが行く道程はまず私が均します。あなたはその綺麗な土の上を、どの道を歩くか決めるんです。——友人として、眷属として、家族として。私は、私たちは歩く王の後ろを決してぶれずについて行きますわ」

朱乃の言葉にリアスはうるうるかと視界を歪ませ、むぎゅーと彼女に抱きついた。

「朱乃ー！ ああ、もう！ 大好きー！ めっちゃ好きよ！ ……で、お兄様は他になにか言つてなかった？」

「亜種のこともあり、覚醒していることからおそらくリアスでは駒が足りないのではないのか、と」

「……兵士八つでも足りないのか、やっぱり」

リアスが両手を広げ、八つの指を折る。それを睨みながら悔しそうに唇を噛んだ。

「……大変お伝えしにくいのですが、いえ、これを最初に言わないのは優しさでも、なんでもなかったわ……。サーゼクス様は兵藤君がリアス以外の主でも構わないならば他へ預けようかと」

朱乃が少し逡巡した後、こう告げた。リアスはつかみかかる勢いで、朱乃に迫り、理由を問う。

「は!? な、なんで？」

「まず、駒が足りません。そして、最上級悪魔のものの方が安全ではないか、という理由です」

リアスは、首を振りながら言葉を紡いだ。

「ダメよ！ そんなの！ だって、私たちの所へ来たいって……。学校だってそれじゃないじゃないじゃない……」

朱乃は努めて冷静な声音で彼女に言葉をかける。ゆつくりと、話を始めた。

「落ち着いて、リアス。最後にこう仰られていましたわ。『だが、リアス以外に仕えない場合のみ、兵士の駒をアジユカへ送りなさい。悪魔以外に取られては殺されるか、利用されてしまうだろう。それならば、下僕として引き入れたほうがきつとその子もいい。幸い悪魔は同種族になれるからね。本来ならば、このような事例は認められない。ゲームの存在意義が崩れてしまうからね。……あくまで他に取られるよりかは、という判断に過ぎない。……リアスに伝えなさい。よく思わない者もいるだろう、なにせ、前魔王に軍勢の多くを消したアレだ。心証悪く、突っかかりを覚える輩もいる。ゆえに、負けるな』、これで終わりです」

リアスはそれを聞いてからしばし沈黙する。

しかし、それもやがて終わりを向かえると、ふつきれたように窓を開け放ち、空を見上げた。

「負けるなか……。そうね、悪魔が神滅具所有者を眷属に出来た例はまだない。——私が先人だと、意識しなければダメよね」

「ええ……。彼を信じてみましょう。これからの未来を想像は出来ませんが、毎回踏み出す道だけは間違えないようにしましょう。……私たちは強く生きればいいだけですわ」

進むのは一誠、彼だけではない。

誰もがどこかで不安を心に抱える中で、リアスと朱乃はひたすらに強くあろうとした。

今夜はよく晴れている。

空に雲がなく、月が全ての面積を見せていた。

匂う風の薫りは、春らしい花の色。

リアスは月へ銃を撃つような仕草をし、

「明日からは『新』小悪魔研究部よ！」

見ていた朱乃は一瞬だけ、月が落とされたように錯覚した。

愛しき愚王様

眠気がする。

頬を撫でる風は、窓からそよそよと彼を包んだ。

どこからか、桜の花びらが舞い込んだ。綺麗な桃色を葉に映して、彼の顔横へと舞い込んだ。

一誠はそれを半分開けた瞳でゆっくりと見やる。

ベッドに横たわる布団の匂いは少しだけ、太陽の香りがした。

母が干してくれたのだろうか。

どこか、母さんの香水のような匂いもある。

それは、とても落ち着く、好きな匂いだった。

いい気持ちだ。

体が解されていくように、心が軽くなる。波を打つ。

たった一日で起きた怪奇な現実にどこか夢心地のまま瞼は視線に蓋をした。

全部——夢、だったのだろうか。

睡魔に犯され、働かない頭をどうにかして廻らせる。

寝返りをうちながら、この日を思い出す。

今日こそ、いい夢を。

人として最後に、よき夢を下さい。

知らない誰かに、そう伝えた。

辛いのもつと共有してあげれなくてごめんね、と謝りを入れてしまふ。同情など入

らない、なんて突き返されたらどうしようかと彼は少し笑んだ。

ただ、幸せであつてほしい。

人が目指す先は幸せであつて、ほしいと思う。

だからどうか、最後の人夢を――。

『おやすみ』

君が今日は護つてくれる。

互いに目が覚めて、そしたら、君がいた。

護つてほしい。

弱い人の子をどうか今日だけ護つて。そして、明日から共に生きよう。

彼は、ぐちゃぐちゃだ。

想いを整理できない。

リアスへの想いを仕舞えない。

それは、^レどの^レリアスへだっけと、一誠は訳の分からないことを頭に浮かべた。そして、訳の分からないままに夢を見る。

喰われてもきつと残るような、暖かな夢だった。

誰かの幸せを夢に見る。

たまには別の世界に行けたらと思う。夢の扉の先の世界へ。

この夢は、^レ“終わり”を迎えない。



どこにでもいる。

小さな悪意は、どこにでもいる。

いつの時も、人を拐かす。

ただ、ただ人へこっちこい、こっちこいと手を招く。

怖い。

しかし、甘いのだ。

その甘言こそが己を救うだろう。麻薬のように今だけは、心をすくい上げ、救うだろう。

どうか、惑わされないようにしてほしい。

神様はいないけれど、信じてほしい。その信じる想いだけは、胸へ留めて、生きていく。

そうしなければ——、

「さあ、アーシア」

「はい、レイナーレお姉さま」

連れてかれる。

持つて行かれる。

あの世へ送られる。

「人は嫌でしょう。天使様も嫌でしょう。神様も嫌いでしょう。——それでいいのよ、あなたは。ひたすらに呪うの。恨むの。悔しいよね？ 辛いよね？ 正しい。それは、きつと正しい。生きながら呪いなさい。死んでもからも呪いなさい。きつとそれが人として正しいの」

「はい、レイナーレお姉さま。私は裏切った全てを呪います。壊します。ただ、憎いから」

真の悪意の魔物を心に持つものは、どれも等しく人を連れて行く怖い、怖いお化けである。



桜の木の下で、空を眺めていた。

舞いゆく花びらを、手を皿にしてみれば受け止められる。

落ち行くそれらは、ゆっくりと。本当にゆっくりとのんびりしながら地へたどり着く。

この時期に桃色をつけるこの木々はどんな偶然を世界から戴いたのだろうか。

雲は、動いていないように見えて、片目を瞑り、指で雲を掴んでみれば、数秒後には手から離れていた。

公園には、小さな子供たちが楽しげにボールを蹴っている。

その声をBGMに、いつの間にか瞳は光を瞼越しに映していた。

暖かな春の日。春麗らかな今日の太陽光は、優しい色をしている。

平和だった。

頭の意識が半分ほど、夢の中へと入りゆくとところに、駆ける足の音が聞こえる。

女性らしい靴の音が砂を踏む音と重なって、近付いてくる。

ああ、眠い。

「イツセー、待った？」

「いや、今来たところ」

かつて、初めてこのセリフを吐いた後に、気づけば自分は悪魔になっていた。

笑えない話が、今は笑える話へと変わっている。人は天使にも悪魔にもなることができる。

そんな思いを過ぎらせながら、再びもう一度。

「今、来たところなんだ」

「ふふ、はいはい。わかったわ。言いたいよね、じゃあ私もつき合うわ。——良かった、待たせたかと思った」

「なんとなく定番だ」

「そうね。人間では定番ね」

「悪魔なら?」

「……さあ?」

再び、顔を合わせて嘖き出す。

おかしなやりとりは、栄養になる。心を豊かにさせる。

命の季節。

「久しぶりね、こうして二人きりになるの」

「そうかな、いや、そうだね。いつもアーシアや朱乃さんがいるし、ゼノヴィアもいるか

ら

「——ねえ、イツセー。私たちは恋人なのよ。もう少し、二人でいたいわ」
「そう、だね。——リアス」

約東よ。

笑いながら彼女は言う。

とても、幸せそうな顔をして、それを言う。

映画を見ている。

一誠は、どこかのラブシーンを観賞している。

遠いどこかの星で、失われた愛を見せられていた。

——なんだ、幸せな夢なんかないじゃないか。

幸せな夢なんかない。

どこまでも幸せを映している映画は、そこで途切れないのだろう。

きつと、夢から醒めることよってのみ、切れるのだから。

しかし、見続けられ。

見てしまえばきつと。

悲哀のどこかへ彼を連れて行く。

結末を知り得る映画は、安心することもある。

しかし、これは真逆を行った。

知れば知るほどに、見れば見るほどに。

彼女が幸せを体現するばかりに、かの血の涙は美しく映画を飾るのだろう。

悲しく、泣かせるのだろうか。

ここから、書き直すことは出来ないのだろうか。

何故、この映画は、今までの夢に至るまでのひとつのシーンだと分かるのだろう。

知りたくないのに。

どうせならば、夢なんか見たくない。見る前に喰われてしまえばいいのだ。

だが――、

夢からは目を離せない。

夢とは、そういうものだ。

「好きよ、イツセー」

あの人と同じ容姿で、その名前を呼ばないでほしい。どうか、お願いだ。

重ねてしまう。

彼女が死ぬところまでも重ねてしまうから。

だからどうか――、

もう、夢を見せないで。

お願いだ。

“自分”。

俺まで、その想いに巻き込むな。



我、目覚めるは——

覇の理を神より奪いし、二天龍なり——

無限を嗤い、夢幻を憂う——

我、赤き龍の霸王となりて——

汝を紅蓮の煉獄に沈めよう——

神を殺す。魔王を殺した。

覇の理などとつくに奪い去っている。貴様の特権などではない。

貴様を死にやったのは我らである。

とつくに霸王などなっている。

俺より、下の者が神を語るな。

力こそ、神だと誰かが呟いていた。ならば——、

神とは二匹しかいない。

俺は——、この宿主と共に。

いつか、神に届かせよう。

世界の終わりを消し去ろう。なあ、相棒。久しぶりだな、相棒。やっと会えたな、相棒。起きたな、相棒。起きているぞ、相棒。

俺は忘れてる。忘れながら——前の俺の意思を、今、この世界の俺と混ざり合った自身へ必ず渡す。

結局、俺たちは同じ所を目指すんじゃないか。なあ、相棒。

世界に同じ質の存在は認められない。だからこそ、俺たちは、混ざり合う。しかし、忘れるな。

“共に” 生きているぞ、相棒。



『——初めての朝だな。人の言葉で何といったか……ああ、そうだ。今晚は、相棒』

体がぶるりと震えた。

何故なのか、原因を探る。

一誠はうつ伏せに寝ていた自身の体をそつと動かした。

桜の花弁が数枚、床を飾っている。

ああ、窓が開いている。

一誠は体を起こし、窓を閉めた。

そのまま、大きな背伸びをして、体を左右へ捻る。

小気味のいい音が室内へと響き、やつと返答する。

「おはよう、なんだけど」

どうでもいい会話を人と龍が交わす。鏡を見てみれば、目元が少し赤かった。

また、夢を見ていたのだろうか。

時々起こる夢世界は、彼の心を濡らした。

ただ、違うことがひとつだけある。

気持ち悪くなかった。

吐かない。

それだけでもツキがあると思えば良かった。日々、葉を飲むのは勘弁して貰いたいと

一誠は思う。

そして、若干の鳥肌。

怖いんだ。

覚悟を決めたのは昨夜のはずだった。悪魔という種族へ仲間入りするのは本日のはずである。

ただ——人を辞めるのか。

それだけで、どうにも怖かった。

前日まではやる気しかなかったマラソン大会が、当日を迎えると緊張でどうにもならなくなる時のように——ひたすら、怖い。

まるで、どこか遠い世界へ連れて行かれるような気がした。

このまま、時間が止まり、もう少し考える時が欲しくなる。

彼女の傍へ行きたい。

しかし。

行くのが怖い。

何故、悪魔なんだろうか。

自身と彼女が普通の学生であったならば、この運命は変えられたのか。

——いや、伸ばしても無駄だ。その女がどうではない。

みな、死ぬぞ。

君は、お前は誰なのか。

名前はなんなのか。

『相棒、お前の母君が呼んでいる。行け——お前が文字通り変わる日だ。人としてのその命、その顔。……よく、見せておけ』

わからないことは、やはり、わからない。

今はその扉をでて、母の朝食を脳が満腹と止めるまで食べておこう。

おそらくは変わらない。

普通に生活を送る日々にそこまでの変化はないのだろう。

——ただ。産んでくれたことに感謝し、その体を変えることを許して下さい。

そう一誠は思う。ひたすらに思った。

ただ、この動悸はおそらく止められない。

かけられたら呪いの魔法は解けない。

あの、名前を呼ばれた時から、どうにもかかってしまったのだ。

『イツセー』

名前には呪いがある。呪術的な何かがきつとある。

一誠にとっての彼女の言葉は——とても苦しく綺麗な呪いだった。



離したくない。紅と赤。

運命なんだと、彼女は思う。

これは、決まっていたことなんだ。

世界がきつとこの出逢いを必然としたのだと思ひ込むようにした。

そうであるならば、きつと。

彼は、離れない。

家族を、離さない。

私は王。グレモリーの王様である。彼らは死んでも守りたい。

護りたい。

この髪が焼けようと、どのような状況であろうとも、家族だけは見捨てない。

例え、名を捨てても、彼らだけは捨てない。

王として彼女は未熟で、愚かで、才能がない。

それでも彼女はこう思ってしまう。

家族になる彼をもし、殺そうとする者がいるのなら。

私は盾になりたい。

みんなを護る王——盾でありたい。

王の命は彼らのために、彼らは私のために。

どんなに惨めでも。

例え、弱くとも。

母のような、姉のような気持ちで彼らを見たとき、彼女は盾になりたくなくなる。母は、いつだって子供の味方である。己の強さとか、そういうものではなくて。ただ、心を盾に、愛してあげられる。

傷つけさせたくない。

辛い思いをした子たちばかり。

もう、やなんだ。もう、一生ぶん泣いた子たちばかりだ。

これからは一生笑ってほしい。

笑ってくればそれでいい。

楽しいと、いつてくれればもう、満足だった。

朱乃がそばにいて、からかってくる。それが好き。

小猫が幼い頃——ご飯も食べれなかったあの子がおいしそうにお菓子を食べる。それが好き。

祐人が、剣を誇らしげに見せてくる、笑う。それが好き。

そして次は彼。

あの奥に潜む悲しみを私は晴らしてあげられるだろうか。

リアスの心は穏やかだった。

寂しさを含みながらも穏やか。

今日も彼に会える。

どんな話をしようか。

悪魔のいいところをたくさん教えてあげよう。

ワクワクするような魔法を見せてあげよう。

彼がどんなに凄くても、後輩。

先輩は、心の何かを晴らせるようになれるだろうか。

気になる。

気に入ったのだから、しようがない。そう、しようがないさ。

「龍は言いました。『参った。降参だ』。地に落ちた龍は涙を浮かばせながらそう、言います。魔王様は剣を空へ掲げました。——それから龍はどこかで眠りにつき、悪魔、そして世界の危機は去ったのです——」

これを初めて読み聞かせて貰ったとき、悪魔がどれだけ凄いか誇らしくなった。

悪魔は世界のヒーローなんだと疑わなかった。

「……ま、実際はイツセーに宿るドライグにコテンパンなわけだけどさ。前魔王か……、

歴史本でしか、顔も見たいことないから実感がわかないわ。お兄様が魔王でなかった時が

あつたなんてなあ……」

プライベートの彼女は、どこまでも普通の女の子である。

悪魔や人、それらは決して離れていない。

表裏一体。

どこか、重なる影に笑みを零す。

人を初めて見たときは、興奮したのを憶えている。

初めての契約、初めての眷属。初めてが彼女には、たくさんある。

これからも初めてが彼女を感わずだろう。それでも、彼女は未知の世界に希望を持っている。

新たな家族を手に入れて、未来を進む。

『……ス君。リアス君！』

「うわっ！ 幽れ——……、ごほん。おはようございます、アジユカ様。本日は急用を優先していただき言葉もございません。深く、感謝しております」

「……いや、顔だけで連絡魔法陣に現れたのは悪かったかもしれないが。まあいい。——駒の調整は済んだ。ただし、これを他人に話す行為は慎むことだ。君はこれまで以上に注目を受けるだろう。だが、これはサーゼクスも言ったことらしいが、負けないよう、努力しなさい。あの龍を飼うのは君だ。間違っても——喰われないよう、気を抜いては

いけない』

「……申し訳ありません。わかりました。ありがとうございました。しかし、これだけ。首に紐をつけるではありません。私は眷属たちと手を繋いで歩いていきます」

突然、顔を等身大に現したアジユカ・ベルゼブブにリアスは椅子をガタンと引いてしまった。

それに対し、顔をしかめさせたアジユカだが、すぐに切り替え、忠告を行う。

リアスは深々と頭を下げた後、瞳に力を入れ、あのように言った。

それにアジユカは、目を閉じ、やがてゆっくりと開ける。

『ウエルシユドラゴンの王——期待している』

それだけを言うと、紅の魔法陣は明かりを消した。

「……誰にも負けない。私は」

八つの駒をぎゅつと、大事そうに握りしめながら、口にする。

そろそろ、校舎に生徒が集まり始めるだろう。

彼女は廊下を歩きながら、紅髪を揺らす。

先ほどの、プライベートな彼女は既にいない。

いたのは、盾になろうとしている愚王が一人。

世界で、
一番眷属を愛している女性が一人、
いるだけ。

別れには鈴を鳴らして

教室の内側。

賑やかな声音が教室に響き、放課後を予感させる。

教師の退室した後に、皆はそれぞれ、思い思いの行動を取り始める。

話し声が盛んな女子グループ。

課題をそのまま、始めてしまう眼鏡の男子。

スマートフォンを片手にいじりながら、なにやら真剣な瞳で画面を睨む彼は、彼女からのメールだろうか。

そんな、高校生とした教室の扉、コンコンと叩かれる音がした。

女子が、声をあげる。

喜びの声色は、彼の表情を少しだけ、困らせた。

金色の髪を揺らし、特徴的な涙ホクロを片目の横下へと張り付けながら、一誠へ視線を注ぐ。

「——兵藤君。部活へ行こう」

誘い。いや、呼び出し。

黄色い歓声は、どこか驚きのものへと変わりを告げた。

歓迎の雰囲気は、特にない。しかし、拒絶の空気も、またないのだ。

家族へ加わる、ひとりの同級生を迎えに来ただけ。

そんな彼は、一誠が鞆を手に席を立ち上がると横目で流しながら、扉を離れた。

そして、そのままに歩き出す。

「……変な目線で見られたよ」

一誠が、そう口にする。祐人は、気にする素振りも見せずただ前を向きながら歩いてゆく。

靴音が、響く。

止まった。

「——それは、ごめん。しかし、これからは同じ眷属になるんだ。例え、赤龍帝だとしても。それでも、僕は彼女たちの騎士であった。こちらからそう。剣を握る指が落とされたとして、僕は口に噛み締めてでも、剣を落とさないよ。悪魔の世界は、血の匂いに敏感だ。人に許される居場所が、時には敵地になることもある。——君が、どれだけの認識で悪魔になるのかは、僕は知らない。必要もない。知りたいのは——」

放課後。

茜色の空は、どこまでも綺麗だ。

目を細めながら遠くを見やれば、水平線の彼方が迎えてくれる。オレンジ色を、校舎に映して。

そして、彼ら二人を、その色に染めながら。

祐人と、一誠は視線をぶつけた。

覚悟を、求めた。

「——この眷属を、仲間を、そう。僕たちを家族として迎えてくれた部長を、護れるか。悪魔になるのは、命を主に渡す行為だと、刻めているか。彼女の為に——君は死ぬるかい？」

突然の問い。

命の天秤を、振り切れるか？

「彼女がいなければ死んでいたように。僕たちは、彼女を失うくらいなら命をどうにでもできる。君に、命を懸ける理由はあるのか？ 僅か一日。知りもしない彼女のもとで、世話になり、僕たちと同じ土俵に立てるのか。——無理だろう。君はご飯を食べられない日はあったかい？ お風呂に入れない日は？ 服を何着持っていた？ 歯を初めて磨けたのは何歳か、覚えているかい？ 僕は部長と出逢い、朱乃さんに出逢い、小猫ちゃんに逢った。君はどうだ」

何を。

何を言っているのか。

一誠のどこかで溢れ出した言葉は、きつと間違いない。
これでいい。

「——命くらい懸けられる」

言いきった。

祐人は目を見開いた後、あっけらかんと笑った。

そして言う。

「——わかった。認めよう。僕は木場祐人。君とグレモリー眷属みんなの騎士だ」
手を差し出す。

一誠はその手を握り、言った。

「俺は兵藤一誠。兵士になる」



それから二人は話ながら旧校舎へと赴いた。

部室前で足を揃え、ノックする。

「入っていいわよ」

「失礼します」

既に座っている三人を一誠は見渡す。

これから始まる。

そして——人を辞めるのだ。

「一誠、これから言うことを聞いて」

リアスが立ち上がり、真剣な眼差しで言う。

一誠は、頷き彼女を見た。

彼女が口を開く。

「悪魔は教会を適地とします。他にも契約や儀式。冥界という世界にも行くでしょう。レーティングゲームという戦いもあります。後は昨日詳しく話した通りよ。——それでも、あなたは悪魔になりますか？」

「はい、ならせてください」

迷いを無くしていた。

そんなものは掻き消した。

いらぬのだ。

この世界に生まれ落ちた時から、本来。

迷いなど必要なかった。

そのために、出会ったのだ。

「——びつくりした。そこまで迷いがないなんて。……安心しました。イツセー、こっちへ」

これから始まるのは生まれ変わりの儀式。

彼を悪魔へと変えてしまう。

そして——彼女の兵士となり、再び。

彼女へ仕える。どこまでも、いつまでも。

一誠は同じ選択をするのだろう。



世界は、人を拒んでいる。

心を、壊すのがとても楽しくて、笑顔のままに、己のままに。

人は、とても脆く出来ている。

硝子細工のようだった。

窓から落ちれば、体は壊れてしまう。熱を当てれば、きつと溶けてしまう。焼けてしまう。叩きつけられ、折れてしまうだろう。

ほら、弱い。

人の子は、とても弱くて、とても笑える。しかし、もがくのだから、遊びたくなる。馬鹿のような、その顔。よく、笑わせてくれる。

必死に崖つぶちに掴まっている人間の指をひとつ、ひとつ外してみたい。

そして、その表情を、焦りを、恐怖を楽しみたい。

どんなに甘美だろうか。

おいしいのだろうか。

さあ、悲鳴をあげて。

きつといい音が鳴るのでしょうか？

私に聞かせて下さいな。

おやつに、あなたの恐怖に呪いをかけていただきますよう。

——さあ、手を合わせて。

殺しましょう。

この方の御霊が、地獄の沼へと堕ちることを願って。

「amen」

少女は、光の灯らない瞳で、とても楽しんでる。気に入らない言葉を最後に吐いてあげた。それは、ご加護をもらえるのだろうか。

皮肉には、とても良い。

空腹が満たされていくかのようだ。ただ、この快感は忘れられそうもなく、ひとつでは足りない。

「見ていて——満たされる」

そつと、眩く。

憎むのが正しい。恨むのが肯定的。救いを求めた。しかし、牢獄へとぶち込まれてから、日の光を見たときは既に涙が出なかった。

もう、涙などない。

何を悲しむ？

神様のことですか？ 天使様ですか？

分かりません。彼女は、思いながら、首を振る。

ただ、悲しみなどは闇の中で喰われてしまった。

心はカラカラに渴いていて、そして、水を欲していない。

強いていうならば、

——血で湿らせて。

出来れば、たっぷりと。

恐怖を前菜に、降りしきる雨のごとく血を、浴びさせて。

渴いた心には、ちょうどいい。

人を殺せるような、力などないが。お姉さまの翼から、溢れ出る悪意のそれが、彼女の剣となる。

祐人の剣とは真逆の思念。

彼の、守護騎士としての思想を汚し、ひたすらに殺しを尽くす翼の舞。刃物の如き、翼を掲げ。

蹂躪の如く、槍を振るつた。

人に為すすべなどない。

死ぬしか、ない。

しかし、それは、すぐに死なせてくれたら。

苦しまずに、あの世へ送らせてくれたら。



いつも、彼女を見ていた。

金色の髪を揺らしながら、語る彼女を見ていた。

今日は、来るのだろうか。

明日は、会えるのだろうか。

私は、彼女に会えているのに。

彼女は私に会えていない。

どうして、見えないのだろうか。

人であれば会えたのだろうか。

触れられたのだろうか。

彼女の声は届いているのに。

私の声は届いていない。

この胸を焦がすような気持ちを、人は何とこのだろうか。

知りたい。

ああ、人は——、なんと言このだろうか。



悪意の境目に、優しさがあるとすれば、それは、何だろうか。

多分、それが人だろう。

きつと、思いとどまる。

どこかに、忘れていった落とし物を、拾うために、優しさを消すことができない。

優しくありたいと想い、そして、冷たくされれば心は凍る。凍りついた想いを、溶かそうか。

そう、もがけば、もがくほどに、優しさを凍らせてしまう。

そして、諦めてしまうのだ。

いつの日も。

そんな誰かを忘れることが出来ていない者がいる。

『——相棒、そこに何かいる』

ドライグの声に、足を止めた。

どこか寒い。

いや、——悪魔のみを寒気へと誘う。

部活の帰り道。いや、早めに慣らすため、帰宅を命じられた。

ひとりの悪魔。

教会へと続く一本道。

ここから、500メートル程先へ進めば、敵地とよばれる教会へ辿り着く。

その一本道の端のほうに、白い体の何かが姿を隠している。

『おもしろい、からかってやろうか』

「ぼっ——、やめろ」

ドライグがくつくつとした笑みを漏らしたのが確認出来る。

一誠は、嫌な予感、いや悪寒に体を震わせながらそれを止める。

しかし、時は遅い。

龍帝は、既に言葉を発していた。

『おい、白ネズミ。貴様、尾が出ているぞ。まぬけめ』

ビーン！ と尾を一本に、空へと固まらせ、ゆつくりとこちらを覗く。

手のひらほどに乗る体を向けて、こちらを睨んだ。

『失礼な。私を誰だと思っている？』

金色の双眸。睨むはネズミという小動物と同じような存在ではなかった。

鼻先が長く、短くない耳を寝かせながら、前足を踏み出す。

容姿はさながら、狐、いや狼、そのどちらかわかりづらいものであった。

そして、それは一誠と目を合わせ、瞳を大きくした。

『……何故、人間が私を見ることが出来ている』

警戒などではない。ただ、知りたいが故に。牙を犬歯のみ口元から覗かせ、もう一歩足を踏み出した。

ただ、勘違いしている。成り立てとはいえ、彼は悪魔だ。

『——頭をわきまえろよ、獣。龍に好奇心を出せば、頭を砕かれるぞ』

再び、ドライブ。

彼が言葉を発せば、白い獣に金縛りがかかる。

否応なく、縛られてしまう。

頬あたりへ、汗のようなものを垂らすその獣は、やがて解かれた縛りから、こう言った。

『……頭を下げよう。かのような格の高い御方だとは知りもせず。——しかとして、頼み方ができた。人間、名を』

獣は尾を降ろし、前足を揃えながらその場に座る。

寝たままの耳には、「鈴」のようなものが結ばれている。

どこか、力を感じた。

そして、今だに寒気は続いている。

「兵藤、一誠」

一言、そう口にした一誠へ、獣は大きく頷いた。やがて、再び歩き出し、一誠の足元で止まる。

見上げる目線からは、どこか焦りを感じた。

『兵藤——私を、ある人のもとへと連れて行ってはくれないか。どうしても会いたい人がいるのだ』

◆
聖なる獣を、知っているだろうか。神に仕えたそれらは、知を使い、脚をもつて人へ願いを聞いた。

そうした彼等は、神の死後、散らばりながら人の行方を見守っている。

彼は、その獣の血を引く。

ただ、聖女としての優しさを心に持ち、ただ、人の想いを叶えすぎたが故に壊してしまつた。

心を、なくしてしまつた少女を、どうか、救いたい。

そう、一誠へ訴えた。

『人間には、私は弱すぎて、そう見えない。兵藤が私を視認できるのはおそらく、宿る御方の霊格のおかげだろう。兵藤の視格が引き上げられているからだろうか。それとも

——人ではないからか』

聖獣は、霊体に近い性質を持つと彼から聞いた。故に、人にはそう、見ることができない。

『——ここから、僅か数分といった所に教会がある。そこに、彼女がいるのだ。しかし、

墮天使が群れていて、結界を張っている』

彼は、そこへ立ち入る力がない。

それほどに弱り切っていた。

『……しかし、誰か力ある者に憑きながらであれば立ち入ることができる』

ならばと、一誠へ頼み込んだ。

わずかな悪魔の匂いなどこの際、気にすることでもない。

ただ、あの子の所へと体を運び、再び日の当たる場所へと連れ帰る。

それを、求めていけないことはあるのだろうか。

「——ちよ、ちよっと待った」

一誠が、次々と述べる獣に対して両手を前に出し、言を述べる。

それは、静止。

「いきなりすぎて、訳が分からない。それに……気づいていると思うが俺は悪魔になった元人間だ。教会には悪寒すら感じるし、おまえにも近づいているのが少し辛いくらいだ。——訳を詳しく教えてくれないか」

一誠は、力を込めてそう言った。

獣の表情を放っておけない。

どこか、見たことがあるようで。

そう、夢の中で。



『—あれは、彼女が本当に幼かった頃だった』

教会にひとりの女の子が来た。

みすばらしい衣服に身を包んだ少女だった。とても、痩せていた。たいした歓迎を催すこともなく、ただ事務的に彼女は迎えられた。

彼女は友達もいない。それは聖女として特に不思議なことではなかった。

しかし、両親もいない彼女は愛情を知らない。だから、それが始まりだった。彼は、その教会に住み着いていた聖なる獣だ。

その教会に集まる信仰により、力を得て、時々恩返しをする。いつもいつも、人を見ていた。

嘆きにくる者へ少しの運を与えた。泣きにくる者へ慈悲を渡した。ただ、ただそうして過ごしていた。

物悲しい。

『——彼女は、そんな私へ話しかけてきたのだよ』

力のない彼は、信仰で得た力を人へ渡すために、
“よりしろ”へ宿っていたそうだと、
その教会には美しい大きな鈴を付けた鳥の像があつた。

翼を広げ、まるで教会へ来る人々へ幸福を与えようとしている。

翼に付けられている鈴には、愛が宿り、その鈴の音を聞いたものには、天使が会いにくるという。

そんな像に身を宿していた。

聖なる象は、彼には心地いい。だからその象へ宿りながら人を見てきた。

『——毎日、毎日。身振り手振り一生懸命に私へ、正確には象へ。必死に何があつたか、何を食べたか』

彼女は笑顔でそれを話すのだ。

時々、目の端に涙を浮かべながらも、顔の形だけは崩さずに話すのだ。

バカみたいだと最初は笑つた。

何を笑顔でいるのだ。

そんな、パン一つを何故、おいしいと笑うのだ。

不幸を患つた訪問者に八つ当たりされようと、

「あの方が、私へ不幸をお渡しにならなければきっと。そう、きっと救われます」

言うな。

泣けばいい。

人間など、どれだけ弱いというのだ。

頭に石ひとつ当てられただけで、死んでしまう。

そのような人生で、他人を想うなど滑稽で、滑稽で仕方がない。

なのに――。

「聖鳥様。お名前はありますか？ ないのであれば私に名付けさせて下さい」

人を見てきた。

様々な人を見てきたのだ。

しかし――、

「綺麗な音――、鈴の音。あなたの、音。これが、愛でしょうか」

どうして、自分の為にもっと生きない。聖女というのは、皆、こうなのか。

本物の愛を求めないのか。

笑顔で、涙を流して。

その涙を流していることに彼女は気づいていなかった。

自身の心など知らぬ。

我が身を想わず、人を想い。

あなたは、生きているのか。

その笑顔は——、

笑っているのだろうか。

『彼女は、それから別の教会へ移されたよ。不思議な力を宿したせいで。私は、せいせいした。……ああ、せいせいしたんだ。あのような女、見てもらえない』

彼は、気づいているのか。

その、見てもられないは、どんな意味かを。

悲しげな顔は、何を語る。

もう、語っていた。

『彼女が時々、こちらの教会へ派遣されるたび、私の名を呼んだ。知らない名だ。それでも——私の名だ』

限がある。寝ていないのか。

傷がある。

……何故、自分に力を使わない。

いつもそうだ。

なぜ、この女はいつも。

いつも、弱い。そして、綺麗だ。

嫌いだ。

好きになれない。

好きになんかならない。

それでも——そのもの悲しげな笑顔に、どうしても。

惹かれてしまった。

そんな顔をして。

本当はこの象ともっと話しがしたいんじゃないのか。

ひとりはさみしいと。

そんな顔をして、言っていないと言うつもりか。

なぜ、こんなにも揺れてしまうのだろう。

彼女の心は、こんなにも揺らすのだろう。

人間とは、わからない。よく、わからないな。

ただ——……、

ひとりは、やっぱり寂しいな。

ひとりは辛い。

慣れてしまった。

彼女に用事があり、話しかけにこない日は、夜まで待ってしまっていた。

待ち続けていた。

彼女が、こちらへ来たとき。

心が跳ねた。

こういう気持ちは、何というのだろう。

ただ、ひとりには寂しいこと。

それだけは私も知っている。

彼は、そう言っていた。

『……知りたくても、知り尽くせないことばかり。それでも、私は、あの子を、ひとりにできない』

出来損ないの聖なる獣は星へ願った。

あの子がもうひとりにならないように。

一誠は思う。

この獣も人のことを言えないよ。

あなたも、ずっとひとりだったのでは。

寂しさを寂しくないと感じてしまうほどに、長い間、ひとりでいたのでは。

流している涙に気づいていないのはきつと——。

『彼女が牢獄へ入れられ、その後、墮天使に連れ去られたと聞いた。私は——連れ返す。』

そして、もう離さない。傍にいて、見えなくとも。今度は私が話しかけたいんだ』

人を愛しているのは君も同じだろう。彼女を、獣は愛しているのだろうか？

一誠は、ドライブへ話しかけた。

だが、彼の決意は決まっている。

『……好きにしろ、馬鹿者。あの悪魔に殴られる覚悟を決めているよ？』

彼は、今日。

適地へ向かう。



「——部長」

「……あの子、私の話、聞いてたのかな」

部室で、ため息を吐いたのはリアスだった。彼女は、己の兵士が向かった方角へ目を見開いた。

駒の反応が、危機を察知している。悪魔に不利になる“適地”へ踏み出そうとしているのが王には分かった。

「部長、僕はサポート、または引き戻しに行きましようか」

騎士が席を立つ。

祐人は、剣を腰に下げながらそう口にした。

小猫も両手にグローブを嵌めながら、目つきを変えている。

「――墮天使、本当に厄介ね。入り込んだだけでなく、この地域の廃教会で何かを成そうとするなんて」

リアスは瞳を閉じた。

机を指先で、トントンと叩きながら思考する。

そして、やがて席を立ち、扉へと歩き出した。

「……使い魔からあそこの教会に大量の神父が集まっているのは知ってる。他にも墮天使が数名。あそこは一応、私たちにとって不利な場所よ」

しかし、リアスは扉の前へ行つた所で後ろを向き、言った。

「――片を付けるのはもう少し後の予定だったけど。さあ、グレモリー眷属、これより新入りの尻拭いへ行くわよ」

彼女はみんなを見やる。

仕方ないわね、なんて呟きながらも微笑んでいた。

『はい！ 部長！』

朱乃が、祐人が、小猫が。

それぞれが声を出す。

眷属新入りの彼の後を追いかける。

もう、彼らは仲間だ。



しとしとと……水音が滴る教会。

陰険な雰囲気を囲いながら、餌を待ち構えるように、どこか笑い声が聞こえる。内装は剥がれ落ち、銅像は腰から折れていた。そして、頭部のみ砕かれている。

『——兵藤。大丈夫か』

おそらく、人には聞こえない声が石造りの教会へと響いた。

一誠は、教会の雰囲気をどこか不気味に感じながらも、肩の横を向く。

そこには白色の獣が一匹乗っていた。

「……ああ。少し辛いけどなんとかな。——やつぱりごめん、もう少し聖気を落とせな
いか」

獣から漏れ出す金色と白色の靄。

水に絵の具を混ぜたようにジワジワと一誠を蝕んでいた。

これを、聖気と言うのだろう。

『わかった、やってみよう。……そして、すまん。兵藤には関係ないのにな』
頭を下げた。

耳元で、そう囁くほどの声音で発したそれは心からの謝罪だった。

それに対して一誠は、言う。

「いいよ。会いたい人がいるんだろう？　なら、会いに行こう。俺はおまえを落とさな
いから」

それに、獣は一度目を開きながら、言葉を紡ごうとして——、止まってしまふ。

「……どうかしたか？」

『ありがとう、兵藤。——ありがとう』

感謝。優しさにありがとう。

そうして、一誠は歩を進める。

やたら響く靴底の音にどこか警戒感を醸し出しながらも進む。

『彼女は、この階の下にいる』

獣は鼻先をピクリとさせながら言った。それに、一誠は頷き、目でくまなく辺りを見
渡す。

「——あれか」

下へ通ずる階段らしきものを見つけた。そして、その場から一步を踏み出し――、『相棒！ 後ろだ！』

ドライグの怒声。

危険を知らず。

何かの接近を察知した。

鼓膜を徐々に揺らすそれは、間違いなく近づいている。

『B B o o s t t ! !』

重なる機械音。

両腕に紅蓮の炎が灯り、駆け抜ける。一瞬にして、暗闇に身を染めていた教会の内部が光りを映し出した。

何かを弾いた音がする。

地に刺さったのを見れば、細い銀の剣。悪魔殺しの剣。

「――んだよ、誰が来たかと思えば悪魔じゃんか。めんどくせえから来んなよ」

だるそうに声を出す。

ゆっくりと体を引きずりながら階段横の銅像の影から姿を現した。

白髪に射抜く双眸。

痛みなど知らない。

痛めつけることのみ知っている。

それが快感だから。

現れた青年は、右耳をほじくりながら見下した嘲笑を浮かべた。

「まあ……てめえらが来ねえと仕事が終わんねえからいいのか。さあて、——殺すか」
死を映した瞳がうなりをあげた。

何度も何度も死を見てきた者の目だった。

青年が指をはしく。

小気味のよい音が鳴る。

そして——いつせいに銃弾が降り注いだ。

ありとあらゆる方向に淡い魔力を纏った銃が浮かび上がる。

光りを込めた、悪魔殺しの銃弾。

けたたましい銃声が咆哮をあげた。

「きひひひひ！ ひやつほう！ 墮天使すげえじゃねえか！ 俺の指で全てのトリガーが引かれるよう仕組めるなんて、だてに堕ちてねえな！ やっぱカス天使じゃねえんだ！」

耳を障る奇声を銃声と共にあげながら、手にある銀の剣も数本投擲してくる。

前方向から、体を射抜こうとするそれらは既に音速を超えていた。

『——相棒！ 両腕から左右前後へ魔力を放て！』

ドライグのアドバイスに一誠は頷く間もなく両腕を開き、赤き龍の力を使う。爪が大きく伸びた。

『B B o o s t t !』

音声か鳴り響くのと同時に一誠は放つ。

赤き龍腕の肩口から電撃が走り抜けるように、何かが駆けてゆく。

緑光を辺りへと撒き散らし、宝玉は光を倍化した。

そして、宝玉の中心に龍の瞳が現れる——。

『F i r e O f D d r a i g g』

二度目、龍の砲撃が、放たれる。



光が視界を埋める。

特大な一撃を四方へ撃ちはなった。

教会の地を削りながら進みを決して止めない紅蓮の咆哮は龍の口をしている。

何もかも喰らおうと、破壊を撒き散らしながら炎を走らせた。

文字通り、通り抜けた後には何も残らない。
そんな力を破壊という。

教会に亀裂など入らない。

隙がなかった。

気づけば、東西南北へと抜けた龍の頭が見えた。

それらはまるで意志を持つかのように睨みを利かせ、食い尽くす。
あらゆる銃弾を吹き飛ばしながら、消えてゆく。

教会は、瓦解していた。

激しい暴風のみを残して。

「……すげえ……、けんどお、甘えよなあ……」

連続して放たれていた銃弾。

しかし、その数は途方もない。

いったい何丁集めたのだろうか。

——いまだ、銃声をやめないものがある。

一誠は、目を開いた。

迫り来る銃弾は終わっていない。

運良く、生き残った銃の魔術は、牙を剥き続けている。

「——しまっ」

一度に放出した籠手をそれらに向けるが腕が足りない。

全てが目の前まで迫り来るそれらを吹き飛ばすにはB o o s tが足りない。

汗を垂らしながら、一誠は——、

『私を盾にしろ、兵藤』

「——なにいつてんだ、おまえ！」

肩から飛び降り、聖気を増大させながら彼は言う。殆どない力を使い、徐々に肉体を増大させている。

聖獣にとって、光の弾は効力こそないが、物理的威力はある。

元々が霊体に近く、弱りきっている彼の体に耐えられる保証などなかった。

牙を見せながら、立派な体軀を唸らせ、獣と相応しき相貌を露わにした。

『——本来の私の体だ。兵藤、あの子を頼む』

狐と狼を混ぜ合わせたような恐ろしい目つきで彼は、言った。

彼は一誠に覆い被さり、弾を待つ。

体はどこか、透けている。

聖なる気が、辺り一面へと吹き出していた。

一誠は、それらが自身の体を蝕んでいないことに気づく。

顔中に血のような金色の液体を垂らし、口元を激しく歪ませた聖獣。

彼は、必死に聖気を、一誠から外へ逃がしている。

刹那ごとに弱まっていく力。

本来の彼の体から漏れ出す聖気は、小さな体であつた頃の彼とは比にならず。

ただ、命を削っていた。

『——ありがとう、兵藤』

獣は瞳を閉じる。

激しい息を吐きながら、体を震わせていた。

聖なる獣は、神が創りあげた人との遣いである。

神が死に絶え、彼らは自身を保つことが難しい。

その中でも力のないものは、一生、"よりしろ"へと体を任せ、人を見守る。

聖気の塊である、生物と霊体の曖昧さの中で生きる彼らは、

『私は考えていたよ。神になりたい。死んだ神を信じ、信じた全てに裏切られた彼女の神様になれないか。私は裏切らない。そばに、いる』

彼は、言っていた。

神が死んだ。

人を見つけた。

人は、彼女を落とした。

ならば――、

私こそ、彼女が信じられる友（神）に成れないものか。

迎えにいけない。

鳥濤がましいだろうか。

私でなく、像でなければだめだろうか。

わがままを言えるのならば、私は。

私は、彼女の“本当の”笑顔が見たい。

「――その聖獣、なに諦めてんの」

紅黒い魔力が、二人を覆う。

そこへ届く銃弾は、その魔力へと吞まれながら姿を消した。

跡形もなく、消えたのである。

「兵藤君――僕たちは仲間じゃなかったっけ？」

はじく音がした。美しい剣の舞。

光を喰らう刀身が眩く光る。

上空に浮かぶ銀色の銃を、切り裂いた。

「……男の癖に。……ケーキ、奢ってもらいます。……あ、やっぱりお金だけでいいで

す。一緒に行きたくないので」

白髪の少女は、白髪の青年に肉薄し、拳を突き出した。不意を着く一撃が彼の横腹へめり込み、吹き飛ばす。

「クソ、が……。いつか、殺してやる……」

血を流した青年は起き上がり、窓を割って外へと逃走する。

「うふふ、あらあら。——消えなさい」

雷が悲鳴をあげた。

辺りにいまだ浮かぶ銃へ落雷を。

黒髪がしなりながら、揺れながら、彼女は、微笑む。

ドSな笑みで。

「……部長、みんな——」

一誠が呟く。

驚きを貼り付けた表情だった。

『——お、まえ、たちは……』

片足を付きながら、獣は苦しげに言葉を吐いた。

その姿は徐々に小さくなり始めている。

聖気もまた、収まり始めていた。

「私はグレモリー。リアス・グレモリー。その子の主よ」

一誠の様子を一瞥し、隠しきれない安堵をつきながら、今度は威厳のある姿でそう言った。

獣は一度その髪色を見てから、どこか納得したような表情をする。

しかし、立ち上がれていない。

そして、体はうつすらと透けたままである。

「……言いたいこと多すぎて忘れちゃいそうだ……。えつと……。その聖獣の事は今はいいわ。一誠、目的だけ、簡潔に話さない」

リアスは一度、額に手を当て、逡巡した後言った。

一誠は、複雑そうな表情をするが、やがて視線を合わせ口にする。

「――下の階にいる、優しい女の子を助けにいきます」



走っている。

それぞれの靴音を石造りの階段へと響かせながら、走っている。

やがて、辿り着いた下階に足を下ろした。

ゆつくりと扉を開ける。

「——何人いんのよ、これ」

祭壇。

奥行きのある空間の奥には奉られるような椅子がある。

そして、その上空。

八枚の黒い翼が、四人の墮天使は共に彼らを迎える。

ざっと百人程の神父——とすら形容出来ない残酷な笑み。

それぞれが手に何かを持っている。

銀の剣。光の銃。

そして、十字架。

リアスは先頭に立ち、前を向きながら言う。

「——そのまま聞きなさい。祐人と小猫は共に道を開ける。私と朱乃で後方サポートをするわ。一誠は——」

『私を——彼女の所へ。頼む』

獣が一誠の手の上でそう呟いた。

より小さくなった体をぐったりさせながら彼は、瞳に宿す力を失わない。

リアスはため息の後、

「一誠の肩に目一杯捕まってなさい。いいね」

獣の頭を優しく撫でながら言った。痛みはない。

もう、痛くないほどに。

『ありがとう』

「まったく。悪魔にしちゃうわよ。——さあ、行くわ。祐人！ 小猫！」

リアスは冗談を口にした後、指先を前方へ向ける。

それが合図だった。

『はい！ 部長！』

彼らは走り抜ける。



「さあ、アーシア。準備はいい？」

「勿論です、レイナーレお姉さま」

悪意の準備を始めよう。

レイナーレはこちらへ向かいくる悪魔たちを見ながら酷く穢らしい笑みを浮かべている。

彼女は、悪魔を殺す。

復讐でもない、ただ、悪魔を消したいだけ。

「——魔王の妹を消したら、どれだけの報酬を貰えるかしら」

そのためにアーシアを使う。使って使って、そして使い切れたら。神器を戴こう。

ああ、楽しみだ。

その願いは叶うのだろうか。

そして、彼女は。

奥にいる龍へ気付いていない。



騎士が風の如く、駆け抜ける。

そのギリギリ触れない距離で猫又が拳を突き出した。

疾風を放ちながら、一直線に。

主の命に従い、主の道をつくる。

「神父——人間が僕らを見れるかい？」

音速そのものとして、剣を投擲しながらひたすら駆ける。

タンクローリーを丸ごと突っ込ませたような打撃に幾人もの男が吹き飛ばされる。

「……男。……おら、吹っ飛べ、消えろ」

少し、にやけている彼女が怖い。

道の左右に広がる神父へ、右から落雷が飛ぶ。

左からは消滅の魔力が覆うように呑み込んでいく。

「——部長、剣の許可を。祭壇まで道を開けます」

祐人が、後方へ言う。

左腕で剣技を繰り返しながら、右腕に集まる紅闇の粒子。闇をより、闇へ。夜の月す

ら隠す。

「……」振りのみよ。許可します」

「仰せのままに」

騎士の視界がかき消される。

己の憎らしい因子に影をつけよう。皮肉に皮肉を。

闇には、憎しみを。

「——龍の鱗を破るは己自身。君たちにそれ以上の鱗はあるかい？」

刀身が、毒々しい紅に包まれてゆく。

闇より深き、漆黒の剣に主の証を。

「――鱗破の剣」

たった一振り。

その一振りが翳された瞬間。

紅黒い斬撃が飛ばされた。

悪魔の騎士の剣舞。

己の闇を刀身へ乗せ、前方の彼方まで届かせようとす、一振り。

神父たちが血を吐きながら、八方へと消えてゆく。夜にのまれながら、龍の鱗を砕く
剣の一撃は、見事、祭壇までの道程を開けた。



グレモリー眷属が見上げる。

墮天使が見下ろす。

祭壇を境目に、二種の種族が睨みを利かす。

「あら、いらつしゃい。魔王様の妹君様。また、会えましたわね」

レイナーレが嘲笑を浮かべながら、そう言う。彼女を取り巻く墮天使たちも口を裂け

させた。

リアスは一言、言った。

「——女の子はどこにいるのかしら？」

「女の子？ さあ、そんなものはいないけれど」

レイナーレは、バカにしたような素振りを見せ、リアスは目元をきつくしながら、再び問う。

「あなたが誑かした女の子を出しなさい」

かつて言っただはずだ。

人を誑かす悪鬼を始末するのが仕事だと。

そう、彼女は言っただはずだ。

「——まあ、悪魔のお嬢様はなんて余裕がないの！」

両手の平を口元へ翳しながら、大袈裟にレイナーレは言った。

眷属の皆が憎々しげに思う中、そこへ一つ、声が響いた。

『——貴様、アーシアをどうした』

力強い声音。

眷属の後方へと回っていた一誠の腕から下りて、リアスの前方へ立つ。

震えている体など知るものか。

彼は、聖なる獣。

天使より堕ちたる存在に退くものか。

「あん？ えーとお……その透けてるきつたないわんちゃんはなにかなあ？ ねえ、お嬢様」

目を凝らし、まるで遠くの山でも見るかのようなジエスチャーをする。

どこまでも舐めきつた女だと、一誠は思った。

そして、怒りに震えた。

初めてである。

初めて、怒りに震えた。

生きてきて、初めて。

『アーシアを返せ。彼女は貴様のような穢らわしい生き物といえるべきじゃあない。彼女を返せ』

微力の聖気が彼の周りを舞っている。力尽きるまで、彼はアーシアを指す。「穢らわしいですって……？ 悪魔という聖獣に言われたくないわ」

消えなさい、と放たれる光槍。

獣は、その場から飛び退こうとして、足に力を込めた。

震える足は、言うことを聞くのだろうか。

それと同時に、全ての墮天使たちの光槍が放たれた。

元から造り出しておいたのだろうか。数本ではきかないその物量。

悪魔にとって、絶大なる槍。

放たれる。

『B B o o s t t ! !』

全員が構えるなか、リアスは獣を抱き上げる。そして、祐人が一瞬にして間合いに入った。

しかし、さらに間合いに入ったのは――、

『ふざけてくれるじゃないか、女。俺は貴様を消すぞ、決めた。――運命を呪え』

『D d r a i g B o o s t e r R i g h t S e c o n d R e v o l u t i o n
!』

籠手から発動される業火に目を開く。

片方の瞳に緑色の光を宿しながら、一振りですべてを破壊できそうな爪を光らせ、彼はいる。

「イツセー……なの？」

ドライグのような、それでいて一誠のような。

図りかねる声色は威光を含んでいた。

紅く、真つ赤に彼の胸は眩しい。

心臓は、唸る。

『必ずやおまえの願いを叶えさせたい。——こい』

一誠は緑を宿す瞳をリアスへと向け、獣の背中を掴み、肩へ乗せた。

「——なんで赤龍帝がいんのよ！」

まさかッ！」

レイナーレは、戦慄しながらリアスを思い切り睨んだ。

焦りの中に、殺意を特大にして。

「ええ、彼は私の兵士。グレモリー眷属、最強の兵士よ」

リアスは、睨み返しながら返した。レイナーレは、再び槍を生み出しながら言う。

「……なんでお前みたいなのもとにッ。悪魔などが飼えるものか！」

「飼わない。私は眷属を飼っていない。一緒にいるの」

「——ッ。アーシア！ 歌いなさい！」

レイナーレが後ろへ叫ぶ。

それと共に獣が威嚇のような構えをとった。

カツン、カツンと。

ゆっくりそれは鼓膜を鳴らす。

奥の影から出てくるのは――、

真っ黒に染め上げたような修道服に身を包んだ金髪の女性。

『――アーシアア!』

そして、獣の叫び。



「はい、レイナーレお姉さま」

操られているかのように。

光を灯さない瞳で、彼らを見渡しながらニコリと微笑んだ。

「――生より、死より。天より、闇より。聞いてください、聖歌」

眷属一同に悪寒が走り抜けた。

恐ろしく呪いを含んだその声。

美しく、背徳な歌声。

聞く悪魔を、冥界から明確な地獄へ突き落とそうとする。

こんなものは聖歌ではない。

死歌。

「——みんな、耳を塞ぎなさい！ 脳に呪いをかけられるわ！」
リアスが呼び掛ける。

悪魔に向けての本来聖なる歌声が、ただ殺しの兵器とかしている。

「あはははっ！ どう？ どう？ 悪魔へ向けた呪いの歌声は。痛いでしょう？ 苦し
いでしょう？」

レイナーレが腹を抱えながら大声で笑う。

魔王の妹が、とてもいい気味だ。

そう、笑う。

『貴様……。アーシアの感情を弄り、助長させたな』

獣が牙を剥き出しにしながら、そう言った。

一誠は、下を向いている。

耳を塞いでいない。

ただ、無表情に。

下を向いている。

それに気づいたリアスが、彼の耳を塞ごうとした。

自身はその間、呪いを受ける。

しかし、彼女はそれでも。

『——大丈夫。あなたは耳を抑えていて。俺は彼女の所へ』

一誠がリアスの手を彼女の耳へと戻した。

それを見つめるリアス。

不安の色を隠せない。

しかし、

「——わかった。無事でいてね」

信じることにする。

一誠は進む。

そこへ槍が降ろうとも、銃弾がこようとも。

ただ、一誠が今やることの最優先事項は——……

『Transferr!』

◆ 左の籠手が譲渡する。

今日も鈴の音を聞きました。

愛を込めた音を私は聞きました。

天使様は来てくれるのでしょうか。

美しい翼をはためかせ、私を連れて行ったりするのでしょうか。楽園はあるでしょうか。

そこは楽しいですか？

お腹はいっぱいになりますか？

お花は綺麗ですか？

季節の香りをかかせてくれますか。

でも、そこには——この御方はいません。

天使様、どうか私の願いを一生で一度だけ叶えて下さい。

どうか、目の前の聖象様に命を与えて下さい。

愛は——。

そうして、私は今日も。

今日も、鈴を鳴らします。

叶うと、いいな。

私は——愛が欲しい。



呪いの歌劇。

彼女は歌う。

幸せそうに、歌うのだ。

ただ、涙を流しているのを彼女は知っているか？

気づいているのか。

彼女が愛し、そして愛された象に宿りし命は、

すぐそこにいる。

『アーシア……』

悲しげな瞳。

やまない呪い。

『B B o o s t t !! E x p l o s i o n !』

両腕の砲撃。

先ほどよりも威力を上げた両撃は仲間を盾にしたレイナーレを除いて、塵へと返す。

「——ッ。アーシア、こい！」

レイナーレは、いまだに歌声をあげているアーシアに身を寄せ、そして引つ張り上げ

た。

さらに、首もとに槍を構える。

「ははは！　これでその砲撃を撃てるものなら撃ちなさい。私はこの子と共に消えてもいいわ」

彼女が唯一、赤い龍帝を止める方法。

アーシアを人質とすること。

レイナーレは嬉々として笑みながら一誠を見下ろした。

『——忘れているな』

一誠は一言、言い放つ。

その雰囲気汗を浮かべながらもレイナーレは、

「は、はあ？　あんたの言葉で二度と縛られないわ。ハツタリかますのも——え……」

レイナーレの真後ろに覇気を吹き出しながら、聖なる獣が牙を覗かせる。巨大な体躯がそこまで迫っている。

『龍帝の力——しかと、受けた。私は……』

一時的なもの。

増大した力は、己自身を痛めるかもしれない。

その力を受けきれぬほど彼の体は強くないのかもしれない。

しかし、人を想う。

それだけで獣は、奇跡を起こす。

『——彼女の神になろう』

金色の双眸。金色の紋様が彼の体を巡る。

聖なる神に仕えし本来の獣は、神を裏切り、想いの人を誑かした存在に今宵、制裁を加える。



レイナーレの悲鳴。

彼女のどこか見えない魔力の線がアーシアから切れたような気がした。

一誠は同時に飛ばされるアーシアを受け止め、顔を見る。

「……。痛い、苦しい。助けて」

徐々に止む歌声。

彼女は、どこを見ている。

天井か、どこか。

目に光は宿らない。

「ぐっ……あ、ああああああ……、助けて、下さい。私は——私はああ！」
人を恨みたくない。

愛を持つている。

愛を、渡せるような人に。

「歌い、たく——ない！ 私は、不幸な、歌なんか……やだあ。いや、です」
再び紡ごうとしてしまう死のメロディーを必死の思いで留まろうとする。

「——助けて、聖象様」

懇願。あなたへ。

——シヤラン、シヤラン。

響いたのは、愛の音だった。

『アーシア』

鈴の音が。

アーシアの瞳に一瞬、光が灯る。

「……え。いる、んですか？ いるんでしょう？」

『……アーシア、私はここに』

「——どこに、どこにいますか？」

音だけが虚しく響いた。

見えない。

あなたを追いかけて。

会えました。

そして——見えません。

ここにいるのに。

瞳の先にいるんだよ、アーシア。

「……良かった」

涙をこぼしながら。

彼女は、微笑んだ。

「天使様は——願いを叶えて下さったのですね」



神器というもののせいで、私は教会から牢獄へと。

人のために、生きてきました。

花の香りを嗅いだのはいつでしょうか。

憶えています。

私の記憶にはきつと、聖象様に語りかける私しか、いないのでしょうか。

それは寂しいですか？

私は満足です。

ただ、話してみたい。

友達になれたなら。

きつと、たのしいでしょう。

悪魔すらも生かしてしまう私はいけないのでしょうか。

優しさを間違えたのでしょうか。

牢獄の生活は、今までとそこまで変わりませんでした。

ご飯も、人にかげられる言葉もきつと、そこまでは変わらないのでしょうか。

ただ、あそこへ行けない。

行けないのです。

それだけがとても。

物凄く、悲しかった。

触れた人の夢を一誠は見た。

覗いたみたいで、少し悪い気がする。

それでも、こんなものつてあるのだらうか。

目の前にいるのに、鈴の音は彼女へ届くのに。

言葉が届かない。

思い出で我慢出来るほど、強くはない。

彼女の体に毒が広まる。

呪いを己が受けてしまう。

苦しそうな声を出しているのに、どうして——そんなにも。

満たされた顔をするんだよ。

『兵藤』

獣が何かを言っている。

薄くなり始めた体を起こしながら、獣のくせに、笑っている。

『——もう一度力を私に』

いやだ。

そんなことをすれば。

そんなことをすればきつと、

「お前が消えてしまう」

なんでお前までそんなに満たされた顔をする。

一誠には分からなかった。

『お願いだよ、兵藤。私は——彼女を救う神（友）になりたい』

二人を助けてやりたい。

やれない。

一誠は、泣いていた。

彼の周りを眷属が、駆けつけ囲んでいる。

『なんでお前が泣くんのだ。人はすぐに泣くし、すぐに怒る。だから、すぐに笑えるだろう？』

無理だと頭を振った。

「そばに——傍にいてやるんじゃないのか。話しかけてやるんじゃないのか」

今度は獣が頭を振った。

『兵藤、私はわがままだろうか。彼女を頼む』

薄れをより早めた獣が言う。

そして——、

『Transfer!』

優しい彼の想い、願い。

『ありがとう。兵藤一誠。初めての友』

一誠は、涙を零した。

この気持ちは何というのだろうか。

そう言っていたのは獣だった。

人はこのような想いを何というのか。

彼がアーシアでなく、一誠を初めての友人と評したのはどんな理由だろう。彼女への

想いは、友人ではなかったのか。

ならば――。

愛しき想いを、どう表すのか。

彼は、知らないのだろうか。

それとも――今、知ったのだろうか。

『――また、いつか。アーシア』

呪いにもがく彼女の胸へ溶けてゆく。聖気の塊である聖獣が消えていく。

一誠には、彼が何をしようとしているのかが分かった。

『……己を薬とし、邪気である呪いを消しているな。相殺だ』

籠手の消えた腕に緑の宝玉が現れる。

「……そっか」

彼が完全に消える時、耳に付けてあった鈴がアーシアの胸元へと落ち、最期の音を鳴

らした。

名前も知らない友となった聖獣は——、消滅した。



「——様」

初めての名を呼ばれる。

初めて、目を見て呼ばれる。

初めて——“会えた”。

「あの象の鈴は、あなただったのですね」

“よりしろ”に宿しきれなかった鈴は、人々から愛が込められていると言われた。

「……胸が、暖かいです。あなたの——」

これは夢だろうか。

彼女はもう無事である。

そして、眠っているのだ。

「あなたは私の天使でした」

別れがくるのだろう。

逝きたくない。

「どうか、鈴の音を聞かせてくれませんか？」

それでも。

彼女のもの悲しげな笑顔はなく。

今度は彼女為だけに。

この鈴を鳴らすのだ。

——シャラン、シャラン。

「……いい音」

この想いを人は何というのだろうか。

もう、残りの毒は消える。

私もきつと消えるだろう。

ならば、最期に私が伝えるのは——、

『アーシア』

「はい」

『ずっと。幸せに。君の永遠に幸あれ』

これでいい。

これがいい。

私はこの最期がきつと間違ひなく、人のために、このような娘の為に使つた最期が、一番、幸せだった。



あれからアーシアは目を覚ました。

一誠は、彼女の瞳を覗くがそれにはとても優しい色がある。

「あなたたちは——」

憶えていないことならば。

もう、忘れていいだろう。

一誠は、彼女の手を取りいった。

「もう、いいんだ。君はその鈴を大事にするといいよ」

言われた彼女は胸元にある鈴を見て、

「あ、れ……。どうして、あれ、なんか、ごめんなさい」

涙が鳴らす。

その音を鳴らした。

愛を鳴らすのだろう。

聖獣と彼女にあつたのは、一つの絆。

名前をもらい、愛を渡した獣は、きっと彼女の胸元で眠っている。
今日も、ほら。

その鈴を鳴らして、愛をあげよう。

今度はアーシアが鳴らして、

——獣に愛を、あげようか。

エピソード 彼との秘密

泣く日々々に終わりを告げた。

そして、寂しげな笑顔は顔から落ちる。何もかもが、世界を変えていて、ただ、変わらないのが、この鈴の音。

愛をくれたのは誰だったのか。 最期まで、想いを込めてくれたのは、果たして誰だったのか。

頬を伝う涙は、冷たくない。

とても温かな温度を教えてくれる。氷のように心を覆うものは目から出なくなっていた。

彼女は初めて知ることになる。

心を痛めることでしか流せないと思っていた涙は、それだけじゃあない。

いつも、胸に宿る彼の温もりを涙に変えて。

暖かい優しい雫を再び零す。

“さようなら”。



あれからアーシア・アルジェントは一旦駒王学園旧校舎、部室へと移される。

そして、その中でリアスに毛布を頭からかぶせて貰い、柔らかいソファアへと腰を降りしした。

その間に淹れられたであろう朱乃による紅茶で喉を潤す。

暗い中に心を落ち着かせるような淡い色を醸し出すロウソクの火が、近くにあるわけでもないのに暖かった。

「……………」

少しずつ、戴いた紅茶を胃に落としていく。舌をゆつくりと回し、少し入れられた砂糖の味にどこか息をつく。

紅茶の水面が僅かに揺れる。

その手は少しだけ、震えていた。

「…………喉大丈夫？ 痛くない？ 飴、いる？」

プライベートとなんら変わりのないリアス部長は、妹とでも心配するようにその女の子——アーシアの様子を気にしている。

アーシアは、一度喉元へ手を当て、すつと撫でた後にゆつくり言葉を紡いだ。

「……大丈夫、です。だいぶ良くなりました。あの——……」
言葉が出てこない。

まずは何から話せばいいのだろうか。

感謝だろうか、正体だろうか。

鈴の主のことだろうか。

わからないことばかりで嫌になる。

「……聞いてね。私たちは……、その、悪魔なの。怖い？」

恐る恐るといった様子でリアスはアーシアへと訪ねる。

彼女がどこまで記憶を残しているのかはわからない。しかし、墮天使をどこかで怖がっているとするならば、自分たちのことも怖いのだろうか。

一誠とは違い、どこまで彼女の心は保つのだろう。

人にとって、やはり聖女にとって、自分たちは異物だろうか。

しかし、アーシアはリアスの物言いにこそ、驚いたように目を開き、すぐに優しい瞳をする。

それは、聖女の微笑みだ。

「とても。とても……悪魔というのは優しいのですね。いろいろ知らないことばかりでした。私は——あなたたちに、救われたのですね」

知っていたんだ。

憶えているのだろうか。

魂そのものを、君へと捧げた、世界で誰よりも人の為に生を尽くした獣を憶えているかい。

——彼のことも、憶えていてくれるのだろうか。

一誠は、思う。

そして、彼女へ伝えられるのなら、どのような言葉こそ、相応しいのだろうか。

『名を、貰えるのは初めてなんだ、兵藤。……照れくさいよ、名前など。生まれて何千と名無しだ。神の遣いで、人の遣いで。——私は、明確に“生き物”としても生きていいのだろうか』

彼女からもらったそれは、なんて名前なのかを俺には教えてくれないか。俺にも、呼ばせてほしい。

きつと綺麗な名前なんだろう。

鈴が鳴るような、時折季節をかがせる。

夢い少女を支えた大切な。

『彼女は、生まれてから楽しさで笑えたことがない。だから兵藤——もし、彼女と帰れたならば共にどこか花を見に行こう。西にとても美しい丘を知っているんだ。人は、そし

てその女は花が好きなんだろう？　だから、私と共に、彼女と共に。君を通して話をしよう。——楽しさで笑えるような、事をしよう』

いくらだつて付き合つてやるのに。

君が話し続ける限り、彼女にそれを伝える。目を見る限り、位置を教えよう。

触れるその手に、笑うその声に。

人間だとか、獣だとか。

そんな引け目もなにもかも消えてしまふくらい、二人の近くにいてもいい。

俺とドライブもそうだ。

龍とか人とか悪魔とか。多分、関係がない。

言葉があるなら、「好き」だと伝えれば、想いは叶うはず。

見たかつたんだ。

今度は、二人が二人を想える、そんな所が多分。

見てみたかつた。

話をする獣は、僅かな時間で多くを語つた。

『聖獣と聖女といつても、どこまでも獣と人なんだ。重なる文字と重ならない文字は、とても遠い。……神はきつと優しいんだろう。いつか、長い時を経て、別れがくる。そばに居続けられない獣に、そして長く時を往けない人に。——酷く優しい』

想いは覗けるのに。

二人のその手は、指は重なることが出来ない。

そして、出逢いを知れば、暖かさを知ってしまったえば悲しみは増す。

寂しい。

多分、一人にでいたときよりも、知ってしまったえば彼女の寂しさが辛い。伝わらない気持ちが悲しい。

なぜ、もつと生きることが出来なかつたのだろう。

最後に彼女と出逢い、そして彼女の為に死ぬなんてそれは彼だけの想いじゃないのか。

彼女の想いは——……、

『……………』

ドライグは、何かを知っている気がした。

彼女を置いていけるのは、何故なのかを。満足しながら、彼女の未来を願えたのは。

「本当にありがとうございます。……私の心の弱さが多くの人を傷つけたのですね。とても酷いことをしたのをどこかで覚えている気がするんです。私は……最低です」

彼女の握り締めた手からは鈴の音がした。

愛を与える音は、部内の沈黙を飾った。

違う。

そうじゃない。

アーシアは鈴を胸に当て、そして目を閉じながら語り出す。

「なんだか、夢を見たような気がします。空は雲がありました。日の光がとても優しく、風が綿毛を飛ばすんです。とても綺麗な丘の上で、その下には様々なお花があるんです。そして——この鈴の音を聞きました」

シヤランと鳴らした。

泣いてしまいそうになる。

聞きたびに思い出してしまつて、そのたびに「可哀想」だなんて思うのは不謹慎だろうか。

「初めて夢を見ました。本の中で見た『夢』というものは、こんなにも綺麗なものと、初めて知つたんです。おかしいですよ、とても。あんなに色々な事があつた中で、こんな夢を。……幸せに思つてしまいました。あなたたちにあのような不幸を渡して書いて」

木場が拳を強く握り、顔を逸らした。小猫がどこかの誰かを想いながら、何かを重ねている。

失つたものの大きさを皆、知っている。

目の前で、消えたそのの全てを知らずとも、想像出来てしまう。

あのような、必死な彼を見たのなら、きつと。

「君は——その鈴をつけた獣を見たかい」

言葉が発す。

一誠は、アーシアを見つめた。

アーシアは、

「はい。すごく美しい毛並みをした。伏せた耳からこの鈴を付けていて、体に金色の紋様を走らせる、大きな方を」

夢の中の、彼は彼だった。

本当の姿を見せたかった。

最初で最後の逢瀬は、*“自分”*がよかったのだろう。

「——その獣はね、君のことを——」

『——約束、してほしい』

「何を？」

『私が話したことを誰にも。その時に、私から伝えたい。その時は兵藤——その場で伝えてくれるかい？』

「ああ、もちろんだ」

ああ、ダメなんだ。

なんでこう、うまくいかないのだろう。

こんな約束なんて。

もう、あつてないようなものなのに。それでも、

『——約束、してほしい』

どうしようもなく、ずるい。

なんて、卑怯な獣なんだと、思ってしまう。

とても大事な言葉なくせに。

心を俺ばかりに見せて、魅せられて。

明かせない秘密だけをつくっていくんだ。

守る側にもなつてほしい。

「……どうしました？」

「……幸せになつていいんだ。その鈴は愛をあげるんだろう？ だから、そのためには

持ち主の人間が幸せにならなくちゃいけないよ」

これくらい、いいだろ？

想いをギュッと詰めたら、こうなんだろうから。

これくらい。

あの世で、少くくは照れさせたって、文句を言うなよ。

アーシアは、その言葉に優しく笑みながら、「はい」と言った。

「あの方にも同じことを言われた気がします。私の渡した痛みを、そして悲しみをいつか埋められるような。そんな女性になりたいです」

きつと、彼のように。



行くところもなく、頼る当てもないアーシア・アルジエントはリアスが一時的に引き取ると連絡があつた。

再び、教会へ戻してしまつては意味があるはずもない。

約束したのだ。

任せると。

領いてしまったんだ。

任されると。

彼女の歓迎会として、今日は朱乃の住む神社でたくさん話をするらしい。

お菓子を買ひ、ジュースを用意する。

女子のメンバーのみで行われるそれは、騒いでも近所まで音が届かない場所だからこそ、その神社なのかもしれない。

ただ、今日。

彼女は、よく笑っていたらしい。

とても。



その日の夜、一誠は自室でベッドへと横になりながら、目を閉じていた。

「別れだけはどうにも、慣れない……。ドライグ、これはダメなことか」

ドライグはただ黙りながら、何かを伝えようとした。

しかし、やがて言葉で示す。

『……さあ。悪魔なら、いつか慣れるさ。長い長い時の中でお前は慣れるさ。そして、俺は——もう慣れたよ』

その言葉にはとても重みがあった。

ずしりと感じる言葉に、空を見上げてしまう。

今も、人はどこかで死んで、そして、誰かが泣いているのだろうか。

慣れたよ、と言うドライグの声音に儂さが宿る。

君は……、どれだけの人を見てきたのだろうか。送ってきたのだろうか。泣いたことはあるのか？

叫んだことは、あつたのかい？

一誠は、それを口元まで出そうとして止めた。

きつと、どれもないのだろうと一誠は思った。

心で泣いても、顔には出さないはずだ。

今回のことも、彼は何も言っていない。それは辛くないのだろうか。

しかし、その理由はこれだけで事足りるのだろうか。

——彼が、どこまでも「赤龍帝ドライグ」だから。

ならば、聞いてみたいことがある。

一誠は手を天井に翳しながら考え込んだ。

慣れている気がしたんだ。

しかし、それでも心をどこか細い糸で縛るみたいに、苦しくなる。

——殺しに慣れていいのだろうか。

墮天使を殺してしまった。

あそこでは、ああするほかなかった。いや、他に方法は本当になかったのだろうか。

初めて死ぬ時の想いを覗いた。見てしまった。

初めての——悲鳴の音は、とても怖くて、痛そうだ。

体じゃなくて、なくなる命に心がとても痛そうだった。

辛いとか、泣きたいとかそうじゃない。味あわなければわからない。

——ドライグ、俺は犬や猫の死にゆくとこすら知らないんだ。

死んでいるのは時々、道路や公園で見かけたよ。

当たり前のように、捨てられた彼らはなんて思つて命の火を消したのだろうか。

どこまでを恨みとしていたのか。

人を——殺したいほど憎んだだろうか。

涙を流せない生き物は可哀想だと思ふ自分がいた。

悲しいと言えない彼らは、気づいてもらえない。

わかつてもらえない。

悪いからと、ただ殺すのは良いこと何だろうか。

名も知らない友人を思い出す。

誰もがあんな死に方を出来ればそれは幸福何だろうか。

それは、まだわからない。

ただ、彼を見て知った。

——世界で一番重いのはきつと、命だと知る。

わからないことばかりだ。

『——悪魔になつても思考はまるつきり人のままだな、相棒』

「心は人だよ。きつと」

『俺は殺しも慣れたよ。生まれ落ち、そしてすぐに誰かを食べたさ』

「それは、痛いのか」

『心は痛かった。——しかし、死ぬわけにはいかない。お前たちは見ていないだけで散々生き物を喰らっている。その分、きつと残酷なのは人だろうな』

「理由は？」

『——喰われることが決められた生など、価値があるかわからない。人にとって価値はあるが、人が喰われるために生かされたとき、同じことを思えるか？』

どうだろう。

いや、決まっている。

奇麗事をどんなに言う人間であろうと、その局面に出くわすことがあつたのならば——

「多分、泣くんだろう」

人間は強くて、傲慢で、意地を張り、そして、どこまでも優しくなれる。

とても、弱い。

『お前たちが犬の一生を短いというが、俺たちからすればお前ら人間こそ、同じだ』

その人間に恋をしてしまった者はどれだけいたのだろうか。

老いる彼らを尻目に、麗しい己を鏡に映した時、なんて思ったのだろうか。言葉も交わせる。子もなせる。しかし、どうして——生きる時間がここまで違うのだろうか。

会えてしまう世界にいるのに。

『——くよくよとこれだから人間は面倒だ。しかし、——何だろうな、それがいい。相棒、今日最後にこれだけ言つてやる』

「ああ」

『価値観を損なうな。悪魔なお前はどこまでも人を貫け。戦場で殺しをするのは必然的、ならば、その死を笑うな。どこまでも噛み締めながら空を眺めて涙を零すな。痛くなれ、そして泣くな。——殺した相手へ泣くなど侮辱である』

彼は、それを何度繰り返したのだろうか。龍とは、こんなにも相手を思える。笑えるし、泣けるのだろうか。

変わらない。

心を持つそれらはどれも、等しいくらいに変わらない。

何千年と時を登った龍帝の忠告は、一誠の心をどこまでも確かめさせた。

そして、彼の優しさを
知る。
赤い龍の、何かを知れた。

枝の花色は、彼女の目を揺らして

雨がしとしと降り注いでいて、水面に点が広がり、蛙が飛び跳ねる。

アメンボが泳いでいる姿がよく見えて、池の水もなかなか水面を高くしていた。

銅は濡れる。

苔などは生えない。

毎日毎日、せつせと綺麗にしてくれる厄介者がいるからだ。

その女は、雨の中でも、私を磨く。

私の鈴が錆びるわけもないのに、音がしなくなつては大変だからと布をかけてくれる。

その布だつて、きつとお前の僅かな持ち物なのだろう？

バカな女だ。

そんな雨の中で泣いていたって誰も気づきはしないぞ。

誰も、気づきなどしない。

今日は、何があつた？

さあ、話すといい。

また小うるさい年のいった人間の女に頬でも叩かれたのか？

それとも、また不幸者が、より不幸に落ちるような行いをお前にしたか？

さあ、話すといい。

聞いてやる。

いつまでも、夜になつても。

話す限りは、私の耳を貸してやろう。

その涙、誰もきづくはずもない。

だから、掃除をするふりをして、外で、雨の中で、涙を隠しながら泣くのだろうか。誰も気づかないだろうさ。

——私以外は。



時は冬。

秋の葉は枯れ落ちながら、土に還り、雪の下へと身を隠していく。

寒いという感覚は、知ったことがないが、見ていればそうなのだろう。

目で寒さを、知っていく。

池は凍り、水の溜まりすらもうつつすらと表面を固めて、それを壊す彼女がいる。少しだけ楽しそうに、パリンパリンと水面を蹴る彼女は、いつになく上機嫌だ。

北に住むというのは、雪に慣れなければならない。

山も、野も。

草も、木も。

ああ、この季節が再び来たのだと呟いている。

私には、それが聞こえるのだ。

空に行方を眩まし、やがて水平のどこかへ消えゆく雲すら何かを語りそうに阿呆のよう。

空気が澄み、虫の声もなく、ただ静かなこの地域に響くのは私の鈴音と教会の鐘くらいなものだろう。

しかし、もう少しマシな場所へと建てれば来るものも多いのではないかと思うのだ。

このような、年寄りでは些か腰を痛める道を用意し、そこへ教会を建てるなど、修行のつもりか、バカめ。

信仰を集めなければ、私もお前たちに微力の運をやることできない。まあ、それはそれで構いはしない。

人など、少しすれば死ぬのだから。

そう、思いながら生きてきた。

しかし——……………

こいつは、成人まで生きられるのだろうか。

目の前で、金色の髪をよくわからない紐で結んだ少女は、私を掃除しながら今度は地面に絵を描き始めた。

手袋などしていない。

赤くかじかんだその手を見ると、火は、暖をとれるものはと周囲を探してしまった私は悪くないはずだ。

雪を靴でどかして、その下に何やら書いていく。

「出来ました！——様！——どうですか？」

応えると思っているのか？

風もなく、雪も止み、そして鳥さえも声を鳴らしていないその場所へと彼女の声音がすつと耳を揺らす。

「結構、似てませんか？ ……といつてもすぐに消さないと。怒られてしまいますね」

舌を出し、痩せた女は苦笑いのままに雪を被せた。

そういうところが嫌なんだ。

その笑い、かんに障ると言うもの。

「また、お掃除に来ますね——えっ」
仕方ない。

風もなく、雪もない。

けれど、本当に偶々、偶然に、何かの奇跡が起きたということにしとくといい。

——シヤランシヤラン。

触れていない手。

それでも、音を鳴らさせよう。

仕方がない。

お前が、この年終わりの季節にそんな顔をするなら掃除のお礼だ。

鈴を鳴らそう。

「わあ……なんだか良いことありそう……」

あるといいな。

あるはずだ。

この音が聞けたのならば、多分。

天使でも来るんじゃないか？



人間とは勝手なものだ。

叶えられなければ、なにもかもに当たり、嘆き泣き。

そして、悪に向けるかのような目つきをする。

くだらん。

しかし、

「……また、変な傷が出来ていますね。このようなことを何故するんでしょうか……」
何でもかんでも痛ましく思ってくれるこの女は感情が人らしくない。

どこかの高貴な御霊を降ろしたのではないかと時々、気になってしまう。

そうして、彼女は掃除を始めた。

箒で葉をどけながら、草を抜きながら掃除をする。

やがて、そこいらの掃除が終わると私を磨き始めるのだ。

「最近雨が降りませんから、銅も乾くのがとても早いですね」

布切れを「ごしごし」とあてがいがいながら、上から下へと丹念に拭いていく。

「……後少しで冬から春へ。今年は、桜が見れるでしょうか」

花を愛でる時間もなく、その時間を私へと使うのだから下手な生き物だと思う。

しかし、桜。

そういえば、あの木は人間が特別に、想いを入れ込むとかつて、通りかかった狐から聞いたことがある。

この山の最奥に冬から春にかけて咲き誇るといふ桜を聞いたことがある。

正確には、桜なのか分かりもしないが。花を綺麗だとは思えど、種類などは知るはずもない。

しかし、見た目が変わらないのであればどうでもいいだろう。

……連れて行けないものか。

いや、しかし、その木は強い雷が落ちた故に、特別な霊気が混ざり合って咲くというもの。

魔力もないような人間には、見ることも出来ない。

魔物や天使など、本来この人間世界の理から身を外した者しか楽しめない。

……やめるか、そこまでやってやる義理もない。

「……一度でいいから、見に行きたいなあ……、町へ買い出しに行かされることがあれば……」

……………。

『くそう……なんだってこんな辺境な場所へとわざわざ咲くのだ』

「よりしろ」から、出るのは些か身体にきつい。

しかも、夜中だから変な輩も多いし、足場もぐらつく。

『……チィ。あの女が起きる前に片を付けなければ。鈴がないのを知ればどうなるかわかったもんじやない』

聖気を無駄に使うわけにもいかなく、四足を地道に使いながら、山を駆け巡る。

『……あれか』

桜なのか分かりづらいが、ただより赤い葉だ。

私はそれを見つけると木の枝へと噛みつき、一本ほど拝借することにする。

『……許されよ。理由なく取るわけもない。いずれ、私が聖気を分けにこよう』

ただ、聖気を分けて、葉の色が変わってしまったてはどうしようかと思ってしまった。

次に来るとすれば、来年になろう。こういう来年のことを今から考えるのは、確か、鬼が笑うというそうだ。

よく考える。

そして、私は取りに行ったその枝を口に咥えながら山を下る。

『……疲れた。これつきりだ、こんな事。阿呆らしい』

その枝を銅像の前へと置くと、私はそれへ同化する。

そして、あの女が来るまで寝ることにした。

『……ん？』

「この枝はなんでしようか……？ 捨ててもいいのかな……」

『だあー！ 折ろうとするな、阿呆が！ そのまま持つていろー！』

私は、枝を掴み、ゴミ袋を持つてそこにいる彼女を寝起きに見つけると聞こえない声でそう叫ぶ。

とつさに今だけ、〃よりしろ〃から出て、彼女に取り憑いた。

ただ、取り憑くといっても、一分もない。

聖象でもなく、魔力もない人間の女についてられるなどこつちとしては苦痛なのだ。

『……視格のみを私ほどに引き上げようか』

とにもかくにも、私は彼女の目の格のみを憑きながらどうにかする。

そうすれば……

「は……きや、きやあ！ え、え？ す、すご……い。なに、魔法ですか……？」

その慌てようときたら、絵にするのは無理だろう。

私ですら初めて見るのだ。

「……綺麗……」

ただの枝は、一瞬にしてその花を咲かせる。

幻覚のような、淡い赤桃色の葉は、彼女の記憶に残るだろうか。

私に出来ることなどこれくらいなものだが、それでも今は。

その柔らかい笑顔を花より眺めているか。

阿呆な女だ。

たかが枝一本のもので、阿呆な。

——いや、阿呆なのはきつと私もか。

いつか、目の前から消えゆく人間には決して情をかけまいと生きてきたというのに。

その桜散るような儂い笑顔に、光を灯せたことをこんなにも、嬉しく。

そして、彼女にみいってしまふのだから。

行方の知れない

「あ、一誠さん、このお花はどうですか？」

「ああ、いいと思うよ」

春から夏へ。やがて秋へ冬へと世界はよく廻るものだ。

どこの地にも、四季があつたのならば、こんな豊かなことはないのかもしれない。

アーシア・アルジエントは、10日ほどリアスが預かり、やがて兵藤の家へと移されることになった。

「——彼女に、家族というものを教えてあげて欲しい。妹のように、あの子を笑わせてあげて。そして、」

そして、彼女は黙った。

いや、言わずともわかるはずなんだ。

わがままだろうと、約束が何であろうと。

彼が、託して逝けたのは、友に彼女を任せるからだという一つの言。

五月に季節は入り、やがて雲の流れも少しずつ、変わっていく。

桜の香りは既に途絶えているが、他に実を付け、花をつける時期もまた、来るとい

もの。

「お母さん、喜んでくれますか？」

「多分、いや、きつと。もしかしたら泣くのかもかもしれない」

彼女は、とても笑うようになった。縛り付けられた表情を溶かして、口角を綺麗にあげるのだ。

「……お母さんにプレゼントをするなんて——本物のお母さんになってくれたみたいですよ」

「向こうはそのつもりでいるよ。だから、よく甘えていいんだ。相談をして、ご飯をおかわりして、たまに欲しいものをねだって……、それが『普通』の子供になるってことなんだと思うよ」

彼女に母はいない。

しかし、それでも母になれないなんて決められた覚えなどない。

母は強し。

いつだって、最後に味方をしてくれるのはお母さんであってほしい。

今日は五月の中旬目の曜日。

それは、

「——幸せすぎてバチが当たりそう。けれど、それでも幸せを望みます。そうしていき

たい」

「そうしてくれ」

「帰ったら、カレーを作るんでしたね？」

「そう、だから玉ねぎをたくさんいれようか」

「体にいいからですか？」

「もちろん」

「じゃあ、急ぎましよう。よし、このお花で」

——今日は母の日。

一年に一度ある母のための一日。

アーシアが手元から店員へと手渡したのは、彼女が手伝いをやり得た少しの——初めてのお小遣いと足りない分を埋める一誠の金銭。

二人は少しも似ていないけれど、共通の母と父と家、そして獣との何かがある。

これを兄妹のようだと、言つて文句はあるのだろうか。

後にスーパリーの袋を片方ずつ持ちながら、自宅のドアを開けようとする二人の手はそこで重なり合った。

おかしなことで、笑つてしまう。

母の日に、こんなに自身が幸せになるのはいいのか、などと思つてしまう彼女はもう、

いない。

こんな日常を嘔み締めながら、夕日に染まる空を見るのだ。

どこかで、彼女を見守っていてくれていたらと、探してしまう癖は当分抜けそうもない。

ただ、こんな当たり前は、非日常に身を寄せていた彼女にとって、非日常であり。

やがて、この非日常こそが日常へと移り変わるを今は待とう。

今日は、カレーを作ろうか。

玉ねぎの涙は、少ししよっぱいだろう。それでも、成分すら違うとしてもだ。

案外、暖かい涙の次くらいには幸せな涙なのかもしれないよと心に思つて、一誠は横でヒーヒー言っている彼女を見た。

そして、母が帰宅するのを、鍋が煮えるのと共に待とうか。

時折、匂いを玄関先まで逃がしてみたりしながら、食欲を誘おう。

花は二人で一緒に渡せばいい。

時計の針が日にちを変えてしまうまで、この日は終わらない。

このような日が来年も巡ると、

二人は信じている。



「――部長」

部室内に女性の声がした。

室内には、全ての眷属がおり、それに加えてアーシア・アルジエントがいる。

皆が椅子に座り、放課後のそれぞれを楽しんでいた。

リアスは、どこか遠い目をしながら空を眺めている。机の上を、一定の間隔をあけて叩いていた。

祐人は、何度か剣を生み出しながら首を捻っていた。

小猫やアーシアは、互いにお菓子の食べ比べをし、そのうち行く予定である店の話で楽しんでいる。

一誠は、とくにやることも起きずドライグとしりとりを心の中でしている。現代用語に疎いドライグは敗戦中であつた。

そして……、

「なに、朱乃」

リアスは、話をかけてきた朱乃に顔を向け、言葉を発した。

朱乃は一度リアスの様子に何か、言いたげな視線を送るが、リアスの瞳にはそれに触

れて欲しくないといったものがあり、本来言おうとしていた言葉を送った。

「アーシアさんの眷属関係のことです。あまり引き伸ばしにするのも本人のためにならないでしょう」

アーシアは、教会に居場所などもちろんない。墮天使や悪魔の地区のもとに居たのだと分かれば、そのまま処刑もあるのではないだろうか。

そして、一般人として生きていくも良いのだろうが、本人が納得していない。

一誠が家にいる。

そして、彼女も共にいるのだ。

家も両親の優しさも得ることが出来た。そして、初めての友人となった部員たち。命の救い人。

そして——、御守りの強さ。

彼女が、それをほっておくのは些か無理がある。

故に彼女は、悪魔になることを望んだのである。

「……わかつてはいるの。でもね、彼女の神器はイツセーのような凶暴なものでもないし、彼女自身は戦う力がない。それに辛い思いを随分としてきたみたいだし、このまませめて高校を卒業するまでは自由に暮らすのも悪くないって思うの」

みんなが朱乃の声に反応し、リアスを見やる。リアスは、皆に聞こえるほどの声でそ

う言った。

最後にアーシアを見て。

「……しかし、彼女の神器は希少ですし、他の悪魔が来ないとも限りませんよ。今回だつて彼女の有益性に墮天使が近付いたのですから」

「悪魔云々はおそらくは平気。この名前は重いと思うこともあるけど、それでも公爵なわけだし、仮にも魔王様の出なのだから、私が世話をしているのを知っていて手を出す者はいない。それに赤龍帝と同居している彼女に手を出せる程、怖いもの知らずもいないでしょ?」

そう話すリアスの瞳は、アーシアをよく見ていた。彼女の身の上を案じているのがよく分かる。

アーシアはそれを受け止め、そして一度目を閉じた。まるで心の整理をするように。

しかし、やがてアーシアが席を立ち、リアスの前へと足を運んだ。

「……アーシア」

「本当にありがとうございます。私はこんなに心配されたことがなく、どこか気恥ずかしくもなつてしまいます」

アーシアは一度腰を曲げ、彼女へ礼をした。その際に綺麗な髪が彼女の頬へとかかる。

彼女はそれをのちに払い、淑女のような手つきで髪を耳へとかけた。

「——けれど、悪魔になることがあれば、私も魔力を使うことが出来るのでしよう。私の神器をさらに使いこなすことも出来ると聞きました。……これから先、みなさんがどこかで戦い、傷つき、痛みを感じている間、私はここで祈るように待っている……、私を私は出来そうにないのです。その場で私が治し、みなさんを精一杯サポートします。私が戦えないと言うのなら、頑張らせて下さい。もう、誰かを知れなく、気づかないうちに誰かがいなくなってしまう、そんなことは嫌です。せめて——傍で」

彼女が人間として生きていくならば、きつといつか何かがあるのだろう。血だらけの誰かを迎えることも、ひとり帰らない人に、皆が泣きながらなんていうことも。

わからないが、想像してしまうのが人間なのだ。

一度経験すれば、わかるだろう。

酷い話かもしれないが、知らない所で死なれるのだけは嫌だと、彼女は思っている。いや、無意識に感じているだけかもしれない。

それでも、その時に自身がいれば助かったのかもしれないと思うことだけは堪えられない。

リアスはそれを聞き、気持ちは分かるし、理解もできると思った。

多分、自分もそうなのだろう。

初めてお菓子を食べた。

ジュースというものを飲み、祝い、ふぎけることが出来た。

少しの間、一緒に暮らし、髪を洗い、テレビを見せてあげた。

そして、ベッドで抱きしめながら寝る。

いつもいつも当たり前に行うこのことを知らない彼女をとててもかわいそうに思ってしまう。

そして、これからはもつといろいろとしてみたい、誕生日には大きなケーキを買い、ロウソクはもちろん年の数で、なんてことを想像していた。

そんな相手を血の場から遠ざけたいのは心理として間違っていないのだろう。

己もアーシアも、どちらの気持ちも肯定できる。

最良の選択というのは、おそらくないのだ。

人が死んだとき、繕いでもなく後悔をしなかつた時、その時くらいにしかわからない。選択など、どれもが合っていて、間違っているのだ。

未来は幾重にも分かれている。

悪魔になり、幸せになる道と後悔する道、人のままでもそう。

未来の行動により、その時の選択の良し悪しは初めて定められる。

彼女にはここで決めることが出来ない。
ならば、

「……信じましょうか。これで彼女が後悔したら私が恨まれちゃうしね」

リアスはため息をわざとらしく吐いて、苦笑いをした。

そして、言う。

「絶対に守るから、アーシア。王の私がどんな火球を前にしようとも、あなたを庇う。だからね——」

アーシアの瞳を覗く。

リアスが再び口を開けようとして、アーシアが先に言った。

「——私が必ず治します」

「あー、とったね？ 今、結構いい感じだったのに」

「あらあら」

アーシアが真剣な表情でそう言った。リアスは、それを笑いながら茶化す。それに朱乃が口に手を当て笑った。

みんな、笑っていた。

「アーシア・アルジェント。あなたをこのグレモリー眷属の僧侶となることを命じます。受けてくれますか？」

「——はい、もちろんです。リアス様」

「様なんてやめて。お姉ちゃんていいんだから」

そつと抱き寄せる。

これで、六人目の家族ができる。

増えればそれだけ、誰かを守れるのだろうか。

それとも、それだけ家族の誰かを失う確率も増えるのだろうか。

未来はどこまでも増えていて、広がる宇宙のように永遠に道を広げていく。

この選択こそが正しかったと、いつ分かるのだろうか。

知るすべなど今はないが、この温もりや暖かさだけは本物である。

とにかく、今この時は間違いなく、家族が増えたことが喜ばしい。

「よろしく願います、みなさん」

正しいのだと、自身を信じて。



炎が灯る一室。

その場に一羽、不死鳥がいた。

「……そろそろ話を大幅に進める必要があるよなあ」

その通りだと頷く。

この場に居合わせる数人の眷属の前で彼は行ったり来たり。

まるで初々しいカツプルの彼氏が彼女の登場を待ちきれないようであり、着崩した格好にはあまり合っていない。

「……しかし、ライザー様」

「ユーベルーナか。どうした、今考え事してるんだが」

ユーベルーナと呼ばれた女性は一度腰を曲げ、再び起こす。

その際に崩れた前髪を少し直し直し彼女は神妙に告げた。

「リアス様とご婚約の話を」

「……だから、それを考えてるんだって。見てわかってくれよ、このかきむしってボサボサの髪を」

「……後で侍女を呼びますね。話を戻します。かのお嬢様はどうにもこの婚約には乗り気ではないご様子です。しかし、ここで婚約出来ずともなればライザー様、および眷属にもあまりよい評判とはなりません」

「いや、知ってる。ましてやここ最近で成り上がったこの一族にとつて上位貴族との繋がりは大きすぎる。もはや、俺だけの話じゃあない。この先——1000年、2000

年先までレーティングゲームがあるとも限らない。この一族の地位を盤石にするには、どうしても常に安定している彼女の一族と結ばれることがおそらく一番いい」

フェニックス家である彼は腕を組ながらそう発言する。

フェニックス家は、この何百年かで力を上げてきたいわゆる成り上がりである。成り上がりとは、古くからの上位貴族にあまり良い顔をされない。

ましてや、その経緯が『ゲーム』であるレーティングゲームおよび、フェニックスの涙という回復薬のみであるため、どうにもパンチが弱い。

レーティングゲームはあくまでも戦いから遠ざかった悪魔が平和ボケをしないように、などという名目もあるのだ。そして、ジャンルとして娯楽とも言われる。娯楽と言えるほどに楽なものでもないが、そこらへんは人間のやるボクシング観戦のようなものだろうか。

主に死なないが、死なないこともない、などという。

とにもかくにも、

「フェニックスの涙は、戦いが起きなければ基本的に需要がない。悪魔は魔物や人間と違い普通に生活していて怪我というものをしないし。そして病に利くわけでもないから……。つまりは、レーティングゲームが無ければこの成り上がりから先にはいけない。そして古い貴族は変化を嫌う。我々が上位貴族に大きな顔をできるようになるこ

とも我慢出来ない人がいるはずなんだ。だからこそ、お偉いさんがその様な『ゲーム』で古い悪魔を押しつけられ、下位の貴族や転生悪魔に地位を奪われることになることがあれば、間違いなくレーティングゲームを廃止する。……上はそういうことばかりやってるんだ。今は魔王も変わっているのに」

ため息をつく。

いまだに序列というものが壊れていない。

新しいものへ世代へ世界を預けることをしない。したくはない。

長い時間の中で、そのような考えばかりが育つてしまうのだろうか。

悪魔は出生する確率さえも極端に低い。故に、早め早めに結婚はしたほうがいい。

「悪魔は魔王が変わってから多少ごたごたしているし、先に何があるかわからない。フェニックス家は、戦闘でこそ有益になるが、それをなくせば築いたものがない。だから、せめてこの先、一族を安定させるためにはリアスとの婚約がやはり鍵となるな……。しかしなあ」

「どうかしましたか？」

「……グレモリーは切迫話まっているわけじゃない。だから、こちらと違い焦りもないんだよ。しかし、婚約する話は親同士で進んでいるからリアスもそう断れないわけだな」

「……それで拒否されていると?」

「しかもあいつは学生だ。人間社会にいたとはいえ、悪魔世代でもまだ学校へ通っている時期なわけだ。……あとは、人間に慣れすぎたのもあるんだろう。俺とリアスはそう離れていないが、俺が人間だったら人間世界で言えばそれなりには離れていることにはならない。こないだオジサンと呼ばれた」

「……お、オジサン」

「……ああ、俺もついキレちまつてな。今と前の写真を見せまくった。どれだけ俺の容姿が衰えていないかを見せたんだ」

「どうなったのですか?」

「魔法陣拒否された。魔拒だ」

魔拒。

それは人間世界の着信拒否を意味する。

『なに格好つけてんの? 眉毛も剃りすぎ』って言われた。俺はな、人間界大好きな彼女ののために人間のオシャレ雑誌、メンズエ〇グを見て研究したんだ。髪を伸ばし流し、カラコンなるものを入れてみたんだ。そして、ピアス、まさに人間界最強のイケメンの完成だ」

「……は、はあ」

「やたら厳つい獣の毛皮のような衣服を纏い、すね毛も剃りまくった。そしてタバコとかいいう人間の趣向を凝らした」

ライザーはそこで胸元のポケットを弄り、手のひらサイズの箱を取り出した。

「今ではニコチンという成分にはまっている。これが、なかなかいいんだ」

ライザーはタバコをくわえ、物凄くキザなポーズで指先から炎を出し、火を付ける。

「ふう——。この姿を動画で送ったら何故だか奴の女王からも苦情がきてな。そんなにおかしいか？」

「……………話を戻しますね」

もう、ユーベルーナはついていく必要はないんだ。

そう、彼女は諦めた。そして、本題へと入る。

「……………このままではズルズルいってしまいます。ライザー様はもう少し非情になって下さい。あなたはこのフェニックス家の三男。ルヴァル様よりも婚約を早くした一族の期待なのですから」

「——わかつている」

「おそらく、このまま承諾されない場合はレーティングゲームになりましょう。その様に仕組まれておりますから」

「……………まあ、些か良心が痛いんだがな。どうにも出来レースで彼女を手に入れるみたい

で

「それも運命。なればこそ、徹底的に敗北させるのも運命でしょう?」

「……そうだな。どちらにしる家のことに俺は逆らうつもりもない。ならば彼女がどれだけ嫌がろうとも無理矢理にでも婚約してもらおう」

「そのいきですよ、ライザー様」

花は実をつけてから咲くものだ。だから、結婚という実になってから彼は幸せの花を咲かせようと決めたのである。

決心が決まったとライザーは頷いた。眷属の皆もそばに集まり、先に来るであろうレーティングゲームに思いを馳せていた。

しかし、そのような穏やかな空間へと乱雑な音が響いた。

「——お兄様!」

彼、ライザーと同じ髪色を左右へと揺らしながら扉を開けた。

「レイヴェル、なんだ」

「——大変なんです!」

大変だと騒ぐ彼女は普段の落ち着きがない。

彼女の瞳が大きく揺れ動き、息を整えるように一度息を吐いた。

その背中を移動したユーベルーナが優しく撫でる。

「レイヴェル様、どうかなさったのですか？」

「悠長な事態ではありませんわ！」

レイヴェルが眷属全員を一瞥し、最後にライザーを捉える。

「——グレモリー家から、婚約の破談を申し込まれました！」

紅い糸

フェニックス家の家内は騒然としていた。それは、大騒ぎと言ってもいい。

フェニックス家に仕えるメイドたちは主人の機嫌や顔色に大慌てし、当の本人達は――

「父上！ 理由をお聞かせ下さい！」

急ぎ足のライザーがドアをノックすることなく、当主である父の自室を開け放った。

当主はそれを咎めることもせずただ俯き、暗い顔をして息を吐いた。

「……ああ、すまないな、ライザー。こんなことになるはずじゃなかった……」

どこまでも暗い父親は、顔をあげない。その後ろに控えている侍女も表情を強ばらせている。

ライザーはそんな父を一瞥すると、父の机に置かれていた数枚の書類を無造作につかみ上げ、それに目を通した。

「……なんだこの理由になつていない理由は」

そう、ライザーは呟いた。

唾然。もはや、怒る気にもなれない。

これとどのような関係があるというのだ。そもそもこの話は、これはグレモリーの勝手ではないか、我々との婚約を破棄するほどに本当に大きな事案なのか、とライザーは指先に力を込めた。そのせいで、書類は歪み、折目が付いてしまう。父はそれを力のない瞳で見上げていたが、特に注意することもしない。

やつれていた。

そして、そこにはこう記されていた。

『此度の婚約、まことに勝手ながら破談にはさせてもらえないだろうか。グレモリーとしてはあまりに大きすぎる事案を抱えてしまった。いや、悪魔にとつても大切な事案である。これらは後に知れ渡ることになると思うが、今は深く聞かず堪えてはいただけないだろうか。ここで、この家の長女、および眷属に余計な刺激を与えたくはない。いわば、爆弾のようなものである。悪魔全てにおいて、この初なる事態に我らは時間を割きたい。娘の将来に大きく関わり、悪魔が他の種族に対して大きな抑止力を持ち得る事態である。賠償金も払いましょう、宝石の受け渡しもする。そして、繋がりはこちらよりも深く結ばせてもらいたい。しかし、今回だけは引き下がっては貰えないだろうか』
具体的なことが何一つ記されていなく、ただ引き下がって欲しいとの一辺倒。納得など出来ない。

しかし、あの名家がここまで低姿勢でくるのも珍しい。

ただ、これは礼儀を欠いてはいないだろうか。

それとも、そこまでのことなのだろうか。

ライザーは、そこまで思ったところで父を見、言った。

「……父上、私は少し彼女の所へ話にいってまいります。これでは埒が明かない。まだ、返答をしていないのならば話は通じましょう。これは、最低限やるべき行動です」

ライザーは、その書類に火をつけ一瞬で燃やすと、父にそう言った。

父は少しの間、逡巡していたが、やがて、頭を縦に振り許可を出す。

そして重い口を開いた。

「……向こうのリアス姫はもとより乗り気ではなかった。だからこそ、ないとは思うが彼女が駄々をこねたともわからない。なにせ魔王を排出した名門の中の名門だからな。顔もきく」

「グレモリーは眷属や家族を異例なほどに愛しますからね。娘のために破談した可能性のことも頭に入れておきます。……最悪の場合レーティングゲームを持ち出しましよう」

なりふり構ってられないのだ。

フェニックスは戦闘に置いて負けることなど片手ほどもないのに、元からの地位のみ

で下に見られる。それは正直、我慢ならない。

しかし、それでもここまで成り上がることができ、あのグレモリーと婚約の話がとれるほどの釣り合いを手に入れた。

ただ、これから先いつレーティングゲームがなくなつて、さらには、涙の需要さえもなくなり、再び下位の貴族扱いされるかもわからないのだ。故にこの婚約は、簡単に転ぶことができなかった。

ライザーは父の部屋を再び急ぎ足で出てから、自室へと向かう。

その際に魔法陣で眷属の皆に呼びかけた。

「――支度をしろ。今から人間界、リアス・グレモリーの牙城へ向かう」



この頃、グレモリー一家では、紅の髪を揺らす二人の悪魔が話をしていた。

その一人の後ろに銀髪のメイドが控えている。

石と木材を美しく合わせた部屋には天井に豪華なシャンデリアが下がっていた。

その光に当てられながら、鬚を生やした悪魔が口を開く。

どうにも空気が重い。

「……フェニックス家には断りを入れた。さぞ、無礼を働いたことだろうな」
「それは仕方ないのでしよう、父上。承諾してくれるかもわかりませんが、それでもやらないよりは、という事です。このままでは確実にレーティングゲーム、しかし、断りを入れたならばそれ以外の解決策もあるでしょう。負担の少ない可能性のある選択を選ぶのは悪くありません」

もう一人の悪魔がフォローするように言った。

言い訳をするならば、グレモリー家は、フェニックス家を軽視しているわけではない。父上と呼ばれた悪魔はため息の後にこう呟いた。

「……まさかリアスが赤いのを拾うとは思わなかった。リアスの女王からの報告では、既に覚醒までしていたそうじゃないか。それも、堕天使三人を一撃で塵にするというのは些か……早いというか、使い方に慣れすぎやしないか？ ……いや、神を滅ぼせると言われ、その神を滅ぼしたのはあの龍だ。しかし、悪魔にとっても神滅具など初めてだな」

悪魔にとって重要な事態。

あの龍へ嫌悪を抱く悪魔——生物は多い。そして、今までの宿主は散々に破壊をもたらしながら死ぬ始末だ。もはや、死ぬまで待つしかないほどに。

島を一つ容易に消すと言われているのだから、一介の悪魔になど手に負える筈もな

く、グレモリー家には様々な声が届いていた。

「——最近、寝れていないのでしょうか？」

「いや……まあ、そうだな。ああ、あまりな。リアスから赤龍帝を取り上げようとする輩も多い。今では家にくる連絡や訪問者は二つだよ」

「……コキュートスなどの処刑、または自身の眷属へトレードしろ、というものですか」
どこから噂を嗅ぎつけたのか、ここ数日でグレモリーに訪ねてくる者は二桁を越えていた。

憎悪や単純な危険視、または、その力の魅力に多くの上級悪魔が足を運んでくる。

神滅具の所有者を眷属にすることが出来れば箔がつく。そして、いまだ見たこともない力とは言え、確実に育てれば神を殺せるほどに成れるという神滅具の伝説。

多くの悪魔は、その伝承から夢を見て、妄想し、それを叶えるべくグレモリーの門を叩くのだ。

そもそもの話、悪魔は基本的に神に勝つことが出来ない。それは相性の問題でもあるが、存在自体が格上だからである。

その中でも最高神を殺し、魔王を消した力はあまりに魅力的であった。実際問題、眷属などに出来た例など過去何百年とあれど一度もない。それが成人にすらなっていない悪魔が眷属にしたのであるから反響も大きい。

まだ完全体ではないとはいえ、RPGのラスボスを仲間にするようなものである。それも鬼設定だ。

それを手に入れた悪魔に対して、妬み、または手に入れようと画策するのは道理とも言えた。

しかも今までと違い、悪魔。

つまりは何千年と時間がある。

どれだけの財産になるというのだ。

「私やアジユカの所でどうにか抑えています、上は赤龍帝をコキユートスへ墮したがついていましたね」

「——だろうな。そうすれば赤白のあの悪夢が二度と起きない」

彼は深いため息をつく。

赤龍帝と白龍皇の戦はいままでにも何度か行われていた。

そして、彼らはそのたびに戦争規模の破壊を撒き散らす。

迷惑では簡単に片すことはできない。

「……二匹とも覇龍になられたときなど手に負えん。覇龍になった赤龍帝など魔王クラスだと言うのにそこから何百と倍化する。わかるか？ 何百だ。魔王がその倍化分だけ増えるようなもの。……信じたくもない。そして白龍皇はその化け物からどんどん

力を奪っていく……その分また倍化し、さらに半減し、とにかく二匹は死ぬまで力を上げていく」

「……ええ、その通りだ」

単純に言えば、最初は数キロ程度の範囲であった魔力弾さえ、数分後にはその何十倍を滅ぼせるものになっている。

そして、三十回も倍化されれば倍加は億に達してしまう。

しかも、その三十回など禁手、または覇龍になった赤龍帝は容易に行うのだ。白龍皇でもそう。一度でも触れられれば倒れるまで力を吸い上げられる可能性がある。

単純な力に関して、彼らに対抗出来るのは対になり得る彼ら自身。そして——ムゲンたちのみである。

ここまですべてを見ても神滅具の規格外さがわかるというものだ。

しかし、その化け物を前にしても軍を動かすことなど出来ない。あの戦で悪魔は種の存続すら危ぶまれている。

再び、そこへ投入することなど出来ないし、完全に止められる算段があるほどの兵量など用意出来ない。

互いが死ぬまで見守るほかなかった。

「後はだな、ああそうだ。これが一番ひどい中傷だな」

「何でしょうか」

「——赤龍帝を手に入れたからな、上に圧力でもかけるのではないか？ などというものだよ。お前が魔王。グレモリーでなく、ルシファーと言えども、周りはやはりグレモリー出の魔王としか見ない。そこへ神滅具だ。必要以上にグレモリーが力を持っていると思われるも仕方がない。……あまり言いたいことじゃないが、あのリアスの女王だつて墮天使のトップに入るバラキエルの娘だ。それを知っている者は、まるであの戦争の敵ばかりを集めていると言うバカもいたよ」

「……それはそれは。いわれなき中傷ですね……。だが、何も知らなければ思わないこともない、か」

リアスの眷属には他に、聖剣側にいた木場祐人や、SS級はぐれ悪魔の妹である搭城小猫。

そして新たに眷属となったのは元シスターであるアーシア・アルジェントだ。

悪魔は上に眷属となった者を何らかの形で提出し、報告しなければならぬ。

赤龍帝は除いて、他の眷属が単体ずつであれば特に問題などなかった。

しかし、リアスの眷属というのは敵対勢力関係だった者、また裏切りの身内など、簡単なプロフィールのみであったならば明らかに不審なものである。

なぜ、わざわざそのような者達を？ と思うものもある。

しかし、それでもいまだ下級だからと目を付けられてはいなかった。が、赤龍帝が来たことで余計な部分までもが目立つように見えてしまい始めたのである。

「……とにかく、ここは抑えて我慢するしかない。だからフェニックス家にも申し訳ないがこうするほかなかった」

悪魔の婚約は大切である。

しかし、それに構っていられるほど悠長でもなかった。

今はなりを潜め、話題になることを避けたい。

二人は疲れたかのように息を吐くと、手元に置いてあつた紅茶を啜った。

それは既に、温い。

「——お茶、替えましょう」

銀髪のメイドがそう言う。

彼女は台車にある紅茶用具一式から手際よく、新しいカップへと紅茶を注いだ。

コポコポと耳あたりのよい音が暗くなった室内をいくらか柔らかくした。

そして注ぎ終えたそれらをテーブルの上へと音なく置いた。

「どうぞで」

「ありがとう、グレイファイア」

「ああ、ありがとう」

二人は軽く礼を言った。

それに対し、グレイフィアと呼ばれたメイドは特に表情を崩すこともなくお辞儀をし、再び元の位置に戻った。

しかし、彼女の手元に突如、魔法陣が浮かび上がり、彼女はそこに記された悪魔文字らしきものを読み取ると、こう言った。

「サーゼクス様」

「なんだい？」

「——リアス様からの呼び出しがありました。ライザー様がリアス様の元へ訪れたそうです。……少しお暇を下さい」

彼女はサーゼクスを見ながら、神妙な顔でそう言った。

サーゼクスは迷うことなくそれに頷き、

「……すまないがフォローをしてやってほしい。ついでに赤龍帝君の様子も見てきてくれないかい？」

サーゼクスがそう言うのとグレイフィアは、再びお辞儀をし、顔を上げた。

そして、瞳に入れる力を強くしてこう言った。

「——では、行ってまいります」

その言葉と同時に、室内に転移用魔法陣が光り彼女は姿を消した。



放課後の旧校舎の一室。

小声が狭い範囲内で飛び交う。

その声の通い合う位置には紅と黒の髪がある。

「——リアス、大丈夫？」

「ええ、お父様やお兄様が防波堤になってくれていいるからなんとか。……でも、どうやって知ったのか私の所へ魔法陣を飛ばす人もいるわ」

部内の隅で朱乃とリアスが声を潜めて会話をしていた。

だが、どこかリアスの顔には疲れが見える。

「……あの子は何も知らない。だから、心配をかけたくないの。……イツセーはさ、どこか不思議な雰囲気があったり、なんか全てに慣れていたり、時々ひどく遠くを見るような目をする、なんか傷つくのどこか慣れていそうで……」

「それはみんな、どこかで思っているでしょう。……いつか私が早めに部屋に着いたとき、彼が寝ていることがありましたが、すごい汗をかいて——あなたの名前を呼んでい

ましたわ……。リアス、あの子に何かそうなるようなこと、しましたの？」

「してない……はずなんだけどな。ただね、私もあの子に会ってからさ、変な夢を見るのよ。特にふざけて彼に触れることが多かった日なんかに」

リアスは俯きながら言った。どこか思い出されそうになる臃げな何か。

なぜか、久しい。

このような会話がなされている間、他の眷属はそれぞれにくつろぎ、談笑したり、お菓子を食べたり、本を読んだり。

そんな中、窓の外を眺める一誠の顔がリアスの視界に入った。

「……あの目。私たちを見ているようで、その奥の誰かを探すみたいな瞳。私ね、あまり彼のあの目は得意じゃなくて。なんか悲しくなるのよね」

「……彼の教科を担当する教員たちから彼に関する記憶を少し覗かせてもらいましたが、どうにも……。彼らの見た記憶の映像ではあんな目をする事はなかったのですが……」

「……ドライグもよね。会話の節々から分かる。イツセーに対する固執だとか執着がとでも龍くさくない。——どこか、縋るほどに彼を離したくない、そんな風にも見えるわ」

二人は部員たちに表情を見せないように後ろを向いて会話をしている。彼女たちは今の顔を極力見せたくはなかった。

そして焦っている。

「——とにかくフェニックス家に関することは、お父様が破断に持ち込んだって言うていたから。……だから、ゆつくり彼を知るしかないわよね。私は絶対に彼を離す気なんてないんだから。——例え悪魔政府がなんと言おうとも」

リアスがそれだけを言うとうと、朱乃も頷き、身を翻す。

しかし、その振り向いた鼻先には熱を感じた。

そして、視界が赤色に覆われる。

——炎だ。

「——この紋様、フェニックスか」

誰かがそう呟いた。

しかし、その声は部屋に轟く業火によりかき消される。

炎の中央、火の翼をはためかした長身の男が立っていた。

リアスは、目を見開きながら彼の名を呼んだ。

「ラ、ライザー……」

派手な装いをし、金色の髪をかきあげたライザーは、周囲を一瞥したのち、右手を横に振るった。

それにより、地に生えていた炎が一瞬にして消滅する。

炎の翼を仕舞い、彼は堂々と言った。

「——ふう、ここに来たのは久方振りだ。なあ、リアス」

ライザーはあくまでも焦りの表情は見せない。優位に立たなければならぬ。

彼は服を少し直し、移動するとリアスの対面にあるソファに腰をかけた。

そして足を組む。

「……連絡くらいは欲しかったわね」

リアスは多少バツの悪い顔でそう言う。口調もグレモリー仕様になっており、確かな威厳を保っていた。

ライザーは、首を大げさに振り、手を広げて言う。

「おやおや、仮にも婚約した仲だろう？　そう邪険にするなよ。恋人同士なら無断で彼女の家を訪ねるなんて、ままあることじゃないか」

「——婚約させられたのであって、書面以外の関係で言えば友人よりも下よ」

ライザーが仰々しく言うが、リアスはそう斬り捨てた。

しかし、ライザーは表情を変えない。彼は脇下をびつしよりと濡らしながらも年上の余裕を見せながら言った。

最低でもこじ付けなければならぬ事がある。

「だとしてもだよ、リアス。我々はまだ快諾していないんだ。だから正式には婚約者。

まだ他人と呼ぶには些か早い。——どうにも正当な理由を聞かない限りは我々も下がない。これは二人が愛しているから付き合おう、などという子供の遊びじゃあないんだ。フェニックス家にとっては重大な話なんだ。グレモリーにとつてもフェニックスの涙や不死の能力を手に入れる大切な案件だったはずだ。お互いに損はない」

ライザーは言葉をゆっくりと紡ぐ。論すかのように優しく言った。それは子供に聞かせるような口調でもあり、宥めるようでもある。

リアスのわがままで破談にされた可能性も拭えないライザーは、刺激しないようにそう言った。

しかし、それはライザーの見当違いであり、まったく違う理由で破談なったりアスからすれば少し舐められているようにも感じる。

「わかっているわ。ただ、その利益云々に関して言えば当主たちの判断どころのはずよ。言ってしまうえば私たちは面識もあまりない同士で、利益のみで結婚させられそうになつたのだから。当主がその利益を破棄するのであれば従う理由なんてどこにもないわ。少なくとも私は破談するよう言い渡された。これはグレモリー家、当主様からの命令です」

リアス自身、ライザーとの婚約に乗り気ではなかったとはいえ、謝罪の念も感じている。

なにせ突然の破断なのだから。

ただライザーの様子は以前になく不気味で、どこか策略の匂いを感じさせた。

そんなライザーは席から立つと、リアスの横へと移動した。そして――、

「きゃあ！ 髪勝手に触らないでよー！」

「今はまだ婚約者なんだから髪くらい良いじゃないか」

ライザーはそう言いながら、リアスの髪を撫でている。

指を絡め、髪質を確かめるように。

しかし、それは身内や心を許した者のみに対して行っても良いものである。女子からすれば、好きでもない男に大切な髪を触られるのは鳥肌が立つ。無条件に気持ち悪く感じるほどに。

「――ほら、リアス」

「い、いやー！」

ライザーは顔をリアスへと近づけ、耳に息をかける。彼は冥界ではかなりモテる方だ。

その過信とも言えない実績から、繰り出されるそれらは尽くリアスの不快感を刺激した。

ただライザーからすれば怒らせて、レーティングゲームに持ち込もうと密かに必死で

あつた。

これにはさすがの祐人や小猫も戦闘の構えをとる。これ以上なにかをするのであれば対処せねばならない。

しかし、相手は上級悪魔。会社で言えば部署違いとはいえ、平社員が部長に斬りかかるようなもの。

こんなデリケートな時期に余計なことをすれば、どんどん事態はややくしくなっていく。

「——ライザー」

しかし、瞬間、そこ冷える声音がライザーの名を呼んだ。

彼の真後ろにはいつの間にか一誠が立っている。顔色は髪に隠れてよく見えなかった。

「——その手をさ、離してくれよ。また泣かせる気か？」

ただそれには慈悲がある。

ライザーの身すらも案じているような声色。

知り合いにかけるもののように。

「——悪い、これは譲れないんだ」

ライザーは一誠の言葉に飲まれていた。

どこか、寂しげな彼の言には優しさがある。

リアスは思っていた。

彼は——誰、なんだろう。

顔も声も全てが一誠であるというのに、彼は別の人に見えてしまう。

口調にもどこか違和感を感じる。

そして、重なり合うようなその声はどこまでも胸を打った。

夢さが籠もる。

壊れそうな一誠。

割れていそうな心。

「おい、リアス。こいつはお前の新しい眷属か？」

ライザーが動揺を隠しながら言う。

既にその手はリアスから離れていた。

ライザーは、押されていた空気を跳ね返すように一誠を見やる。

「——まあ、いい。答えなくとも眷属しかここにはいないのは分かる。おい、お前、何を

持ってやがる」

ライザーは一誠を指差すとそう言った。

一誠の胸は淡く光を発し、まるで呼応しているかのようで。明らかに何かの力を感じ

る。

そして、その光とともに視線を向けられているライザーは訝しげに一誠を睨みつけた。

「——リアス、まさかとは思うが、あの噂本当なのか？ デタラメだと聞いていたが」

彼は今度はリアスを睨みつけた。

ライザーは以前に耳にしたことがある。

ウエルシユドラゴンを悪魔にしたという噂をだ。

しかし、信憑性もなく、さらに言えば眷属に出来るのかどうかすらも怪しい。

神や魔王を殺したようなものを宿す人間を、下僕にするには相当な力量が必要だから

とバカにしていた噂だ。

少なくとも変異の駒なしでは話にならないと。

そしてリアスは変異の駒を既に使っている。

「……上に問い合わせた時は、そんな事実などないと言われたのだがな。その顔を見れば——嫌でもわかるというものだ」

リアスは無一文に口を結んでいるが、その様相こそが雄弁に事実を語っていた。

それから悟ったライザーは自嘲気味に笑う。

「悪魔にとつての最重要事項か、なるほど。そりゃそうなるな。悪魔が絶滅するのでは

と言われるほどになった原因、そして世界に何億といる中でも13種しかない神滅具。下位貴族にはそう簡単に教えられないわけだ」

ライザーはどこか納得したような顔をし、彼は息を吐いた。

その様子にリアスや朱乃は、多少安心したように顔を緩ませたが、それはすぐに直すことになる。

ライザーはリアスに指を向け、こう言った。

「どうやってこんなのを眷属に出来たかまでは聞かないでやる。どうせ魔王絡みで何かをしたのだろうか？　しかしな、ここまで揃った演目を容易く下げる気はフェニックス家がない！　こちらにも未来がある。こんな爆弾のような奴よりも不死鳥のほうが無価値があると証明してやろう。そうでしょ、魔王様の女王」

ライザーがリアスから部屋の隅に目を向けた。

他の皆もそこへ目を向ける。

そこにはグレモリー家の紋様が光りだし、皆の視界を紅で埋めた。

そして、そこには銀髪のメイド、グレイフィアが姿を現す。

「——さて？　どうなさるおつもりですか？　ライザー様」

「グレイフィア！」

グレイフィアは、どこか惚けたようにそう言った。しかし、顔は無表情である。

リアスは彼女の登場に待ちわびたと言わんばかりの声をあげた。
グレイファイアにライザーは言う。

「そのままです。赤龍帝よりも私のほうが価値があるということを証明します。——
レーティングゲームで」

ライザーは、はつきりとそう言った。それに対してリアスは顔を強ばらせ、グレイ
ファイアですら眉が一瞬上下した。

他の眷属の皆も焦燥の表情を浮かべている。

「……しかし、申し上げたはずですが。今回に関しては破談にしていたいただきたいと」
「こちらは納得していいない。ですから秘密裏に行く。周りにゲームを見られるのが嫌だ
から、そうなる前に破談したのでしよう？ だから両家のみによるレーティングゲーム
をして決しましょう。こちらが負ければ破談、前から消えましょう。しかし、こちらが
勝利すれば婚約だ。実際問題、まだ覚醒したてのひよこのようなものでしょう？ 警戒
し過ぎですよ。——言っちゃ悪いがゲームすら参加したことのないリアスに仕える赤
い龍など、言うに及ばない」

ライザーが指を弾くと、彼の後ろに炎が駆ける。

その炎が消えると、そこには十人を超える少女たちが現れた。

宣戦布告。

その言葉にリアスは齒ぎしりをする。

そして、眷属の皆も手を強く握った。

しかし、これこそライザーの策でもある。

赤い龍がいたことなど想定外ではあるが、それを利用すればいい。

彼女が、怒りに感情を任せてくれれば御の字である。

しかし、その挑発に声をあげたのはリアスではなかった。

『いいじゃないか、火の鳥に、この俺の力を示せばいい。さあ、楽しくなるぞ、グレモリー。災厄を抱えた貴様の度量を誇示しろ。誇れ、この赤龍帝が目覚める。——どうする、我らの飼い主、リアス・グレモリー』

龍の重圧が、室内にいる全ての生命体にのし掛かる。

楽しそうにくつくつと笑うそれは、恐ろしさを孕んでいた。

さあ、見せてみる。

俺を、この心臓の持ち主を眷属に仕えさせるだけのタマかを示してみせろと。

ドライグは、そう口にした。

ライザーは、その声音に一瞬たじろぐが、すぐに表情を変え、こいつのせいだと言わんばかりに憎々しげに一誠を睨んだ。

リアスは、一誠の顔をちらりと見やる。

先ほどの違和感はなく、その雰囲気はいつもの彼である。それでも、胸がざわつく。

しかし、彼の目を見れば、後退などあり得ない。

ただ、進むのだ。

悪魔になって一日、勇敢にも一人の少女を救い、聖獣の願いを叶えた彼を貶されて口を閉じることが出来なかった。

「……いいわ。そこまで言うなら見せてやるわよ。その代わり約束して。フェニックス家がこのゲームの映像を所持することを認めない。他言することを認めない、そして、何が”起こってもゲームの勝ち負け以外では口を出さないこと。どう?」

「少し、お待ち下さ——」

『邪魔するな、女。俺の楽しみをとるなよ。——暴れられるのだから』

グレイフィアは、止めようとするが、赤龍帝に遮られる。

ライザーは口を笑みに変えながら、しかし、赤龍帝に畏怖を感じながらも口にする。

「——決まりだな。これは約束じゃない。ひとつの契約だ。悪魔が破ってくれるなよ、リアス?」

もはや、裏は取れた。そして、賽は投げられたのである。

リアスは、ただそのようなライザーを前に怯むことなく言った。

「私の眷属、兵士をバカにしたことを後悔させてやるわ」



暗なりを深めた夜の時間帯。

いまだに旧校舎には明かりが灯っていた。

「——ゲームは明後日。夜中の零時開始。いい？　これが私たちの最初の試合となります。向こうは既に何度かゲームを経験しているわ。それでも適わないとか、そういうことは考えちゃダメよ」

ライザー及び、その眷属が去った後、部室に残るグレモリー眷属はリアスによる早急ミーティングを行っていた。

明日、一日を開けて行われる試合は、フェニックス家とグレモリー家による、他族無介入で始められる。

魔王サーゼクス、そして両家による厳重な管理の下、ゲームエリアはここ、駒王学園のレプリカと決定した。

グレイフィアがグレモリー家に戻り、それから約四時間後、この試合が言い渡された。フェニックス家は、もとよりレーティングゲームで片を付けるものと考えていただけ

に用意はよく、グレモリー家はリアスとライザーによる契約のおかげで交渉の余地もなく承ることとなった。

「まず向こうはイツセーを潰しにくるでしょう。こちらと違い、フェニックス眷属は駒の限り、下僕がいます。しかし、神器持ちはいなく、基本的に元の能力が抜けて高いのは女王のユーベルーナのみ。つまりは数は多いけれど、うちが劣るほどに強い者はいません。基本的にはライザー一強と云っていい。最初に話を戻すけれど、イツセーには祐人と小猫、あなたたちがついていって」

リアスは作戦を伝える。

ユーベルーナは空中からの爆撃魔法が危険であるため、あまり見渡しの良いところへはいかないことが重要である。

そのほか、フェニックス眷属は肉弾戦の者が多く、投擲をするような悪魔はいない。

リアスは元婚約者という枷を最大限に生かし、知り得る情報を伝える。

「墮天使たちと戦ったことを思い出しなさい。あの時、私たちのコンピネーションは最高だったわ。——けれど今度はゲーム。向こうが固まっているわけではないし、ライザーはフェニックス。相当な一撃を与えない限りは死なないわ。三人以上は残った状態でライザーを迎えうつのがおそらく限度でしょう。イツセー」

「はい」

リアスは一誠を呼ぶ。

彼は返事をし、真つ直ぐにリアスを見た。

既に言うことはわかっている。

「序盤は構わない。どんどん、あの砲撃を撃ちなさい。けれど後半からはライザーと対面するまでひたすらBoostするの。ドライグみたいに話せるものが神器にいるのだからタイミングを教えて貰いなさい。……まあ、私なんかに言われるまでもないだろうけどさ」

リアスは後半、顔を少し逸らしながらそう言った。

リアスは、まるで指揮官の役目をドライグにとられたかのような表情をする。

それが拗ねているようで一誠は、おかしく感じ、笑ってしまふ。

「な、なに笑ってるのよ？ いい？ あなたは赤龍帝なんだから。本来のドライグの力は神より魔王よりも強い。あんな火の鳥なんか思いつきしぶつ飛ばしちやえばいいのよ。ねえ、ドライグ？」

『——その通り。本当のフェニックスとは死ぬば死ぬほどに強くなるものさ。しかし、死ぬ怖さをただ知らない男に負けるなど、名が霞むというもの。ドラゴンがどれだけの塊かをまざまざと見せつけてやればいいのさ』

リアスは友人に話しかけるかのように軽い声音で言った。

それに対し、ドライブもどこか愉悅に浸ったように話す。

そのような会話を出来る二人は思いのほか、相性はいいのかもしれない。

リアスは視線を皆へと戻す。

「——今回に限っては出し惜しみなんか一切しないわ。全員が本気でぶつかっていく。だからね、」

リアスはそこで言葉を切り、眷属を見渡す。

そして、先ほどよりも各段に真剣な表情になったのち、腰を曲げた。

腰ほどまで伸びる長い髪が地に着いてしまう。彼女はそれを気にするそぶりすら見せない。

眷属の皆がその行動に啞然とする中、彼女はやがて頭を上げ、こう言った。

「——巻き込んでごめんなさい。みんなには悪いことをしてしまっただけと思う。ゲーム経験すらもないのに、こんな啖呵を切ってしまった……。ただ、ゲームで勝つのがおそろく一番後腐れもなく、面倒にならないと思っただけ……。けれど、イツセーやアーシアが加わったことで少し舞い上がっていたのかもしれない。フェニックスだと分かっているながら喧嘩を売ったのだから……。ライザーは私を一族のために利用するようなことしか考えていないように思えた。わがままって言われたら文句も言えないよ……。けれど、私の一族が成り上がるためだけに利用されるようでひどく嫌だった。そして、そ

のための道具のように思われるのも嫌だった。……まだ、高校生で、眷属だって揃っていない。それなのに、いきなりロクに知りもしない人と結婚しろって——頭では分かっているけど、従えなかったの。……けれど、そのためにみんなを利用してしまふ私は……どうなんだろうって。どちらも嫌で、けれど、フェニックスはレーティングゲーム以外では納得なんてしない。最初からそれが狙いのはずだから。……だから、戦う前に謝罪をさせて」

リアスは強く目を瞑り、そのように話した。

いまだ、実践経験も殆どない彼らを前にして、そう言う。

王の失態だと、言ったのだ。

実際には、破談となった決め手は一誠の加入によるものであるが、それを決めたのもリアス、彼女自身だ。

しかし、サーゼクスも眷属化には違う意見を述べたにしろ、反対はしていない。

リアスからすれば、もとよりレーティングゲームになりそうであった状況が、結果的に結局、レーティングゲームとなっただけなのだから。

「——ばかね、リアスは」

黒い髪色が宙を舞う。そして、紅の髪とそれが重なり合った。

確かな体温を伝え、抱きしめる。包み込んだ。

朱乃が、リアスを受け止めた。

優しく、彼女は言う。

「言つたでしょう？ あなたは歩く道は私が均します。今回は均しきれなかったけれど、あなたは戦うことを選んだの。だから、私たちはその後ろについて行く。まったく……王のくせに、すぐ自分を責めるのはやめなさい。誰だつて17歳の女の子が、好きでもない人と結婚だなんて嫌に決まつてるでしょ？ 貴族とか、そうじゃないじゃない

い。生まれはみんな選べないけれど、好きな人まで選べないなんてきつとダメ。みんなの不幸をリアスが受け止め、下僕でなく、家族と言つてくれたのだから。今度はあなたの不幸を、その未来を私たち眷属が受けます。——今までの感謝と、恩。後はそうですね……純粹に好きだから、あなたが」

ただ、王だからとかではなく、好きな友達のために、やれることをやりたい。見つめ直そう。

悪魔とか、天使とか、墮天使とか。貴族などの鎖を取り外して、ありのまま、彼女を見てみる。

親友のためにやれることは、なんだろうか。今、とても彼女は輝いている。

高校では、多くの人に慕われ、みんなに愛され、それでいて、気を抜けばだらしのな

い部分が見え隠れする。

そんな彼女が結婚をすれば、好きでもない人と悪魔のためにと子作りをすれば、きっと、この高校からも、幸せからも、遠ざかってしまうのだろう。

嫌だった。

そんな未来は——彼女より、親友の私が認めたくはない。

悪魔であろうとも、心まで合理的な悪魔に捧げたつもりなどない。人としての、確かな情を持っている。

彼女の傍にいたのだ。

孤独になつてから、それからすくい上げられてから、ずっと、傍に。

食べ物にも困り、家なしの生活を続けてきた。泣きそうで、叫びそうで、母を求めていた頃、手を引つ張つてくれた。

『——大丈夫？ ほら、一緒に行きましょう。そして、話をしようよ』
彼女は本当に頼もしかった。

とても優しかったのだ。

そんな笑顔を向けられたのはいつ以来のことだろうか。

リアスが泣くのであれば、代わりになどいくらだつてなれる。

この優しさを、この瞳を。

そして、彼女、リアス・グレモリーを見ない男に渡すことは出来なかった。

誰だつて幸せになつてほしいのだ。世界で一番の友人には、笑つたままでいてほしい。

人間界に、共にいて。

彼女は人に憧れていた。

あのような、普通の女の子に一度でいいからなつてみたい。

だから、遊びでそれらしい話をたくさんした。

結婚したら、仲人は私ね、なんてよく言つたものだ。

いつか、彼氏が出来たらダブルデートをしようか。

人は、なんて自由なのだろう。

何故——悪魔な私は好きでもない人と結婚なのだろうか。

そんなことは叶わないと話の終わりには苦笑いをする彼女が印象的だった。

だが、未来を変える術がある。

勝つことで、それが開けるのなら、必ず。

そうさせてあげたいのが、友達なんだろう。

「——朱乃……」

「今のいままで我が儘らしいことを言つたことないのだから、言いなさい。私たちにど

うして欲しい？」

朱乃はそう聞いた。

微笑んでいる。

祐人や小猫、そしてアーシアも笑っていた。

何をバカなことを言っているんだこの王様は。

眷属は使うものだろう。

それなのに、どうしてそんな顔をする。傷などつかない。体にいくらつこうとも、心についた傷を癒やしてくれたのはあなただと。

心さえ確かならば、戦える。

——負ける気がしない。

しっかりとした紅の糸で結ばれている仲間は、途中でその糸を途切れさせない。

彼女が呼ぶのならば、駆けつけよう。

世界で一番誇れる王、そしてバカだと言えてしまう王。

このような形は、本来ならば王として機能していかないのかもしれない。

それでも、彼女のもとには彼女のために命を懸けられる者たちが確かにいるのだ。

自分の——自分たちのこの確かな王が、愚王が助けを呼ぶならばいつだって行こうじゃないか。

この幸せな日々には亀裂など入れさせられることを許さない。
もしかしたら、一番に婚約をさせたくないのは、

——眷属、なのかもしれない。

「どうなの？ リアス」

「部長、言ってくれないと動けませんよ」

「……そうです、命令してください」

「私も必ず助けます。治して見せますから」

朱乃が、祐人が、小猫が、アーシアが彼女を見ていた。

そんな中、一誠がリアスの前に入る。そして、右手で彼女の手を優しく握った。

どこか、普段よりも積極的な彼。

その瞳は、誰を見ているのか。

誰の、夢を見ていたのか。

「イツセー……」

「——部長、前に最強の兵士って言ってくれましたよね」

力強く、彼はそう言った。

どこまでも意志の強い彼に、リアスは見入ってしまう。

——最強の兵士になりなさい。

言葉がどこかで響いた。

それはいつのことだったか。

遙かに遠い心の残像。

けれど、確かにあつたのだと思う。

無くしきれていないのなら、何度だって拾う。

「だから、部長。俺、最強の兵士だって証明してみせます。部長のためなら神様だってぶったおしてみせます。だから——きつと、勝てますよ、試合」

リフレイン。

繰り返し、繰り返しの白昼夢。

誰かを運ぶ言葉。

ただ、再度姫を救う。

「眷属は主の言うことは絶対でしょ？ だから部長、命令を」

皆が見守る中、リアスは泣きそうになりながらも今更ながら王であろうとした。

涙は簡単には見せない。

必死で堪える。

優しさが、ずるかった。

だから、彼女は嗚咽などより、命令を口にするのだ。

そして、初めてのお願いを。

「——共に私と不死鳥を倒して」

謝りの言葉などいらぬ。

謝罪を聞きたいわけではないのだ。

言えばいいだけ、従うのだから。

ただ、王である彼女が、言うのなら喜んで付き合おう。

家族が求めるならば、仕方ない。

仕方がないのさ。

『はい、部長！』

誰もが、そう思っている。



人を好きになったことは、何度あったのだろうか。

想いを巡らせ、手を握り、目を見て感じる。

それが、恋なのだと思じた数は果たして何回だったのだろうか。

一誠は、一度だけ人を好きになったことがある。いや、当時抱いていた感情を今にし

て思い返せば——と言った話なのだが。

茶髪の彼女は、今、どこにいるのだろうか。

元気でやっているのだろうか。

ふと、思ってしまった。

好きな人がいる。

守りたいと、初めて思ってしまった。

ドラマなどでよく見る、君を守るよ、という言葉の意味はなんだろう。

現代において、物理的に人を守るなどおそろくはないと思っていたのだ。だが、

悪魔になり、その機会がめぐる。

“再び” 彼女を守らなければならない。そして、それは果たせるだろうか。

時々、頭を駆ける言葉を思い返せば不思議に思うことが増えた。

“再び” とは、なんだろう。

過去に誰かを守ったことなどないのに、浮かび、そして当たり前のように受け止めている。

この想いは俺のもの？

いや、“俺” で間違いない。

どこかの自分が想うのなら、確かに俺のものだ。

けれど、この想いを抱く——ドライブと出会い、リアスと出逢う前の自分の想いは誰のものなのだろう。

「……ああくそ。自分で自分が何考えてんのかぜんっぜんわからねえ」

今恋をしているとして、一誠が好きであった少女に出逢った時、なんて想うのだろうか。

その子に彼氏がいたら、心は痛むのか。

想像してみれば、僅かに心臓が跳ねる。

いろいろな自分を抱え、その自分にはそれぞれの心があつて、わけがわからなくなる。しかし、彼女を想えば心臓が鼓動し、誰かと重なるかのように、消えていく。

そして、自分であつて、違うかのような行動をしてしまう。

「……これさ、やっぱり病気じゃないのか。多重人格かよ」

『——まさか、俺だったら、そんな事簡単に気づけるがそんなことはない。ただな』

「ただ？」

『お前の心に、強烈な残留思念が乗つかつているのさ。——おそらく、歴代赤龍帝のなただお前の心臓が喰つてしまうから俺でもよく見えないが、誰かがいる。見たことのないレベルだ』

それこそが見せているのだろうか、あの夢を。

何故、自分がいて、リアスがいて——知っただいそんな顔ぶれが皆、倒れているのだからか。

それを一誠は知らない。

心臓に喰われてゆく夢を、臆気にしか思い出すことは出来なかつた。

『——何かあつたら俺がどんな深層意識だろうともお前を啜えて、引きずり出してやるさ、なあ相棒』

「なんだよ」

『——強くなれよ、相棒。好きな女を守ってみせろ』



貴族風な装飾の凝らされた部屋の中。三人の悪魔が対面していた。

「ライザー」

「……はい、父上」

ライザーが名を呼ばれ、それに対して神妙に返事をする。

あれからフェニックス家に戻り、レーティングゲームの支度、手続きもろもろを済ませたライザーと妹のレイヴェルは、父の自室へと足を運んでいた。

「……噂が本当だとは思わなかったよ。だが、それこそ赤い龍を完膚なきまでに打ち倒せば、公表できなくとも後々には役に立つ。いや、不死のほうが大偉大だとグレモリーに見せつけてやればいい」

父は尊大にそう口にした。

フェニックスは死なない。

死ぬことがない。

火の実体化のような彼らは、肉体を破壊されようと消えることがない。

残るは精神。

魂の限度のみである。

故に、フェニックスに敵などいない。

負けようがないのだ。

しかし、フェニックスは無敵ではない。

であるからこそ、この選択をするのだろう。

「——これを出すのは私の代では初めてだな……」

そう呟きながら、彼は、部屋の隅に閉じられたら金庫のようなものに手をかけた。

現当主の部屋に納められたそれは何重にもフェニックス家特有の魔法がかけられて

おり、多少時間を要した。

その間、レイヴェルは不安そうな瞳でライザーを見上げた。

「……お兄様」

「——大丈夫だ、レイヴェル。相手はなりたてとはいえ、赤龍帝だ。使うかもわからないが、ないよりはいい。……ここまできて易々と負けられるものか」

どこかガチャリといった音が室内に響き、父がその中へ手を伸ばす。

そして、そこから取り出したのが、

「……それが、フェニックスの遺灰」

父が握るそれは、体に身に付ける装飾された首輪のようなもの。

その中央に嵌められた宝玉のようなものの中には、灰色の何かがある。

そこには、中で蠢くように灰が旋回していた。時折、瞳のようなものが浮かび上がっ

ては、消え、羽のようなものが出来ては消えていく。

そして、鼓動をうつように、音がした。

フェニックスの遺灰。

何度だつて蘇るフェニックスそのものを込めた灰の塊。

「フェニックスは死なない。だが、精神だけはそうじゃなかった。だが、その精神さえも克服したとき、本物の不死鳥になれる——」

父はそう言った。

他族からすれば、その蠢く灰は不快にも映るのだろう。

けれど、それはフェニックス家からすれば黄金の御宝と比類する。

世界でもっとも、偉大な灰。

全ての生命の礎となる、生まれ変わりの灰だ。

「……だが、よくわきまえておけよ、ライザー。これは、あまり良いものではないぞ。麻薬みたいなものだ。この灰に宿るフェニックスに体を取られそうになったらすぐに捨てる。これは本来、戦争くらいにしか役に立たん」

「……ええ、わかっています。他者の悪魔にも視認されてしまうゲームであつたならば、使うことありませんが。グレモリー家とフェニックス家のみゲーム。——どんな手を使つても問題はないでしょう?」

ライザーはそう言い放つ。

仮にも貴族であり、現在の地位はそれなりである。

しかし、それを素通りされ、役に立つかも分からない赤龍帝の方を取られた。正確には、そうではないし、フェニックス家側がグレモリー家の事情を知らないせいもあるが、彼らはそう感じていた。

今更、下がることはない。

そして、負けることは格好すらもつかない。

父はそんなライザーを一瞥すると、窓の外を見ながら遠い目をして言った。

「……これを使うのは、古の戦争や悪魔内部の新旧同士の戦い以来だな」

その声には、どこか懐かしさがある。

戦争などは普通に考えても一日程度で終わるものではない。

故に、この灰を使い続けたフェニックスは灰に体を取られ、寿命尽きるまで戦わされる。

精神が尽きることなく、破壊された肉体は消えることなく。

——しかし、代償なしで動くことなく。

ただ、不死の力を誇示することのみに、肉体を動かすのだ。

父は、振り返るとレイヴェルを見ながら、名を呼んだ。

「——レイヴェル」

「はい、お父様」

「何かあったらこれをすぐ破壊しろ。すぐにだ」

ライザーだけでは心許ない。

中央の宝玉を破壊すれば、フェニックスの支配は終わる。

だが、それは体を取られるまえに行わなければ間に合わないだろう。

故にレイヴェルに忠告する。

何か前兆があれば、壊しても構わない。

ただ数時間のゲーム時のみ、ライザーを完全なるフェニックスへ変えてくれればそれでいいのだから。



「……どうにも予想外だね」

魔王領へと帰還したサーゼクス・ルシファアはそう呟いた。

彼に宛てられたその一室には、机や明かり、後は書類の類のものしかない。

「……申し訳ありません」

その対面には、グレイフィア・ルキフグス。彼女は丁寧な頭を下げ、謝罪をする。

その様子にサーゼクスは手を振り、そんなことはないと言った。

「まあ、レーティングゲームの可能性は元から充分にあった。こればかりは仕方がない。今となつては見守るほかないからね」

「そう言っていただけ、心が軽くなります。……が、大丈夫でしょうか」

グレイフィアは少し俯きながらそう言う。サーゼクスは怪訝な顔をしながら何がかを問うた。

それに対し、グレイファイアは、一瞬の沈黙の後、こう言った。

「……赤龍帝の少年を見てきました。彼は見た目はどこにでもいる学生、ですが……纏う雰囲気と言いましようか、どこか変なのです」

「変、とは？」

「申し訳ありません……よく分かりませんでした。とにかく、違和感が多く、赤龍帝ドライグも饒舌で、さらには亜種らしいです……、あまり過去のデータは参考にしないほうがよろしいかと」

サーゼクスは、それを聞いて逡巡する。

かの女王が分からないともなれば、ゲームの時に自身が観察するほかないと。

ゲーム時に置いては、現実空間から隔離されるため、何かが起こったとしても対処しやすい。

また、いくら暴れられたとしても問題がないため、その点においては安心できる。

ただ……、

「グレイファイア。念のためにも、ゲームエリアの強度はやれる限り高めておいて欲しい」

「——わかりました」

これくらいは用心しておいて、損はない。

サーゼクス自身、神滅具などを目にするには殆どないのだ。

故に、知り得ないものに対して、やれることはしておきたい。

「……リアスは彼を使えるのか、か」

サーゼクスはぼそりと言った。

改造した駒の具合からして、本来ならばリアスが扱える眷属の範囲内にいない。

ましてや、朱乃の報告では、ドライグの意志がどうにも一誠の力に多大に関与していると聞いた。

小耳に挟んだ墮天使との抗争の際には、まるで一誠の体を借りてドライグが話しているようなことさえ、あったという。

それが本当なのであれば、警戒もする。何を考えているのかと思う。

悪魔、いや。

ありとあらゆる種族にとって悪名高いあの龍帝は、何を企んでいるのだろうか。

今までは宿主がドライグを使ってきた。

しかし、今代に限っては、もしかしたら、ドライグが主人の体を使う事があるのではないのかと疑念を抱いてしまう。

両腕の籠手。

今までとは違う四倍の倍化。

力が増した龍帝は、そこまでのことを出来るのだろうか。

何より、情報が少ない。

過去には、このようなことはなかったのだから。

本来、ただの少年に宿ったのであれば、人間の状態で覚醒など出来ないはずなのだ。魔術師でもなく、体すら鍛えていなかった。ただ、子供が発現などすれば最悪死ぬというのに。

——今代に、何が起こっているというのか。

サーゼクスは、頭を悩め、グレイフィアの入れた紅茶を飲み干した。

そして、仕事を再開する。

しかし、彼は集中することが出来なかった。



一日を開けて行われるレーティングゲーム。それは刻一刻と迫っていた。その時計がその日の終わりを告げるその時、ゲームは幕を開ける。

「——一誠さん」

「ああ、アーシア。入ってきなよ」

自宅にて集合時間まで待機していた一誠のいる自室を叩く音がし、そこへ目をやれば

アーシアが立っていた。

彼女は、以前の漆黒の修道服ではなく、純白のものを身にまどっていた。

「……これは正式なものではないのですが、それでも気持ちは入ると思うので」

「いや、いいと思うよ。好きな服を着てこいつて言ってたしね」

アーシアは、心臓のあたりを抑えながら一誠の座っているベッドの横へと腰をかけた。

その手は僅かに震えている。

「——戦う、というのは初めてです。ですが、この音を聴くと不思議と安心するんです」
彼女は、首から下げた鈴を数回鳴らした。

それにより、シャランシャランと気持ちのよい音が室内へと響き、鼓膜を揺らした。
「きつとそれが守ってくれるさ。少なくとも心の支えにはなるね」

一誠がそう言うのとアーシアは微笑む。すると、その会話に混ざるかのように一誠の左腕が緑光を発し、籠手が発現した。

宝玉が呼応するかのようになり、点滅する。

『安心するなど当然だろう。アーシア・アルジェント。貴様の体にはな——』

「ばっ——、いやな、アーシア」

アーシアは記憶が飛んでおり、獣が彼女のために命を落としたことを知らない。

ただ、いろいろと都合よく解釈してくれていれば傷つくこともないだろうと、曖昧な話をしてきたのだ。

だが、アーシアの体には彼が溶けていった事実があり、毒との相殺よりも上回った欠片が、アーシアの中にはあるのかもしれない。

だからこそ、ドライグは、それが反応しているのだろう、と言おうとしたのだが、一誠まことにそれを遮られた。

少なくとも、アーシアにゲーム前のこの時間で余計なことは考えて欲しくはなかった。

しかし、アーシアは首を振り、こう言った。

「隠さなくていいんです。少しずつ思い出してはいたのですから。ただ、皆さんが気を遣つかってくれていたので……本当にありがとうございます。……あの、ドライグさん」

『なんだ、娘』

「——私はあの方の力を使えますか」

アーシアは、聞いた。

使えるのか、どうかを。

神に仕えし、人との架け橋となる聖なるものの力は果たして、悪魔の元人間には使えるか。

知りたかった。

ドライグは斬り捨てるように言った。

『——死ぬぞ』

「……そう、ですか」

『使えば分かるさ。ただ、奴の力——というよりも、お前への想いといったものだろうか。貴様のような貧弱な元人間風情よりは、強い御霊だからな。その想いが後押しをすれば神器にいい影響くらは与えるかもしれない。お前の神器は本来、悪魔を治すことなど出来ない代物だ。聖母は悪魔を治療しない。だがな、お前の想い次第では、その力、薬となるもの、毒となるものと別れるかもしれない。——思い出したならば分かるだろう。感情を弄られたとはいえ、お前の中にも悪意はあるのさ、間違ひなく。それを助長させれば人を呪い殺せるほどの悪意は皆、ある。ならば、その聖の心と魔の心。割り切って使ってみればいい。案外、敵と認識した者にはその神器、毒となり体を蝕んでくれるかもしれないぞ。……ククク』

ドライグは愉しげに笑う。

一誠はドライグの言葉にどこか複雑になりながらもアジアに言った。

「アジア、時間だ。行こう」

「……………あ。は、はい。すみません」

深く考え込むような彼女に、一誠は心配そうな表情を浮かべる。

一瞬迷った挙げ句、口を開く。

「……アーシアの好きにしなよ。敵を倒すことは悪くないんだ。けれど、優しさに勝たなきゃならないわけでもない。どちらを選んでも、多分状況によつては後悔するし、正解もない。けれど間違いでもないかもしれない。好きにしなよ、アーシア」

「……一誠さん」

一誠はアーシアの手を握りながら廊下に出て、階段を下りる。

既に寝静まった両親には、部活の合宿だと伝えてあつた。

なんともコテコテな言い訳だが、それは仕方がない。

あまりしたくはないが、魔力で誤魔化すことだつて出来る。

——もう、人と同じ生き方は出来ない。

「……私、悪魔になるときに、『戦えないならば、頑張らせて下さい』つて言つたの覚えていますか？」

「ああ、覚えてるよ」

「どちらを選んでも後悔する、ですか……。そうですね、『そういう世界』に私は入つたのですね。私は部長さんに約束しました。必ず治すつて。けれど、それじゃ当たり前過ぎる。治せないならば、そもそも悪魔になれていないのですから……。私は——敵を倒

して後悔し、悔やむことを選びます。これは正解ですか？」

優しさにはこの場合、二つある。

リアスのために敵を倒す優しさ。

敵一人、傷つけない優しさ。

どちらが、正しいのだろうか。

そんなのを決めるのは神でも、他人でもない。

己自身が決めろ。

一誠は、そう言ったアーシアを見て、笑った。釣られて彼女も笑う。

「——間違ってるかもね」

「なら、間違いでもいいです」

「その心意気は、このゲームにとって間違いなく、正解だ」

庭に置いてある自転車に跨がり、アーシアを荷台に乗せた。

そのまま走る。

走って走って、駒王学園に向かう。

本格的初陣を前に、始まりの時間は目の前だ。



零時迫る深夜の部室。

確かな緊迫感と緊張感を伝わせる空気の中、声が出た。

「みんな、いるかしら？」

リアスがゲーム最後の点呼をとる。それに、眷属の皆がそれぞれ声をあげた。

「朱乃、祐人、小猫、アーシア、イツセー……と。うん、確かにいるね。よし、みんな聞いて」

祐人は出していた剣の何本かを腰に仕舞い、小猫は手にグローブをはめていた。

アーシアは鈴を握りながら祈るように目を閉じていた。

朱乃は紅茶を啜っていたが、それを止めリアスの方を向いた。

全員の視線が集まるとリアスは話始めた。

「——この日が来ました。みんな、初めてのゲーム前はどんな感じかな。凄い緊張もするし、足も震えるかもしれない。けれど、そんなみんなが私は誇りです。相手はフェニックス。戦闘に関して言えば、悪魔でもトップに入る種族。それでも、私は負ける気が少しもしないの。本当に、眷属になつてくれたのがみんなで良かった。——必ず勝ちましょう」

最大の自負を持ってフェニックスに挑む。

その言葉に全員が頷いた。

時計に目をやれば、もう今日という日が消える。

後一分を切ったところで、部屋を魔法陣の光りが照らした。

グレモリー家の紋様である。

「皆さま、準備はよろしいですか？」

その問いに返すのは真剣な眼差しだけでいい。

グレイフィアは全員を一瞥した後、こう言った。

時計の針は後数秒。

「ご健闘を祈ります」



『レーティングゲーム、開始です』

午前中零時を時計の針が二本重なり、示した。

その瞬間に、グレモリー眷属の皆は部室から、レプリカの部室へと転移される。

何一つ変わり映えのない景色。

しかし、空のみ、色合いを変えていた。

深夜にして、暗闇に閉ざされた空は、オーロラのようにうねりながら不思議な色を醸し出している。

皆はそれを一瞥した後、本格的にゲームが始まったことを胸に刻んだ。そこにリアスの声が響く。

「細かいトラップは使い魔に任せます。ただし、戦いに向かう途中で掛けられるのならばかけておきなさい。やれることはその場でやっておくこと。——グレモリー眷属の初陣。あのフェニックスすらも消し飛ばして勝利に納めましょう」

堂々と言う彼女を囲むのは眷属。

全員の気持ちが一つになっていた。

リアスは皆を見渡しながら口を開く。

「——ユーベルーナは朱乃とほぼ同格よ。イツセー、その場に居合わせたなら譲渡をお願いね。朱乃、どちらの女王が上かを教えてやりなさい」

「わかりました」

「あらあら、うふふ……。血が騒ぎますわ——とても」

朱乃は唇あたりを人差し指でなぞりながら、呟いた。

その様子にアスはどこか嬉しそうに微笑む。

「向こうの女王が出てくるまでは朱乃は私と待機。アーシアもよ。祐人と小猫は表だつ

て敵を集めなさい。イツセーは少し離れた所に構えていて。敵がそれなりに集まるで時間を稼げたら、祐人が小猫を抱いて足で逃げなさい。その瞬間にイツセー——敵を丸ごとぶっ放していいわよ」

リアスが不敵に笑んだ。

その作戦に小猫は露骨に嫌そうな顔をしたが、今回限りは目をつぶるといったところだろうか。

首肯していた。

祐人が、イツセーの方を向き言う。

「兵藤君、頼むね。僕たちはうまく避けるから遠慮しないで撃つていいよ。距離があるから、もし相手も騎士だった場合は避けられるかもしれないけど、他の眷属ならそこまですぐで早くないからね」

祐人が一誠にサムズアップする。

それに対し、一誠も同様に返した。

準備は全て整っている。

これより、完全なるゲームが開催される。

「——グレモリー眷属のゲームを始めましょう」

騎士が、戦車が、兵士が窓からフィールドへと駆けていく。

主に従い、魔剣を、拳を、籠手を握りしめながら適地へ行くのだ。
フェニックス対グレモリーのレーティングゲームが始まった。



旧校舎を囲む雑木林の草木を揺らしながら、駆けていく。

そのたびに砂が舞い上がり、土が飛ばされる。

祐人と小猫は、簡単なトラップを仕掛けながら道を進んでいた。

「——ドライグ、赤龍帝の籠手を」

『B B o o s t t ! ! 』

一誠がドライグに呼びかけると、一瞬にして両腕が紅蓮に覆われる。緑光を撒き散らしながら、発現する龍の腕。そして、爪。

一誠は、その相変わらぬの緑光に思わず声をあげた。

「ドライグ！ もう少しこの光は抑えられないのか!？」

『なぜ、俺が抑えなければならぬ。示せよ、俺をさらに』

「……敵にバレるだろうか」

尊大すぎる龍帝に、一誠は辟易しつつ、うなだれる。

一誠はドライブに一度たりとも口で勝てたことはなかった。

あつたとして、それはしりとりのみである。

そんな一誠たちに、祐人が振り向きざま人差し指を口元に立てる。そして、静かに言った。

「——兵藤君、少し静かに。そして、ナイス」

祐人は、その人差し指を仕舞い、今度は親指を立てた。

小猫もどこかよくやった、といった表情をしている。

「その光のおかげで三人ほど寄ってきたよ」

雑木林の中、木の影に隠れながら祐人の指す方角に目をやる。

そうすれば、そこには辺りを見渡しながら怪訝そうな瞳で、顔を右往左往させる少女が三人いた。

「本当にこつちで光ったわけ？」

「ええ、間違いないわ」

「たく……これでトラップとかだったら承知しないわよ」

「いや、声だつてしたから」

そのような会話を交わしながら、こちらへ進んでくる少女たちに対して、祐人は呟いた。

「……おそらく彼女たちは兵士だね。このまま奇襲も容易だ。兵藤君、君はもう少し力を溜めていてくれ。——小猫ちゃん」

「……はい」

祐人はそれだけ言うと、木々から飛び出し、創つてあつた剣を投擲する。

小猫は祐人と反対側から走り出し、一人の脇下へと潜り込んだ。

「——なっ」

「遅いよ」

投擲された剣を弾くひとりの背中へと一瞬で回り込み、新たに創りあげた剣で斬りつける。

その刀身が触れた瞬間に背中から鮮血が舞う。

確かな悲鳴が木々へと木霊した。

「……急所もらいです」

その悲鳴にかき消されながらも、そう呟き、小猫は潜り込んだ脇下の位置から右腕を振るい、思い切り鳩尾を叩いた。

戦車の本気の一撃を受けた兵士のひとりには、呼吸することすら出来なく、声も出ない。

血と唾液を口から吐き出し、地に倒れ、痙攣する。

そこから止めの一撃を下し、小猫はもう一人の方へと目を向けた。

「さて、残るはひとりだね」

祐人が振り向くと、右肩から血を流した最後の兵士が突っ込んでくるのが見えた。

先ほどの投擲が命中したのだろう。

その肩を庇うようにしながらも、明確な殺意を孕んだ瞳をぎらつかせ、彼女は走る。

——だが……、

「……えい」

兵士の後ろにいる戦車のことを忘れてはならない。

頭に血が昇り、周りが見えなくなつたのは敗因のひとつである。

背中から打撃を喰らつた少女はそのまま突き飛ばされ、祐人へと向かつてくる。

まるで、小猫からパスされたかのように、ジャストな位置へと送られた。

「——終わりだね」

とつさに翼を出したとしてもその勢いを止めることは不可能だろう。

そして、リタイアを免れることも。何百キロといった速さで宙を滑る。

そして、少女の行き先には、剣が三本待ちかまえていた。

「い、いやあああああ!!——がつ……」

少女は断末魔のような声をあげ、叫んだ。しかし、進路を変えることなど出来るはずもない。終点には、突き刺さる運命しか待っていない。

腹や胸、そして足。三カ所へと深く侵入を果たした剣の先は背後から飛び出していた。

噴き出した赤黒い血が、残りをツ……と、剣先から地に落とした。
案の定、終わりである。

「……さあ、先へ急ぎましょう」

小猫は、光の粒子となって消えてゆく兵士たちを一瞥したのち、そう言った。
祐人がそれに首肯すると、一誠へ呼びかかる。

「兵藤君、行こう！」

一誠は、あの刺さり具合で本当にレーティングゲーム保護である治療が意味をなすのか、僅かに不安になったが、頭を振り切り、歩を進めた。

戦いに關して、情をもつなど侮辱である。

一誠は、頭に浮かんだそれを、どこかで聞いたことのある言葉と似ているなど思った。



『ライザー様の兵士、三名リタイア』

アナウンスがゲームエリアへと響き、それぞれの心境を揺らした。

リアスはそれを聞いて、通信を入れる。

「祐人、小猫、イツセー、よくやったわ。この調子でお願い。もし、状況が悪くなったら教えて。早いけれど、朱乃を投入します」

「あらあら、うちの子たちは優秀ですわね。もう、三人だなんて」

リアスは、それだけを言うと通信を切った。その際に、朱乃が口元に手を当て、微笑みながらそう言う。

「ええ、いいペースだわ。……けれど、これで向こうも本気になるでしょうね。朱乃、使い魔からユーベルーナはどうしてるか分かる？」

「いえ、いまだライザー様の牙城からは出ていませんわ。向こうも私が出てくるのを待っていたりして」

朱乃が使い魔を通した魔法陣を覗いてそう言った。顔は既に引き締まり、それに巫女服の姿がとてもし合っている。

指先に進らせた電流をパチパチと鳴らしながら、ライザーの陣地を睨んだ。

「……そうね、様子を探りましょうか。朱乃、試しに校庭を旋回してくれない？ ……いや、待って。私の使い魔から連絡が入ったわ。——体育館に三人ほどいるわね。おそらくセンターを取りにきたのでしようが……。よし、決めた。朱乃」

「はい、部長」

にこやかな表情へと戻っている朱乃の目を見て、リアスは先ほど一誠に言った時と同じ顔をした。

そして、告げる。

「体育館丸ごとぶっ壊してこれる？」



同時刻。

祐人と小猫は、雑木林をとうに抜け、校庭へと足を運んでいた。

一誠はリアスの作戦通り、校庭からは見えない校舎の非常階段へと身を隠し、ひたすらにBoostし続けている。

「ドライグ。今どれだけ溜まった？ これで何発撃てる」

『これだけあれば、下級悪魔ごとき十回は簡単に消せるな。おい、それよりも相棒』
「なんだよ」

『下、危ないぞ』

ドライグがそう言った瞬間、体が浮遊した。自身を囲うように魔法陣が展開されており、そこからは少しだけ火薬のような匂いがする。

「い、言うの——遅っ」

一誠は、非常階段から校舎側へと溜まっていた砲撃を撃ち出した。それにより、風圧で体は吹き飛ばされる。

その直後、一誠のいた位置から爆撃音が響いた。

砲撃の撃たれた校舎の壁は紅蓮の熱で溶けるように溶解したあと、半壊する。

非常階段は、爆撃により完全に鉄くずへとなり果てていた。

「あら、うまく生き残ったわね」

吹き飛んだ一誠の前方上、そこから嘲笑を含んだ声が聞こえる。

ドレスのような衣服を纏い、装飾を施したアクセサリーを身につけている女性がいる。た。

その女性——ユーベルナは、再び声を発した。

「——あなたが赤い龍に憑かれたおぞましい男ね。……こんなの為にフェニックス家は婚約を破談にされたのだと思うと腸が煮えくり返るわ。雷の巫女がフォローに入ったら邪魔だと思っていたけれどもうまく誘導されてくれたし。……さあ、今度こそ消えなさい」

フェニックス、ライザーは犠牲——サクリファイスという作戦を好む。

理由はおそらく、駒の数だけいる眷属の活用。

ライザーは、不死ゆえに、相手が力尽きるのを待つことがあるため、最悪自分だけが残ればいいのである。

であるから、眷属をいくら犠牲にしようとも問題がない。今回も同じ。

一人や二人じゃ弱い、三人も狙われやすい体育館の「中」にいたのであれば、釣られてくれるだろうと考えたのである。

結果は上々。

しかし、ユーベルーナの誤算。

少し雷の巫女を甘く見過ぎた。

ゲームエリア全体にアナウンスが鳴り響く。

そして、体育館の方角からは煙が立ちこめていた。

『ライザー様の兵士二名、戦車一名リタイア』

ユーベルーナはそのアナウンスに対して舌打ちをし、顔をひどく歪ませた。

「——さっさとやるしかないわね」

ユーベルーナは、そう言うのと再び魔法陣を形成し、火の爆撃を放ち始める。激しい音を鳴り響かせながら、土を抉る。

一誠はそれらを飛び退いてかわしていた。

「ほらほら、どうしたのかしら。伝説の龍ってこんなにも臆病なのねえ！」

複数、連続して爆撃を放ってくるユーベルーナに対して、一誠は彼女に狙いが定まらない。

そこへ耳に音が届いた。

『兵藤君、どうしたんだい!? 君の方角から爆撃があがっているけど——』

「悪い木場、そつちに手を貸せない」

一誠は、珍しく声をあげ、動揺しながら通信してくる祐人に歯噛みしながら答えた。

それに対して祐人は、こちらの状況を悟り、言う。

『わかった、こつちはなんとかしよう』

「任せたよ」

『そつちもね』

グレモリー眷属、男組み勢の会話はそこで途絶える。

一誠は、キツとユーベルーナの方へ視線をやり、再び爆撃を避けながらドライグに問う。

「くそ——砲撃を撃てなければやりようがない。なんか方法はないか」

『……お前は少しは頭を使え。何でも聞く癖を治せよ、相棒。知恵を絞れ。——面倒だ、足にでも譲渡すればいい。そして体制を立て直せ』

次々と放たれる爆撃により、一誠はユーベルーナに標準を合わせることが出来ないで

いた。

しかし、それにドライグは本当に面倒そうに言葉を返す。

彼からすれば、ユーベルーナはとるに足りない存在であり、なぜ苦戦しているのかさえ、わからない相手である。

しかし、いくらなんでもこの返しは適當すぎやしないだろうか。

一誠が仕方なしと、飛び退いた瞬間に足を籠手をつかみ、譲渡しようとする。

その瞬間。

——雷が一誠とユーベルーナの間に落とされた。

「あらあら、うちの可愛い一誠君と鬼ごっこだなんて羨ましいですわ。ぜひ、混ぜてくださいいな。——逃げるのはあなたですけどボムクインさん」

宙に浮かびながら雷を纏うのは黒髪、そして巫女服。一誠は彼女の名前を思わず呼んだ。

「——朱乃さん！」

「ここはお任せを、一誠君。祐人君たちのフォローをお願いしますわ」

朱乃はそれだけを告げると、恐ろしいほどに、にこやかに笑い、ユーベルーナの方へと体を向けた。

「あら、こんにちは、雷の巫女さん。あのような化物を可愛いだなんて本当にグレモリー

は趣味が悪いこと。——笑えないわ」

「あらあら。あの子の素晴らしさをあなたのような化粧品まみれのおば様に理解されなくともこちらにはよろしいですよ」

「あらそう……死になさい！」

ユーベルーナは明らかに額に血管を浮かばせながら、爆撃を放つ。

朱乃は、それをいなし雷を天より落とした。

尋常でない破壊音が鼓膜を支配する中で朱乃は、叫んだ。

「——絶対に負けるものですか！」



剣舞が栄える。

疾風をまき散らせ、火花が光る。

校庭では、騎士同士による剣闘が繰り広げられていた。

「はあああああああ！」

フェニックスの騎士の一人——カーラメインが祐人から見て右側から斬りかかる。

剣を横に振るい、そのたびに炎に染められた刀身が燃え栄える。

火の粉を吹き散らす。

「——グレモリーにここまで騎士がいたとはな」

さらに祐人の左側からは人の体程もあるであろう巨大な剣を構え、そう呟いた後一人の騎士——シーリスがいた。

シーリスはその巨大な剣を鈍器のように振り下ろし、その風圧による衝撃波を放つ。

祐人は、それに吹き飛ばされた。

「くっ……、騎士二人とまみえるだなんて光栄だけれどこれはきついね」

口元から垂れる血を制服の袖で拭い、彼は呟く。

折れた剣を再び創り出し、二本を手元に構える。

「悪いな。騎士としてこのような多数対一など好まないが、このゲームは勝たなければ話にならない」

「ええ、わかっていますよ。——僕もそのつもりですからっ！」

祐人は、着いていた片膝をあげ、二人の騎士へと肉薄する。

騎士の特性であるスピードに磨きがかかり、音速の弾丸となって彼は主の剣となる。

飛び交う血と砂埃。

本物のグラウンドと何ら変わりのない校庭の匂いが後押しする。

ここは、駒王学園。

フェニックス家でなく、このグレモリーの牙城であるが故に。

「シーリス、挟むぞ」

「——了解した」

祐人が何故、かの剣を使わないか。それには、理由がある。

あの剣は龍の因子を持つ者に致命傷を与える。赤龍帝のような存在にはどこまで通じるかは不明であるが、祐人本人に掠ることがあれば、それはこのフィールドからの退場を意味した。

故に、このような多数対一ともなる状況で、まして同等レベルような敵に対しては有効な手段ではない。

あの剣は柄の部分以外には、触れてはならない。

仮に、砕け、その欠片が肌にも刺さることがあれば——、

「——魔剣創造アアアス！」

祐人が吠える。

二人の左右からの攻撃を、手に握るその両剣でいなし、地に手をついた。そして、力を込める。

「——なっ」

カーラマインが、驚きの声をあげる。彼女はそれに咄嗟に飛び退くが剣の一部がわ

き腹に掠る。

決して痛みへの声はあげまいと必死に唇を噛み、声を殺した。

シーリスも同様である。

地から生えるは剣の山。

しかし、疲労しきっていた祐人の力では、範囲は精々十メートル程。

悪魔の身体能力、ましてや騎士では一步下がるだけで事足りる距離であった。

「はあはあ……ん、はあ」

激しく呼吸を繰り返す。

地につけた指先は細かく震え、髪も汗で額にくっついていた。

「……はは、まずいな。賭けだったのに。外れてしまったか……」

祐人は、力なくそう呟いた。

祐人が横先へ目を向ければ、小猫が全身ボロボロになり、腕などを打撲で青くしながらも決死の覚悟で戦っている。

殴られても殴られても、進み、相手の戦車であるイザベラと小猫と同種である猫又の兵士、ニイ、リイを相手にしていた。

ここにきて、フェニックスとグレモリーの眷属数の違いが、戦力差を見せ始めていた。まだ、王は互いに陣地へと隠っている。こんな所で、腐っていればあの王は、自分た

ちを助けようと来てしまうかもしれない。

そんなのは絶対にダメだった。

ここにライザーが来れば、詰まれてしまう。

祐人は、震える足に活を入れ、立ち上がる。先ほどの魔剣創造を警戒して、こちらを睨んでいるカーラマインとイザベラを睨み返す。

「——まだ、兵藤……いや、一誠君がいる。僕たちには、あの龍帝がいる……」
憶えていた。

はつきりと網膜に、ビデオのように焼き付けられている。

たった一人で、墮天使の巣窟へと向かった悪魔後輩の姿。

呪いの歌劇をもろともせず、左目をまるで籠手の宝玉のように緑色へと染め、龍の腕で墮天使を圧倒した姿が残っていた。

強烈だった。

放たれる砲撃。

紅蓮の龍が牙を剥いて襲いかかるようなあの赤い一撃は、あれこそが、神滅具だと思つた。

最初こそ、彼に斬りかかりはしたが、今では分かっている。

『——命くらい懸けられる』

本物であつた。

何故、そう言えるのか。

会つて一日程の女のために、命を懸けるなど気がおかしいのではないか。

例えそうでも、疑えない。

間違ひなかつた。

彼は——命くらい懸けられる。

根拠なく、人を信じる。

祐人は初めてだつた。

「……イツセイ？ ああ、あの小僧か。存外たいしたことはなかつたな。今頃ユーベルーナ様に料理されているだろう。ほら、見てみる。あの校舎奥を——」

カーラメインが指を差した方向に、爆撃の狼煙があがる。

もはや、煙にまみれ、何が起きているのかも分からない。

分かるのは、ただ破壊のような攻撃が続いているということだけだ。

「なにが赤龍帝だ。百年もすれば変わるやも知れんが、なつて数日ほどの悪魔の龍など幼龍もいいところ。暴走がどうたらとグレモリー側は不安なのだろうが、そもそもあんな、なりたての小僧など、暴走すれば一分もしないで死ぬだろう。——茶番は終わりだよ、グレモリーの騎士。龍帝は目覚めずに終わる」

カーラメインがにじりよってくる。それに続き、シーリスも同様に。祐人は、そんな状況であるのに、笑っていた。

口角を上げ、笑う。

そして、耳元に手を当てて、言った。

「——茶番は終わりだね。龍帝は君たちを治療室へと送るだろう。……今すぐに！」

「何を言っている……」

祐人が通信機から手を離し、足に力を入れた。カーラメインが怪訝そうな顔でそう言う。剣を掴み、斬りかかる体制をとった所で声が校庭中に響いた。

「木場あああ！ どけええええ!!」

その声音が届くより速く、祐人は全身全霊を込めて跳躍し、飛び退いた。

カーラメインとシーリスは、その声に反応してしまう。そして、祐人の思わぬ跳躍に、タイミングが僅かに遅れた。

音速を超え、彗星の如く空を往く。

空気すら燃やし尽くし、ただ校庭の土を多大に抉りながら歯を剥けてくる。

赤い一撃。

かつて、墮天使との抗争の際に目撃した破壊の砲撃が放たれる。

カーラメインとシーリスは、目を見開き、左右へ避けようとするが——、

「……嘘だ」

逃げ場などない。

まるで意志を持ち、食らいつくすかのように口を開けた龍砲が横三列に並んでいる。騎士の特性すらも超越した、砲撃の駆けるそれは、暴虐の龍そのものが向かつてくるかのよう。

二人はその龍たちに喰われ、そのままに消えてゆく。

声すらも飲み込まれ、粒子となる。

龍砲は、それでも勢いを止めることなく進み、校庭の四分の一を破壊した。

「——誠君——」

祐人が叫ぶ。

一誠は、そのままに校庭へと突入した。Boostの機械音が、両籠手から鳴り響き、そのたびに校庭を緑に塗り替える。

「——小猫ちゃん」

腹を押さええながら、血を吐き出す小猫を奪還。

あの砲撃に呆然としていたイザベラたちを出し抜き、彼は彼女を抱えた。

「……先輩」

男嫌いな彼女は、苦痛に顔を歪めるが泣きそうな声で彼を呼んだ。

安心しきったその顔を見れば、彼女の意識は時々途切れそうになっている。本当はわかつている。

彼女が嫌うような男ではないことくらい。祐人も一誠も、グレモリーの家族。大切な、人たちだった。

「……ありがとう、ごさいます」

「話さなくていいよ。痛いだろう」

一誠は、本当は怖かった。

知らないはずの知っている力。

血。

痣。

叫び。

彼が生まれ落ちて、見たことのなかったものをたった数日で見てしまう。

死ぬところさえ、見た。

彼女の白い綺麗な髪に血がべつとりと付いていて、顔にすら、青い部分が出来ている。

『みんな、寝ていた。誰もかもが寝ていたんだ。死後硬直のように表情を固め、血を流し、寝ていた』

恐ろしい。

心にかかる重圧は尋常ではない。
気が保てなくなりそうで。

傷ついたところを見れば、重なってしまふ。

あの夢の、どこかに。

そして、その想いこそが皮肉にも鍵となる。扉に手をかけた。

『——もつと俺を呼べよ。兵藤一誠、自分を呼んで呼んで呼んで、そして助けなきや。——さあ、赤龍帝として目を覚まそう。死の淵から引き揚げられた俺と混ざり合つたのだから。二度目ならば、傷さえつけずに敵を消そう』

共感。

知らない気持ちに、共感。

知り得ない想いをリフレインする。

『——そうしなきや、意味がない』

時間だ。

起きなければ。

夢から覚めなければ、ならない。

夢はいつか覚めるもの。

終わりのない夢など、夢じゃない。必ず、先が見える。

『相棒、特大の一撃を放とうか。見せつけよう、奴らに。我らの一端を教えよう。いいか、フェニックスの者よ、聞け』

ドライグが言う。

おそらくそれは、レーティングゲームを見ている両家に、ライザー・フェニックスに、そして全てに對する威嚇。宣言。

『我は力の塊と評された赤き龍の帝王。悪魔如きが、俺らの前を歩くな——必ず消すぞ』
心臓が唸りをあげた。

胸元が紅に光り始める。

想いを集め、憎しみを集め、死の恐怖すらも飲み込む。

『Boost Boost Boost!!』

倍加する。

集めた想いを倍加しては食わせ、そして食われては倍加する。

絶望のスパイラル。

その間は、ひどく頭を痛める。

何度も何度も見せられる。

嫌なものを、見せられる。

そして、その時の想いを植え付けられては、増長され、そして消されていく。

一誠は、籠手を突き出す。

祐人や小猫はそれを無表情で見つめていた。しかし、汗がつーつと伝う。寒気がした。

彼の瞳の片方は、緑光を発光し、漂わせている。

その異常なる雰囲気的空間が歪んだ。熱帯のような霞の極地。

イザベラ、ニイ、リイ——そして、その後ろライザーの陣地である建物へと標準を合わせる。

夢幻に憑かれた龍帝。

背後にとぐるを巻く龍、緑の双眸が彼女らを睨みつけ、笑んでいる。

『——フェニックスごと消えろ』

誰の声。

籠手に溜められた紅蓮の塊は、今までのB o o s tを、夢を注ぎ込むかのように一度に膨れ上がる。

空を赤色に染めた。

『Crimson Blaster』

かつて、鎧を紅に染め上げた龍帝の破壊砲。

彼の想いを食らい続けた心臓は、籠手へと力を渡す。

視界を消す紅の閃光は鼓膜を破るほどの爆撃を示し、ただ敵を屠るために線を描いた。

「……」
噛み砕かれるように、塵へ返す。

主の髪色に似せた龍の吐息。

そして、いまだ後悔し自身を攻め続けている、
“兵藤一誠”の一撃だった。

「……これ、が。赤龍帝——」

小猫が呟いた。

誰にも聞こえないほど小さな声でそう言った。

莫大な衝撃音と共にその閃光が通り過ぎた後には、殆どなにも残ってはいなかった。

瓦解する建物——すらもなく。

全て消え失せたのである。

辺りには煙と砂が舞い、視界を狭めた。

撃ち終えてもいまだに一誠の正面の先には紅に染まる靄が立ちこめている。

しかし、その靄の後ろには影すらも見えない。

なにも、見えなかった。

『ライザー様の兵士二名、戦車一名リタイア』

アナウンスが鳴り響く。

しかし、そこにはライザーの名前は刻まれていない。

そして——ゲームは終わっていなかった。



「部長さん……先ほどの光は……」

「ええ……間違いない。イツセーの」

旧校舎本陣である部室の窓からリアスとアーシアは、それを見ていた。何度かあそこへ向かおうとした。

しかし、そのたびにアーシアが服を掴んでは首を振る。

アーシアには、分かっていた。どれだけリアスのことを想い、みんなが戦っているのかを。

ゲームの経験もなく、あるのはぐれ悪魔退治と先の堕天使との抗争のみ。

それでも、治療が間に合わないほどの怪我を負う覚悟で、敵へと突き進む彼らの想いを気持ち、汲んでやらねばならない。

本当ならば、あそこへいきたい。

いって、治療を施したい。

けれど、あのような一秒すらも長いとされる戦場へ赴けば、気づいた時にはおそらく、ベッドの上だ。

自分は頼みの綱となりえる。

リアスのために、そしてライザーと戦う最後の戦士たちのために、残らねばならない。手を強く握る。

校庭へと目をやれば、ここからでも血の跡が見える。

そして、破壊されたグラウンド。建物。

いまだに鳴り響く爆撃音と雷鳴。

戦争を見たことなどない。

それでも——これは、戦争じゃないと言えるレベルなのだろうか。

墮天使との抗争の時の記憶には、このような光景などなかった。

アレの何倍もの、殺し合い。

これをゲームなどというのだろうか。娯楽と言うのだろうか。

——こんなものを、見て。

楽しめてしまうのが、悪魔なのだろうか。

「——アーシア」

そつと頭を撫でられ、抱き締められる。甘い香りがした。

柔らかい暖かさが布越しに伝わり、心を彼女へと向ける。

アーシアは、泣いていた。

「……ゲームが終わつたら、一緒にお風呂にまた入ろう。泊まりにおいで。いっぱい遊ぼう——」

なんて言えいいのか、リアスにはわからなかったのかもしれない。謝つてはいけない。

彼女たちに命令したのだから。

大丈夫なんて、気安くは言えなかった。だって、普通の女の子だったアーシアにとって、こんな光景、残酷過ぎたから。

「情けないね、私。なんて言えいいのかなんて思いつかなくて」

「——なんで、いつも部長さんは自分を悪くいうのですか。あなただってこんなものを見るのは初めてじゃないのですか……。みんなが傷つき、叫びたいのは。怖いならそう言つたっていいでしょう？ 泣きたいのは自分じゃないんですか」

アーシアは、嫌だったのだ。

泣いている自分に対して悪いのはリアス自身だと言っているような、物言い。

違う。

悪魔になるのを望んだのは自分だ。

覚悟が足りない、弱い自分が悪い。

しかし、リアスは再び彼女を抱き締め、慈愛の籠もった声音で言った。

「——王、だからね。みんなの弱さも失敗も私のもの。家族の長ならお母さんかお父さんかな。だから私は女だからお母さんか。……みんなが本当に可愛いものよ。可愛くて、好きでしようがない。——そんなお母さんが、泣いていたら困るでしょう?」

眷属の境遇を誰よりも痛んで、受け止めて。やれる限りのことをして。

本当は、心は疲れているんじゃないのか。

誰よりも、人の心を考えてしまうあなたは、どこまでも傷ついているのではないのかと。

そこへ、突然の婚約があり、悪魔——純潔を増やすためだと、まるで子作りの道具みたいなじゃないか。

いろいろな悩みがあつたのだろう。それなのに、何故歪まない。

何故なのだ。

どうしてそこまで真つ直ぐに愛せるのだろうか。

「——みんな一緒」

「……一緒、ですか」

「そう。あなたもあの聖獣も、朱乃も、祐人も小猫も。そしてイツセーも。みんな、優しくてき、だから私も優しくなれる。そんなみんなじゃなかったら、私はここまで出来ないよ。とつくに不良になってたかも」

最後には、彼女らしいおどけた口調でそう言った。

微笑みかけてくる王様は、きつと万人の王にはなれない。

けれど——最高の王だ。

私たちの王だと。

そう、思う。

「みんながさ、私のために頑張ってくれてる。だから、勝たなきゃね」

何を言えば正解なのか、分からない。弱冠17歳の女の子の頭にはそんな言葉はない。

ならば、心に思いつく、心の言葉を出せる限り言えばいいのだ。

辛い光景を見て、泣いているのならば抱きしめて、好きだと言う。

なんだか、へんてこである。

おかしいかもしれないが。

しかし、どこか安心の色が広がる。

大丈夫なんかよりも、根拠のない慰めなんかよりも。

関係のない、優しい言葉こそが救うこともあるかもしれない。

彼女は眷属の母だと言った。

そう、家族なのだから。

母の想い。

来年の母の日。彼女にも花を手渡そうか。そんなことをしたら、そんな年じゃないと怒るのだろうか。

それとも――。

アーシアは、涙を拭く。

胸元にある鈴を鳴らし、リアスと外を見た。

火の粉が、飛び交い。

血の匂いがする。

それでも。

――彼女の心だけは、きっと折れない。



「……まだゲームは終わっていないのか……？」

祐人は啞然としていた。

あの一撃は確かにライザーの牙城を砕いたはずだった。いや、間違いなく。そして、周辺もろとも塵へと返したはずである。

なのに――、

「どこかへ移動していたのだろうか……」

「……心配がありません」

「――当然ですわ」

突如、その場に声が鳴る。

幼さの残る可愛らしい声とは裏腹に、どこか貴族としての威厳がある。

小猫たちの頭上には、もうひとりだけのフェニックスが炎の翼をはためかせていた。

「――レイヴェル・フェニックス」

祐人が彼女を見上げながら名を呼んだ。レイヴェルは、口元に手を当て、笑うように言う。

「案の定、あの場から離れていて良かったですわ。ま、このようなゲーム――もう、お仕舞いになりますか」

レイヴェルがそう言ったその時だった。

一誠を含めた三人の遥か頭上に舞う火の粉。そして――それに不自然について行く宝玉。

その宝玉に瞳が浮かび上がった一瞬、僅かな火の粉が燃え盛り、人の形を形成する。そして——特大の火球を三人へと放った。

気配などないはずだ。

だって、いないのだから。

死んでいたのだから。

しかし、体の炎の一部は意志があるかのように宝玉を連れ、そして蠢く。

これこそが——フェニックスの真骨頂。

あの一撃を喰らってもなお、生き返る。

三人へと放たれた業火は、ただ隕石のように潰し、そして焼き殺そうと歯を向けてくる。

一誠は、祐人と小猫を自身の後ろに庇い、籠手を突き出した。

『Reset』

無情。

力のない音声は残酷にも告げた。

その間にもひたすら迫り来るフェニックスの一撃は、ただ速度を緩めることなく宙を走る。

『——チツ、切れたか……』

一誠は、緑光の瞳に焦りを浮かべてそう呟いた。だが、諦めることなどしない。そんなのは、許されない。

しかし、Boostする時間はなく、その頃には三人は火に飲まれる事だろう。焦りに焦ったその時――、

――視線の正面を、紅の髪が覆った。

ふつと横目にこちらを見、そして不敵に笑う彼女。

その口が動いた。

「――三人とも、そんな動けない体でよく頑張ってくれたね。これは任せなさい」

彼女は、それだけを言うと手元に紅の魔法陣を瞬時に形成。

そして、そこから視界を染め上げるほどに広く、魔力を放った。

それは、紅黒色の消滅。

触れたものを、差別することなくこの世から消し去る王、最大の攻撃であり、防衛。消滅の魔力は――蝕むかのように巨大な火球を食らいつくす。



舌打ちが聞こえた。

空を見上げればライザーが憎々しげにこちらを睨んでいるのが分かる。

その最中——アーシアの悲鳴が聞こえた。

「離っ——つてくだっさい！」

「……大人しくしてくれませんか？ これだから下級悪魔は品がありませんわ」

レイヴェルが、空中でアーシアを後ろから魔力で縛り、掴んでいた。

「アーシア！」

「リアス様——動かないで下さないな。この子は厄介ですから。私と観戦ですわね」

リアスが叫ぶが、レイヴェルは静止をかけた。それ以上動けばこの子を燃やす——そんな合図だった。

レイヴェルは基本的にゲームには観戦しかしない。闘う性格ではないし、あまり得意でもない。

だが、アーシアのような力のない下級悪魔を縛ることなど容易だ。

これに関しては、リアスがとっさに三人のフォローに入ったのが仇となった。だが、あの場面で悠長に選ぶ暇などなかったのも事実。

結果、仕方がない。

「——あらあら、ならばゲームを終わりにして解放してあげませんか」

リアスの頭上に、聞き慣れた声音が聞こえた。

眷属の皆が顔をあげれば黒髪を揺らし、彼女はいる。

「朱乃！」

リアスの声に、朱乃は微笑む。

彼女の巫女服は、所々焼けただれ、焦げている。

彼女自身、火傷の跡や血を流している箇所があった。息も荒い。

——確実に消耗している。

「そんな心配な顔をしないでリアス。——あの女王は必ずや私が」

朱乃は、前方へと目をやり、瞳を鋭くした。

そちらへ見れば、ライザーの後ろに降りてくるユーベルーナの姿が視認出来る。

そんな彼女も朱乃と同じくボロボロの姿ではあったが。

意地と意地。女と女。

女王と女王の熾烈な決闘は、既にリタイア寸前となろうとも決してはいなかった。

そこでライザーが初めて口を開いた。

「——ふん、消耗まみれの眷属。それで不死鳥に勝てると思っているか」

誰かに聞いているわけではない。

ただ、そう嘲笑した。

一誠を一瞥するが、負けるとは思っていないのだ。

——「フェニックス」となった彼の精神は、普段のライザーとはものが違う。

「ユーベルーナ、行け」

「——はい」

ライザーが指を朱乃に向けてそう言う。すると、ユーベルーナは朱乃を挑発するように手で招いた。

それを受けた朱乃は言った。

「リアス。——必ず勝ちなさい。あんな男のもとへ行くなんて許しませんわ」

「——当たり前よ、親友」

朱乃はふつと笑むと、悪魔の翼を動かしてさらに空へと飛んでいく。

リアスは、それを一瞥すると前方へと視線を戻した。

リアスの後ろには一誠、そして朱乃と同じくリタイア手前の祐人に小猫。そして、その前方にライザー。

少し離れた所でレイヴェルに縛られたアーシアが。

それぞれが、意識を集中させる。

『Boost!!』

機械音が、響いた。



空中にて、落雷が落ちた。

朱乃が下を見やれば、緊迫的狀況が続いている。

ライザーが腕を組んでニヤリと笑い、リアスはどうであるかを悩んでいるようだった。

「——いい加減に消えなさい！」

ユーベルーナが、そう叫んだ。

宙には火の粉が舞い上がり、時折電撃が駆けていく。

「あらあら、消えるのはあなたですよ」

朱乃が、ユーベルーナの四方に魔法陣を発現させ、同時に雷を放つ。

自然の雷そのものとしたそれらは一直線にユーベルーナの体を麻痺させ、不能にさせようと食らいつくかのように落ちていく。

互いに服は焦げ、所々破りながらも戦うことを放棄しない。

既にもう一、二撃でも喰らえばリタイアするであろう二人。

それでも、絶対的意志があつた。

「ぐう……きやあああああー！」

魔法陣を盾にユーベルーナは応戦するが、四つ目の雷を防ぐことが出来ずに直撃して

しまう。

ユーベルーナは、悲鳴をあげながら地へと墜落した。

朱乃はそれを快楽に染まった表情で見つめ、眩く。

「――撃破」

朱乃は、最後の仕上げにと手を天へと翳し、目を閉じながら雷をその身に感じる。

大きく息を吐き出し、残り殆どない力を、体が停止させようとする拒絶の痛みに抗い、集め始めた。

そして、トドメとなる特大の一撃を放とうとして――、

「……やっぱり噂通りね。実力だけは認めてやるわ」

朱乃は、その声に閉じていた瞳を開けた。

「――ッ」

声にならない声が出てしまう。

ユーベルーナは、悠然とその場に立っていた。

朱乃は目を見開いてしまう。

本来ならば消えてもおかしくないはずだと言うのに、何故。

何故、あの女は無傷で平然と立っているのだろうか。

ユーベルーナが朱乃のその様子を見ながら笑み、そして口を開く。

「意味が分からないって顔。やっとそんな顔を見れたわ。——これ、知ってるわよね」
ユーベルーナは、右手の小瓶を宙に吊る朱乃に見せびらかすように示した。

朱乃はその小瓶に対し、顔を初めて歪めた。

「……フェニックスの涙」

「ええ、そう。まさか卑怯だなんて言わないわよね？ それともゲーム初めてだからわからなかったかしら」

歯が軋む音がした。

朱乃は、血が出るほどに唇を噛んでいた。失念していたのだ。
フェニックス家を支える秘宝の一つを。

「——さて、ここからあなたはどれだけやれるのかしら」

「……ええ、ならこちらはこちらにしかないものを——」誠君

名を、呼ぶ。

均衡状態にあつた一誠は、腕を組み瞳を緑に揺らしながら首を上へとあげた。

『Boost Boost!!』

特大の一撃を放つたことで、左右の倍加にはズレが生じている。

一誠は、朱乃の方を見やると面白そうな顔をし、首肯した。

彼は——今、どちらの意志で動いているのか。

それから朱乃は疲れながらも、優しげな顔で一誠を見やり、ユーベルーナは、一誠の名前に憎々しげな顔を浮かべ、吐き捨てるようにこう言う。

「あんな小僧に頼るなんて——そんなに龍帝に縋りたいのかしら」

「あらあら、別に。私は『一誠君』に縋っているのですわよ。——嫉妬なさらないで下さいな」

その言葉が火種となる。

それは心の怒りを弾けさせ、ただ撃破するためだけに思考を動かし、そして塗り替える。

ユーベルーナは、回復した己の力を存分に使用し、火の爆撃を撃ち始めた。

「——うふふ、そんなにお顔に力を入れたら皺が出来てしまいますわよ」

「そんなこと言う余裕があなたにあるかしら？ 腕だつて庇つてるじゃない」

互いに睨みを利かせ、その視線に殺意を乗せる。

女王同士の熾烈な攻防は、終わりの兆しを見せない。

宙を駆ける二人の悪魔は、女王の特性の一つでもある騎士すらも生かしながら、視認する事すら辛いほどのスピードで星の如く空を舞う。

そして、彼女たちが通り過ぎれば、それには落雷と爆撃の嵐。

凄まじい女の殺し合いが行われていた。

「次にでも喰らえばあなた、終わりよねえ」

「さあ、どうかしら。やってごらんなきいな」

挑発するユーベルーナに対して、挑発で返答する朱乃。

そこへ、朱乃の名を呼ぶ声が届いた。

『——受け取れ。その力、生かせよ』

「お願いします、一誠君」

一誠が一度砲撃でユーベルーナを威嚇する。威力が大幅に落ちたものではあるが、それでも充分。

朱乃は機動力を駆使し、巫女服を翻しながら、一誠の目の前で静止した。

そして、一誠が彼女の肩に手を当てる。

『——Transfer!!』

どこか、いやらしい声をあげた朱乃の体に電撃が迸った。

流れるように、指先から足へ、足から指先へと電流が勢いよく流れ、そのボロボロの体に入れた。

「……これで、五分五分かしら」

「赤き龍の力かッ……。けれど、体力も肉体的負荷もあなたの方が酷いはずだけれど」

「あらあら、私は何も勝つだなんて言っではいませんかのよ？」

「——なに？」

フエニックスの涙により、全快したユーベルーナを再び先ほどまで追い込むことは、おそらく不可能。

力が大幅に増し、そして体は軋む。今、負傷だらけの体、そしてその身の丈に合わない力。

長いこと闘うには——限界である。

朱乃は、額から流れ顎下までを伝う血を舌で舐めとり、飛行をやめ、その場に止まった。

そして、ユーベルーナの魔法陣が“朱乃”に固定される。

ユーベルーナは、眩いた。

「——まさか……」

「うふふ、あなたの魔法つてとても強力ですが、一度発動すれば止められませんわよねえ」

ペロリと。

舌なめずりをして朱乃は言った。

それから、痛みで一瞬、顔をしかめるが、息を吐き出し好戦的な眼差しをする。

「……私も残された時間はあまりありませんわね。——さあ、どうぞご一緒」

朱乃は、*“自身”*に固定された魔法陣と共に騎士より早く宙を駆け抜ける。爆撃の魔法が始まるタイムラグさえ、そのスピードには適わないほどに。女王の特性に、龍帝の力。

その際に、キラキラと跡を残してゆく。リタイア寸前の体に鞭を打つ、そして譲渡された龍帝の力に体が耐えられず、消えてゆく。

肉体が粒子に変わり始めていた。

「——ありがとう、一誠君。彼女を任せます」

朱乃は、眩く。

彼女は、Boostした圧倒的スピードで空色を飾った。

そして——、

「フェニックスの女王、これでファイナーレですわね」

「は、離せ——」「撃破——テイク」

朱乃はドSな笑みを零した。そして、ユーベルナの服を掴んで離さない。

ユーベルナと朱乃の声が重なる。二人がそう言った最中、自身の強烈な爆撃と共に、極太の雷が地と空を突き刺した。

『ライザー様の女王一名リタイア。リアス様の女王一名リタイア』

アナウンスが告げた。

愛share

一誠は空を見上げた。そこにはいまだに残像のように電流が駆けている。微量の電気が爆撃による煙りと混じり合っていて、雷雲のようだ。

いくらかの火薬くさがりが鼻の奥をツンと刺激した。

幼い頃に楽しんだ火花ならばこのような気持ちにはならない。

殺し合いだ。

そして、グレモリー眷属についてリタイアした者が出たのである。

それは女王。

誰よりも最後までリアスの横で彼女を支えたかった心をこの戦場へと残し、相手の女王を道連れに消した。

その様、実に見事である。

ライザーは腕を組みながら、空中を眺め、のちに鼻を鳴らした。

「いったか。まあ、よく持ったほうだな、互いに。実力は拮抗していたし、それなりに見れる遊戯だった」

口元を歪め、いつもの彼らしからぬ物言いで自身の女王及びリアスの女王を褒めた。

しかし、その賛辞は決して誇らしいものではなく、ただ彼女たちを下に見た口調だった。リアスが齒がゆく言う。

「……だから二人の決闘が終わるまで手を出さなかった、そうね？　そういうこと」
ライザーは腕を広げ、リアスとその眷属を一瞥しこう言った。

「まあな。死なない俺からすればお前らが對抗しようともガス欠を待てばそれまでだ。ましてや、お前の僧侶は使えなく、リアス以外の眷属はリタイア手前。赤龍帝さえ、ろくに力はない」

ライザーは嘲笑する。

血だらけの小猫に、今も剣を軸にして立っている祐人を見れば一目瞭然。

彼はフェニックス。もとより、小猫や祐人が齒を向けてどうなる相手でもなく、ましてや手負いである。

ライザーは手負いという感覚を知ったことはないが、見れば分かるというもの。そして、赤龍帝の力も知れた。

しかし、その譲渡の力はライザー相手ではたかが知れている。

——一誠の放ったあの紅の砲撃以上のものを、誰に力を渡したとして用意出来るとは思えない。

ライザーにとって、女王の勝ち負けなどどうでもいい。

既に詰みだった。

ライザーは言った。

「——終わりだよ、リアス。これ以上眷属を傷つけてどうする？　いくらレーティングゲームが保護されているとはいえっても、知れている。首を持って行かれれば必ず死ぬゲームなんだ」

レーティングゲームはリタイア後、即刻治療室へと転送されるが、そこで生死がどうなるかなどわからない。

身体に受けたダメージが一定を超えた場合、または王が眷属を強制リタイアさせた場合のみ、転送を施されるが、それ以前にフェニックスの涙や魔法で治療することの出来ない範囲を一瞬で受けた時、事故として死亡が確定される。

生命活動を止めない範疇でないと、息を引き取る。

ライザーの炎で頭部を消されれば間違いなく、死ぬのだ。
顔に迷いが一瞬浮かんだ。

感情を殺し、理屈で考えたとき、本当に——死んでしまうのではないか。

リアスは、頭の中で思考を何度も何度も入れ替える。

自分が犠牲になれば、死なすことだけは避ける事が出来る。

婚約と命の天秤など……。

ただ、それでは朱乃との約束が、眷属の思いが。

わからない、こういう時、本当はどうすればいいのだろうか。

例え、眷属の半数を失ったとして、婚約を免れて、それは今まで通りの幸せなのだろうかと。

ただ震える唇をなんとか動かしながら、リアスが口を開こうとしたその時。

——アーシアが叫んだ。

魔力の縄に縛られ、苦しそうにもがきながらも、ただ必死に。

我が主のためにと、喉を枯らす。

温厚な彼女に似つかない、声。

嘆きなどでもなく、悲劇の歌でもなく。

勇気を絞り出した、最弱の僧侶。

「——ダメええええええええ!!」

初めての咆哮。

静まり返るゲームフィールド。

誰しもが彼女へと視線を向けた。

アーシアを掴んでいるレイヴェルは耳を抑え、目を点にしている。

構いもせず、アーシアは再び、言う。

「諦めようとしなくて下さいっ！ 王って言ったでしょ。私たちの王だって。死なないから……私たちは死にませんからっ！ 行ってください。気持ちで負けるなんて……許さないっ！」

情けない姿だ。

アーシアは自分を笑った。

縛られ、泣きながら、不細工に歪めた顔で泣きながら。

ただ叫んでいる。

役にたてていない。けれど、諦めたりはしない。

一度死んだはずの命。

再び燃やすならば、グレモリー眷属のためだけに。

涙で火を消してみせる。

それが出来るのならば、泣き叫び続ける。誰にも、渡さない。

私たちの王（母）は必ず。

——守ってみせる。

「……アーシア、あなた」

「……好きですよ、私も。リアス・グレモリー様が大好きです。あなたが愛をくれるなら、私も愛を渡します」

レイヴェルが魔力を強めた。黙れと平手で彼女の頬を叩く。

けれどアーシアは見ることもしない。瞳を揺らがせることもしない。

ただ、視線をリアス、そしてみんなと合わせるだけ。

ライザーが睨んだ。

「お前わかつているのか？　いつでも殺される状態だつていうことを」

「やればいいじゃないですか」

「——は？」

誰もが耳を疑った。

アーシアは汗を垂らしながらも、深呼吸をしたのち、言う。

「死にませんから、私は。そして、あなたにリアス様はあげません。あなたの炎より、紅のほうがずっと熱い。あなたの心は歪、偽りの虚勢に見えます。ぬるいですよ、グレモリーよりも、確実に、ぬるい」

勇者のような眼差しで、フェニックスを穿つ瞳の最奥には金色の双眸が見えた。

胸元で偉大な音が叫ぶ。

「本物の心は、空っぽな心には負けません。どれだけの心の箱を用意しようとも、中身は空白。簡単に割れます」

「レイヴェルツ……。送ってやれ」

ライザーは、侮辱にも似た言葉を吐いた女に対して、宣告した。

空中で無様にも詰まれた少女は、最弱にして最勇を刻んだ。

回復を施す聖母は、微笑む。

悪魔にして、聖女。

聖母にして、悪魔。

そして、聖なる獣にして、この少女あり。

彼女は、諦めの心に光りを託した。負け戦に傾いた試合に、活を入れた。

最後まで命を懸けて、諦めずにもがいたのは誰の記憶か。

大切な、誰の夢を彼女は見たのだったか。

わかつている。ならば、わかつているならば、夢を己に投影してみせると、少女は心に決めた。

ただ、自分は死なない。

誰にも放されてきた人生を、もう誰からも放れない生き方へとここで、真に変えてみせる。

傷つけて、傷つけて、傷つけて。

己の心を傷つけて。

それでも、今は治してくれる人がいるのならば。

“敵”を、傷つけることくらい、なんて容易いのだ。

——アーシアは、この日。
初めて。

『敵』を認識したのだ。

リアスが叫んだ。

「——グレモリー眷属、敵王は目の前よッ！　いくわっ！」

返事が重なる。

アーシアの覚悟を知り得た。“本当の意味”で理解することができた。

震える。おそらく、リアスは泣いていた。

悔しいのではなかった。苦しくも、痛くもない。ならば。

理由は、もつと不謹慎で、簡単だった。

嬉しくて、嬉しくて。嬉しすぎて、震えた。

なんだ、この高揚は。なんだ、この溢れる気持ちは。

ここまで、想ってくれる人に、普通に生きている人間ならば会えない。一生かかって
も、見つけられるものかと、言える。

それらが、伝染した。

紅い糸を紡がれた眷属の心に、波紋が広がるように、振動が伝わるように繋がる。

一万だつて殺す。

拳を握る白い猫は、猫らしいスリッド状の瞳で、犬歯を見せた。

血を流すグレモリーの騎士は、氷剣を投擲しながら、特大の一撃を放とうと紅黒い剣を生み出し始める。

そして——ドラゴンは……、

『Welsh Blaster Bishop』

カシヤカシヤと音を鳴らせば、彼の籠手は変形を始める。

砲撃するに適した形状へとそれらを誘い、一誠は腕を突き出していた。

何度目かのBoostが鳴り響き。

その度に紅蓮の籠手が赤みを増す。増す度に、心臓が高鳴りをあげ、
“兵藤一誠”の
想いを倍化していった。

夢とは想いの力。

“力”が倍化されてゆくごとに、それを心臓が喰らっていく。

そして、徐々に様態が変化していくのだ。

戻りながら、想い出しながら、忌み嫌う姿に縋る。

『——ここに居る兵藤一誠を愛しています』

答えられない。

傍らに居続けられなかった兵藤一誠は、嫌いながらもこの姿に、力に縋ることしか出来なかった。



「——いたッ！」

口を閉ざそうとアーシアの顔を手で包んだレイヴェルが悲痛の声をあげた。

片目を閉じ、口元を歪める。

噛みつかれたのだ。

レイヴェルは自身の右手指が炎を纏いながら再生してゆく様を見つめ、ギリツと歯を鳴らした。

「……ああ、そう。そうですね。あなたはバカでしたか。このような不毛なまでの反抗を眷属に促し、そして——散りたいと言うのですからッ！」

レイヴェルはアーシアに特に手を出すつもりなどなかった。

悪魔になって半月ほどでしかない彼女に多少の慈悲をもって臨んでいたつもりだった。同じ僧侶として、戦わない身として。

厄介な力さえ封じれば、それでよかったはずなのだ。

それなのに。

「私はここであなたを殺すことだって——」

「出来ますか？」

聞いた。

アーシアは、聞く。

殺せますか？

短いその言葉には全てが乗っていた。殺すとは、もう終わりだ。

それを出来るかを、ただ質問として問う。

そして、それしか答えは必要なかった。

レイヴェルは言った。

「……ええ、私が最大の出力であなたの頭部か心臓を燃やせば治療など意味を成しませんわ」

「ですから、それを出来るかどうかを聞いています」

「——ッ」

行えるかどうか、それは手段の先にある。

用いる道具ばかりを揃えて、実行しないのならば結果としては意味のない。

レイヴェルは、悪魔はおろか、魔物すら殺したことなどないのだ。

というよりも、もはや、戦闘行為など稽古ほどでしか経験していない。なにもない、可愛らしいお嬢様。

「死」を知らない、戦場に立ってはいけない女の子であった。

「出来ないでしょう？　なら、あなたは何故ここにいるのですか？　さつさと私をリタイアさせれば楽だと言うのに何故、傷つけないのですか。——意地ばかりを張って、怖いだけ。少し前の私と似てる」

アーシアは瞳を逸らさない。

強く強く、ただひたすらに強く。

生まれ変わりを経た聖なる悪魔は、目に炎を宿している。

それは、レイヴェルの背から迸るフェニックスの炎か。

レイヴェルはアーシアの頬を叩いた。

「あなたなんか手段すら持たず、ただリアス様の後ろへ隠れていただけのくせにッ！　赤龍帝にすぎりつく弱者のくせにッ」

レイヴェルは怒りを抑えられない。

何故、この様なことをいきなり言われなければならないのか。

ここは戦場。

下級も上級もない。

ただ、敵を傷つけられるか、それだけが支配するこの現世の淵である。

アーシアは言う。

「リアス様は最高の王。一誠さんは最高のお兄さんです。もう隠れませんが、継りません。ただ、傷つけ、傷つきに行きます。幸せのために。部長さんの幸せのために。みんなの幸せこそが私の幸せになるのなら、それを守るのはひとつの約束。一番大切な——言葉」

『ずっと。幸せに』

なりふり構わない。

傷つけるのが怖いだなんて、弱さだ。傷つくことなんて慣れている。

ただ、恨まれるのが怖かっただけだ。ただ、痛い顔をされるのが苦手だっただけだ。

ただ、心が弱かっただけだ。

鈴を鳴らす。

応えてほしい。

弱さもなにもかも、想いに変えて、応えてほしい。

——あの女は、いつも酷く弱い。

ならば、強くして。

心で眠るあなたが目を覚まして。

アーシアは願った。

ただ、はちきれるほどに、胸元を意識して彼を起こす。

光が満ちる。

空が見えたような気がした。

いないはずの彼の残していった想いを形にして。

こんなにも強い気持ちがあるのなら、それを見せてほしい。

鈴がやんだ。

その鈴は、何なのだろう。

「——ッ」

レイヴェルが瞳を強く閉じた。

視界を黄金の力が埋め尽くす。

少しだけ見えたのは、鈴に激しく紋様がほとぼしり、そして——アーシアの持つ右手神器の指輪に溶けた瞬間だった。



「ハアアアッ！」

黒き、しかし紅を宿した刀身が危なげに唸りをあげる。

まるで呪詛のようなうめきを宿し、卑しく歯を向けていた。

祐人はその剣先を——ライザーへと放つ。

龍の鱗を噛み砕く、紅黒い斬撃は燕のように素早く飛び出し、そして数枚の刃に別れ、フェニックスを穿つ。

「——」
ライザーは、ただ表情すら変えることなくその斬撃を身に受けるが、痛みを感じた素振りすら見せない。

無表情に、刻まれた肉体を見つめ、ため息をこぼすだけ。

身体をぐちゃぐちゃに刻まれ、いくらフェニックスと言えども龍を砕く剣撃は、痛みが安いはずもないというのに。

そして小猫の打撃、リアスの消滅の魔力が彼をひたすらに襲うが効果は見せない。

それどころか、死んだその数だけ炎の翼が肥大化しているようにすら見える。

悪魔であるフェニックス、もとよりフェネクスは元来のものとは違い、ただ死なないだけのはずではないのかと、リアスは自問した。

何故、燃え盛る。

『——どいていろ、お前ら』

背後から声がしてリアス及び残りの二人は後退する。

緑光を瞳に宿す一誠は額に汗を垂らしながらも、籠手を突き出し歯を食いしばる。

突き出された籠手の前には、紅蓮の魔力が蠢いていた。

一誠はそれにBoostをつぎ込み、巨大化させ——……、

『Dragon Blaster』

放った。

先刻に放ったCrimson Blasterと違い、赤々とした龍砲が飛んでゆく。

閃光を撒き散らして、駆けるその砲撃はライザーを飲み込んだ。

飲み込んだはず、だった。

しかし、どこか蠢動を思わせる動き。そして、炎が盛り、肉体を形づけ、やがて元へと戻る。

繰り返す。ビデオの巻き戻しを見させられているような気分だった。

一誠は足に手を当て、息をつく。

心臓の色合いも静まり始め、瞳に宿した緑光も収まっている。

ライザーは自身の胸元にある宝玉を撫でながら見下す。

それを見たりアスは、目を見張った。

「……やっぱり。やっぱりッ！ ライザー、あんたそれ禁具じゃない。フェニックス家はそれを戦争以外では使用しないって確か表明していたわよね。——暴走して以来」

ライザーは惚けたような表情をした。

宝玉の中で旋回する灰の瞳は二つ。先ほどよりも増えていた。

そして——時折火花が散っている。

「さあ……、なんのことだか」

「とぼけてんじゃないわよクソホスト。見たことなくても、中の灰やあんたのデタラメな精神、そして回復速度見れば分かんのだよ。赤龍帝とあたしらの攻撃、どれだけ受けたと思ってるわけ？」

「だとしても——この試合は漏れないからなあ。『何が』起こっても文句を言わない』
と言ったのはリアス、お前だ。勝ち負け以外は不問も同然だろう」

「……………」

リアスの握る拳からは血が流れていた。ポタリポタリと地を濡らす。

彼女はそれに気づいてすらいない。歯をかみしめ、ただ己の未熟な交渉、感情に心の中で打撃を繰り返していた。

そして一誠を支える祐人、小猫は何のことだか分からずに瞳の不安を色濃くしていた。

ライザーは言う。

「ああ、お前ら眷属にも教えといてやる。後にお前たちも俺と親戚のようなものになるのだからな」

ライザーはこれまでは全て前座のようなものと語る。

そもその話し、グレモリーに勝ちなど元からなかったのだと。

空はオーロラ状に映る。

しかし、それを眺めている余裕などない。——卑怯だとしか思えなかった。

「フェニックスは傷の悪化によりリタイアすることはない。わかるよな？　それは。ならば、リタイアするとき、フェニックスが倒れる時とはいえいつなのか。——心が折れた時だ。恐ろしいと認識したとき、恐いと感じてしまったとき、体の炎は機能を抑え始める。逆に高揚していればそれだけ栄えるのも炎。心が多大に関与するのがフェニックスの特徴でもある。なればこそ、それを完全に制御下に置けば——炎は消えない」

再生のタイムラグすらもなくなり、そして痛みもなくなり。

炎はより盛り上がる。

輪廻。

「——絶望したか？　わかったか？　本当の持ち得る力はフェニックスより上の存在な

どなし。疲労も傷も、精神の辟易さえもなく。力をあげゆく俺に勝とう。それは無謀だ

よりアス。赤龍帝より、フェニックス。どちらがより有益かを理解してくれ」
殺せばより強くなり。

殺さなければ、ひたすらに痛めつけられる。

紅の龍撃ですら――。

リアスの口元からまるで歯が欠けたかのような音がした。

祐人と小猫は啞然としている。

当然だった。

打撃は通らない。むしろ、火傷をする。フェニックスの炎は龍の鱗すら傷をつけるのだ。

小猫の拳は血が滲み、酷く爛れていた。痛々しいにも程がある。

また、祐人もだ。己の最強の剣すらも届くことがなく。

そして、氷剣は溶かされる。

詰まっていた。

「リアス。投了しろ」

ライザーの声が虚しく校庭へと響いた。

この試合を観戦している両家も結末を知りえた表情をする。

しかし、サーゼクス・ルシファーのみ、瞳を強くしていた。

そして、ひとりの少年を凝視する。
まるで噴火直前の火山を目撃したかのような瞳で。



『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

遠い彼方でそんな音が聞こえていた。俺は耳を塞ぐ。

鬱屈した心をはねのけるようなその機械音は、俺の首を絞めるかのようにじわりじわりと嫌な記憶を紡いでいく。

血の匂いを感じ、体温を意識した。

鈍色の空。

重い鈍器が、のしかかったかのような空気に頭が痛かった。

それでも——リアスが傍にいただけ、まだマシだと思えた。

指を絡め、心臓の音が聞こえるほどの距離で俺を抱きしめている。

なんだか、もう。

もう、それでいいんじゃないかと思えた。

世界は壊れに壊れて。

目を背けたいほど、血が流れて。

たくさん死んで。

もう、終わりでいいよ。

そう思った。

けれど……、

『死にたくないな……』

独り言だったのだろう。

本当に小さな声音だった。

そして、もう俺が意識を失っていると思っていたからこそ、思わず出てしまった言葉だった。

リアスが、そう言ったのを、“まだ”俺は憶えていた。

そして、軽くなる彼女の腕の力と共に。

俺はドサリと、地に落ちた。

死んだ。

リアスが死んだのが分かった。

惨すぎて、酷すぎて、悲しすぎて、おかしすぎて。

そして——俺は、うつすら、本当にうつすらとまぶたをこじ開け、

万華鏡の景色に刻まれてゆく彼女の最期を——目撃した。
一生許さない。

赦さないと。

恨みをぶつけたのは。

“兵藤一誠”、俺自身にだった。



「さあ、終わりにしよう」

宝玉から甲高い鳥の咆哮が響いたような気がした。

ライザーがそう口にしたその瞬間、空の一部が黄金色に光り出す。

レイヴェルが右腕で視界を庇い、その他の面々は光りを見つめていた。

リアスが眩く。

「……あれ……、あの光り……」

見たことがある。

触れたことがあつたはずだ。

彼女だけではない。祐人も小猫もみんながあつたはずだった。

そして、光りが一点に集まるように収束したその時だ。

「きやあああッ!!」

「レイヴェル!」

レイヴェルの悲鳴にライザーが叫ぶ。

力なく地に落ちたレイヴェルへと目をやれば、酷く焼かれた皮膚が見えた。それは、炎のものではない。

そんなものではないのだ。

フェニックスは炎で火傷などしない。では、これはなんなのだろうか。

レイヴェルの体からは淡い炎が噴き出てはその勢いを沈め、それを何度か繰り返している。明らかに回復が遅い。

彼女は表情を苦悶に歪め、あまりの痛みに涙目になっている。

それを見たライザーは空中を睨んだ。

そこには悪魔の翼でよたよたとグレモリーの方へと降りてくるアーシアの姿がある。

使い慣れない翼で、しかし視線だけは強めたそれである。

フェニックスがレイヴェルのような状態になることは、主に二つしかない。故にライザーは舌打ちをした。

ひとつは魔王クラスの一撃を受けた場合、そしてもうひとつは、

「聖なる力——聖気か」

いまだに苦悶の表情で呻きをあげるレイヴェルを一瞥。

彼女は初めて知る自身の体を蝕む“毒”に対応出来ないでいる。

リアスを見ればその横に降り立ったアーシアを抱きしめていた。

しかし、グレモリーはグレモリーでアーシアの帰還に喜び半分、困惑半分といったも

のだ。

「……お兄様」

「お前は休んでいろ」

ライザーはそう呟くレイヴェルにそれだけを告げると前に出る。

そして嗜虐的な笑みを浮かべた。

本当ならばここでゲームを止めるべきだったのかもしれない。

レイヴェルは見抜けなかった。

宝玉を見ていなかった。

既に兄が——兄らしい瞳で己を見ていなかったことに。



「アーシア何ともない?」

「はい、大丈夫です」

アーシアの様子をリアスは執拗に尋ねていた。心配していた。

見れば彼女の両手に嵌められた指輪——聖母の微笑みの片方に変化が起きている。

片方がエメラルドグリーンなのにに対し、右側が黄金色に光っていた。

「……そっか。……ほんとにありがとう」

リアスはアーシアの右手に嵌められた指輪をそつと撫でた。

持ち主でない彼女が触れただけでもチクリと痛い。

リアスは理解した。

左手の指輪と右手の指輪での違い——左手は以前のままの聖母の微笑みがあるのに対して、右手の指輪は聖気が宿っている。

癒やしのオーラと聖のオーラ。

いや——本来、悪魔を癒やすことのできなかつた神器が有るべき姿へと戻っただけなのかもしれない。

聖気は人間や天使であれば薬になるが、悪魔にとっては単なる毒である。

“神”の一端の力である聖獣により、崩された神の力が右手の神器のみ戻ったのだらうか。

アーシアはリアスの包容から逃れるとすぐに祐人たちの方へと顔を向けた。アーシアは顔を歪める。

——酷い傷跡、火傷痕だった。

初めてここまでの重傷を見たような気がする。

感慨もそこに彼女は彼らの痛みを和らげようとするが、

「ダメだアーシアさんッ」

祐人が勢いよくアーシアを突き飛ばした。突き飛ばされたアーシアをリアスは受け止め、すぐにその場から後退する。

空からは直径十メートルほどにもなる灼熱の火球が降り注いでいたからだ。

今のアーシアは人を治すのに時間がかかる。

左手のみでの治療は訓練を重ねなければ以前のような回復は臨めない。これは戦う手段を手に入れた代わりの代償と言ってもよかった。

さらには祐人や小猫の怪我ではすぐになど治せない。

そして——ライザーがそれを許すわけもない。

「何をしている、一誠君ッ！」

ただ俯いていた一誠を脇に抱え、祐人と小猫はその場から飛び退いた。

互いに体の一部を庇いながらの跳躍は不細工に線を描く。

火球が地を揺らした頃、目をやれば地下数メートルほどまで地面を溶かしきつていた。

気づくのが遅ければと思うとゾツとした。

「一誠君ッ」

「……木場？」

祐人は警戒しながらも一誠の肩を掴み呼びかけた。

なぜ、こんなときにぼうつとしてしているのかと怒りも僅かに沸いたがそれを押し込めて、彼の意識を戻す。

小猫はそれを一瞥した。

「どうしたんだよ一誠君」

「いや、悪い……えと」

「なんだい？」

祐人が聞く。

一誠は信じられないことを口にした。

「——今、何してるんだっけ」



「今、何してるんだっけ」

言葉が出なかった。

唾然じやとてもきかない。

呆然でもだ。

とにかく、祐人の頭に存在している言葉では表現出来なかった。

それは小猫も同じ。

離れたリアスたちには辛うじて聞かれていないとしても。

信じられない言葉が彼から発せられた。

「……ああいや、えっと。確か……俺って——」

「来ますっ!」

頭を抱える一誠をよそにライザーは畳み掛けてくる。

小猫は声を張り上げ危険を知らせた。

祐人は、突然の事態にどうすればいいのかもわからずにただ困惑しながら一誠と共に

下がる。

しかし——、

「どうしたんだ一誠君ッ!」

「……あれ、なにしてんだ俺。……なんでライザーと“また”……、また？ また？ また？
また？ ライザー？ は？」

「しつかりしろッ！」

「祐人先輩ッ！ このままじゃジリ貧ですっ！」

様子のおかしい一誠に祐人が必死に声をかけるが、一誠は余計に表情を歪ませている。まるで想い出したくない何かを必死に押し込めるように。けれど、押し込めた心は悲鳴をあげて、外へ出ようとしている。

ライザーの迫り来る魔力。そして灼熱。

リアスがサポートとして消滅の魔力を放つが、受けた瞬間に再生するライザーはもはや手に負えなかった。

迫り来る一団。

それは身を焦がす太陽。

逃れる術などない。

祐人はボロボロの体で防御の体制をとる。小猫も同じだ。

「お、おい。木場、小猫ちゃん……。やばいdarotte、その火球……避けねえと……」
「避けられるわけがないだろう」

「当たり前です」

範囲は広く、もはや二人のような満身創痕の体ではどうしようもない。

彼らは苦虫を潰したような顔をしたのち、一誠の方を向いてこう言った。

「君に何が起きてるのかわからない。けれど、約束したよね、彼女のためなら命を張れるって。リアス部長のためなら命くらい懸けられると。——目を覚ませ兵藤一誠ッ

！ 君は最強の兵士なんだろう!? 赤龍帝なんだろう!? このままなんて許さないッ

！ 彼女のためならばフェニックスや神すらも打ち倒せッ」

「……私たちが生き残っても意味なんてない。けれど……先輩は違います。私、信じてますから。先輩が——勝つって信じてます。悪魔では先輩な私ですけど……憧れました。あの、『紅の力』。グレモリーの色。……勝ってください、先輩」

二人は言う。

君だけはリタイアなんかさせてやらないと。

君だけは死なせない。

負けさせない。

もう、フェニックスを倒せるのは——兵藤一誠しかないから。

託した。

朱乃と同じ。

リアス・グレモリーを託した。

「お、俺は——」

一誠に頭痛が襲う。

とてつもない頭痛。そして、胸の高鳴り。

再び、再び。

回り、巡る輪廻の先に。

脳が拒否し、忘れようとしてしまった心の何もかもが、甦る。

“兵藤一誠”。

赤龍帝。

乳龍帝。

おっぱいドラゴン。

赤龍神帝。

グレイドレッド。

666。

ルシファー。

白龍皇。

龍王。

恋人。恋人。恋人。

——リアス・グレモリー……。

そして——『死にたくないな……』

死んだリアス。死んだ、世界。

『リアス様の騎士二名、戦車一名リタイア』

目の前で消えてゆく二人。

悲惨さはよく似ていた。

あの世界によく似ていたのだ。

倒れゆく背中。

解かれる指。

辛さに歪む表情。

残酷なほどに——似ていた。

これはもう、ゲームでなくなるのかもしれない。

ここから、彼は壊れる。

きつと、もう。

——壊れていた。

『Welsh Dragon Balance BBBB……、Reset——Dra

g
o
n

H
e
a
r
t

D
r
a
i
n

S
t
a
r
t
』

哀愁愛輪廻

——苦しい。

心を飲まれてしまいそう。

意識をどこか遠くの場所へと連れて行かれて、そして全部忘れて。

体も物凄く痛いんだ。

リアスが、リアスが、リアスが——……

怨念のような思念。

そう、それだけを心に映した何かはただそれだけのために己の想いをBoostしていく、いこうとした。

そんなにも、彼女の為だけに生きていたいのか。

そんなにも、目に入らないのか。

お前には、彼女以外にも大切な何かがあったのだろうか？

それでも、死に直面した兵士は、呪いにかけられたように、亡霊のように。

彼女しか見えていない。

ただ、あの夢の中の記憶しか、あなたには残っていないのか。

だとすれば、憎いと、守れない自身が死ぬほど憎いということなのだろうか。

そんなにも、目に光をなくして、きつとかっこ悪い。

本能で動く動物みたいで、人らしくない。悪魔らしく、ないよ。

そして、その本能が、彼女のために、という想いのみで固定されてしまっている。

哀れだと思った。

明るいものも、愛しいものも、優しい心も閉ざして。

護れない己の瞳から血をずっと流しているのは、見ていて痛いと思う。

本当に、その目にはこの世界の「彼女」が映っているのかい？

いないのだろう。

ならば、君は兵士じゃない。

悪魔じゃないんだ。

一度死んだお前は、ここの俺と混ざり合って、全てがぐちゃぐちゃになって。

それでも、彼女の事だけは、最後の映像だけは憶えていた。

俺に何を教えたい？

どうすれば、君を救える。

痛いを知っている。

涙も憶えている。

こうして、この心臓が溜め込んだ夢を、想いをひたすら血肉にしようと力を放出しているこの時だけは……全てを想い出せるんだ。

君の想いと、心になくしていないものを心臓が、力にしてくれる。

だから、今は本当に一つになれる。

——それなのに。

君は……兵藤一誠は、誰も、彼女さえ見れていない。

やめろよ、この独りよがりだ。



『Welsh Dragon Over Change!!』

清き緑光は、深い不快な緑へと変色を遂げた。

紅の靄が彼の体から吹き出し、霧を生み始める。

両腕の籠手は鱗のようなものを次々と生やし始め、その体を徐々に覆っていく。

爪が異様に伸びる。そして、爪先の赤が剥がれ落ち、紅黒く色を変えさせた。おぞま

しい何かへ変化を遂げ始める。

胸から光り出すシルエツトは、心臓の形をしていて、——ドクン、ドクンとどこまでも、そのたびにフィールドを染め始めた。

やがて、体中を両腕の籠手から徐々に覆う鎧の類。背からは龍の翼が生え始め、角を鋭くつける。

心臓の光が全身の血管を浮き上がらせ、まるでその血を全てへ廻すように生々しく動きを早める。

やがて、全身を包んだ靄と霧は、丸みを帯びて、火星のように形を成した。

「……た、卵……？ なんなのあれは——」

啞然。

リアスの声音は、フィールドである校庭へと静かに響いた。

地が震える。

校舎の窓が、歯をカチカチと揺らすように鳴っていた。

直径三メートルほどに包まれた卵のようなそれは、少しずつ、本当に少しずつ空へと浮かび上がり、地から十メートル程で静止した。

驚くほどに、綺麗に止まり、音もなく、嵐の前のような静かさを、沈黙を醸し出している。

ゆつくりと、廻り続ける球は、糸に包まれたボールのように、ほどけ始め、やがて中

身を現した。

「……イツセー……？　本当に？」

ほどけた霧の糸は、宙へと姿を溶かし、そこから何かが生まれる。

吼えた。

『——り——恨——絶——殺——ツツツツツ!!』

自身の体ほどもある巨大な左腕は、どのようにして持ち上がるか分からないほど。

鋭い牙を口元から覗かせ、バツサバツサと翼と肉体を揺らしながら宙に浮かんでい
る。

深い緑を瞳に宿し、紅の鎧は、まるで龍の形を成していた。それは咆哮をあげる。

その間も、光り続ける胸元は、やはり神々しいほどに紅で、鼓動をする度に全身の血
管が脈を現す。

——その姿は、覇龍を嫌い、そして、かつての自身の道すらも嫌った何者かの求めた
姿。

とても、歪で、不幸で、許し難い、何かを求めるような恐ろしい化物だった。

覇龍とはまた違う。

その瞳から漏れ出す緑光は、涙のようにしか、見えないかもしれない。

心臓は、彼の願いを叶える。

心臓は、彼の想いに応える。

心臓は、彼の気持ちを代弁する。

今の「彼」の胸には、誰がいる。

叶えすぎる、応えすぎる、代弁しすぎるが故に、その心臓は恐ろしい。

憎いと、悲しいと、嫌だと想えばそれを夢幻に。

そして、

『BBBBBost!!』

壊れたように増大させる。

ただの欠陥品なのかもしれない。



フェニックス。

無限の命を司る不死の鳥に龍は食らいついた。

「——なんだこの化物はああ！」

ライザーの叫びなどないものと同じ。ただ、喰らうためだけに、暴力を尽くす。尽くす。尽くす。

そのたびに、フェニックスの炎を吸い上げながら、天へと咆哮する。

それは、誰の意志を持って生きているのだろうか。

その天を睨みつけ、欲するのはドライグの想いか。

封印された悪意をぶつけようとするのだろうか。

それとも、その双眸から溢れ出る緑光は、過去の涙か。

ライザーが断末魔をあげた。

一誠だったものは、爪を振るい、フェニックスを喰らう、

完全に——喰らった。

「……や、やめて、イツセー……。どうなっちゃったの……。う？」

「ぶ、部長さんッ」

リアスが、覚束ない足取りで彼へと向かう。危険と察したのかアーシアが一誠の様子に涙目ながらもリアスを引き止める。一誠は、それに見向きもせずに、フェニックスを壊し尽くす。それでも、僅かな火の残りからライザーはそこから逃れ肉体を復活させた。

それを、ただ繰り返し返した。

ライザーは死なない。

そして、死ぬたびに彼の持つ灰が蠢く。さらに、さらに。

そして、さらに、灰の中の動きは早くなる。

どんどん加速的に、早くなる。

死ねば死ぬほどに宝玉は炎に輝き、ライザーは瞳の色を失い始めていた。

『 赦 』

ただ意味不明な言語を口に出しながら感情を爆発させる。

そのたびにけたたましいほどの *Boost* が鳴り響き、辺りは廃墟と化していく。

レイヴェルはただ尻餅をついて両手を口にやり、震えている。

『兵藤一誠』は、まるでリアスを守るかのように彼女の前に降り立ち、喉を鳴らして

いた。

力も夢もなにもかもが彼から噴き出す。体を覆う歪な鎧からは紅の靄が漏れ出して

いた。

その時だった。

——パリン、と。

ただパリンと。

何かが碎けるような音がした。

無の心に破壊と再生の雄叫び。

フェニックス。伝説の灰鳥が咆哮する。

灰はライザーの体を螺旋状に旋回し始めた。

レイヴェルが目を見開き、とめようとする。飛び出そうとするが、しかし――、

『レ——駄——』

レイヴェルの体を大きな左手で抑えつけた兵藤一誠がいた。

ギロリと睨む双眸にレイヴェルは全身の総毛を並立たせる。

しかし、どこか慈しみの宿るその瞳。そして。

どこか、もう自分をどうすればいいのかわからない。

そんな感情が彼からレイヴェルへと伝わってきた。

だからレイヴェルは震えたその手で自身を抑えつけていた大きな左籠手に触れた。

——冷たい。

それが最初の感情だった。

そして、悲しみが渦巻いているのが見て取れた。

触れた瞬間に伝わるそれは、酷く疲れた心。

恨み疲れた少年の、粉々な心の断片だ。

レイヴェルは兵藤一誠を見上げる。

ドラゴンそのものにすら見える兜に着いた緑目の光りは、やはり泣いているように思

えた。

誰しもが言葉を出せない中でも、時間は続いてゆく。

そして——灰は復活した。

つんぎくような音がまず耳に届いた。鼓膜を直接揺らしたかのような衝撃に思わず耳を塞ぐ。

ライザーの瞳はもう悪魔のそれには見えない。

“明らかに”鳥のようなものへと変化し、そして徐々に体は炎に覆われてきている。フエニックスが生まれる。



観戦していた両家は額に汗を垂らし、ゲームエリアを見つめている。

中止には出来なかった。

理由はいくつかあった。

ひとつはここでゲームエリアを解放することは出来ないということ。

すれば、危険な“二匹”が飛び出していく可能性がある。

そして、ひとつはゲームエリアの“鍵”が内側にあるということだ。

レーティングゲームのフィールドはその時その時にと、術式を変えて行われる。その際にライザー及びリアスからの申し出があった。

それはレーティングゲームフィールドへの介入を眷属以外では絶対に認めないというものである。

ライザー側からすれば宝玉の件があるので途中介入によりグレモリー当主や魔王のサーゼクスが止めないとも限らない。故にこれを提案した。もちろん、事情を知るフェニックス家は快諾。

リアスにより言質をとっている『勝ち負け以外では口を出さない』という言によって、試合さえ終われば何とでも言えた。

しかし、魔王側が一方的に「いやいや、ちよつとまで」と中止を宣言し、ゲームへ介入してきた場合はやり直しとなる。

そうなつてはフェニックス家としてあの灰をもう一度使うことは出来そうもない。

そしてリアスとして赤龍帝の強さにより、駒のことを強く言われ、反則扱いされるのを嫌った。

故にこのゲームの勝者が内側からこのフィールドの術式を解くというルールが設けられたのである。

つまりは、

「グレイファイア」

「はい……」

「このフィールドに我々が介入し、彼らの暴走を止める場合はこのフィールドを破壊するしかないんだね？」

「……申し訳ありません。その通りでございます。このフィールドはいわゆる、内側に鍵が嚴重にかけられた金庫同然。我々が中に入ろうとするには……フィールド自体を壊さねばなりません」

「……それはまづいね。そうしてしまつてはあの二人がこの駒王学園——現世で殺し合う可能性がある。そうなれば……」

「おそらく町が死滅するかと」

「淡々と言わないでくれ」

サーゼクスはため息を吐き出し、こめかみを揉みほぐす。

「フェニックス卿……厄介なことをしてくれた。いや、こちらもちちらで大概なことはなっているが」

「しかし……赤龍帝のほうは理性らしきものが見受けられますね……。覇龍ではないのでしょうか」

「覇龍じゃないと思うよ。アレだつたらこんなフィールド、簡単に壊れてるさ。もつと

も、兵藤一誠君のような亜種では過去のデータなど役に立たない」

「でしたら、ライザー様のほうが——」

「ああ、そう……だね」

サーゼクスはチラリとフェニックス卿へ目をやった。

彼は青い顔をしながら、ライザーを見つめている。

サーゼクスは言う。

「……大方、精神的に弱いところのあるライザー君の心を盤石にするためのドーピング程度に考えていたんだ。しかしあの灰、本物と聞く」

「はい。ただ宿主がいなければならぬものですので、宝玉へと封じ込めたと聞き及んでいます……」

「まあ、詳しい事情など今はいいか。ただ……バカなことをした」

「そうですね。あの灰を使うなんて——」

「いや、そうじゃなくてね。数時間程度の“ただ”のゲームならまだよかったかもしれない。けれども——赤龍帝なんかの目の前にあの灰を出してしまえば伝説の崇高な魂がじつといると思うかい？」

ゲームエリアでは既に体が全て炎に覆われ、完全なる火の鳥と化したライザーが優雅に翼をはためかせていた。

「——起こしちゃいけないんだああいうのは。ねむらせたままに力をつかうのが正しい。それを、」

サーゼクスは一度言葉を区切り、そして言った。

「それを目覚めさせるようなことをするから——」



不快な奇声がフィールドを染める。

それに呼応するかのように赤龍帝も絶叫をあげた。

伝説を宿した者共は、互いの視線を交える。

そして奇しくも——その視線は双方共に宿主のものではない。

本能の支配する世界へと導かれていく。

「イツセー……？　もう、いいよ？　終わりにしよ、こんなゲーム。中止にしよ、ねえ……イツセー。帰ろ、帰ろうよ……」

「お兄様……」

リアスは普段の口調へ。

二人の声音は力なく二匹の威嚇から漏れるものにかき消される。

そして——フェニックスが動いた。

フェニックスが仰々しく偉大な翼を広げ、光速とも言える速度で炎を撒き散らしながら飛行する。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』

機械音が鳴り響き、目に見える形で兵藤一誠の力が倍加される。

そのたびに両籠手から発せられる緑光は視界を染め上げた。

それからはただの地獄絵図。

兵藤一誠の想い——暗い嘆きに苛まれたドライグ自身の龍としての本能と、心無きフェニックスの殺し合いが幕を開けた。

それは、やはり「本物」の心をなくした者同士のぶつかり合いだった。



悲劇。

龍の帝王と鳥の王がただ殺し合いを行う。無機質な声音。

あつたとしてもろくなものではない。

校舎を全て燃やし尽くすフェニックス。

宙に浮かぶ彼は太陽のように光りをまぶしていた。

『Blaster Blaster Blaster』

ただ力をあげ、威力をあげただけの砲撃が続く。

速度も破壊力も桁違いにあがっていた。しかし、——フェニックスを消すことなど出来るはずもなく。

ただ、それが続く。

「イツセー……やめてってば！　こんなの見たくないッ！」

リアスが叫ぶ。

しかし——彼は一目、彼女を一瞥するだけで前を向く。

彼自身、もうどうすればいいのかわからなかった。

ただ、本能に任せようとしてしまう。

ただの動物だ。



独りよがりだ。

ふざけるな。

残留思念の分際で。

“兵藤一誠”は、俺だと。俺だけだと叫んでいた。

混ざり合ったとか。

別の世界の俺とこの世界の俺が混ざり合ったとか。

そんなことはどうでもよかつた。

別の世界の俺の人格も、この世界であるべきだった俺の人格も、きっと。もうないのだから。

俺同士が混ざり合ったことで生まれた人格が、今の俺だとして。

だとして——。

過去の想いにこんなにも引つ張られるのが俺だとしたら。

そんなのは、嫌だ。

嫌だった。

阿鼻叫喚を生み出しているのが、俺自身。

それを見せられるのが嫌だ。

『嫌なんだろう、だったら認めろよ阿呆が』

声が響く。

何を、認めろと言うのだろうか。

『その癖を治せよ、相棒。お前は聞き過ぎて面白くない。——わかっているくせにな』
嘘だと言いたかった。

そんなのは知らない。

わかつてなどいない。

俺は。

いや、俺たちは——。

『くだらん、たかが人間のくせに。認めろ。お前は——二人の人格“兵藤一誠”を殺して出来上がった兵藤一誠。お前の名だろう』

やめてほしかったんだ。

本当は。

だからこそ、きつとどこかで拒んでいた。嫌がっていた。
認めたら、なんだか壊れそうで。

自分を殺して出来上がった俺を部長に見てくれだなんて——言えなかった。
偽物じゃないのか。

彼女に抱いた想いも、彼女を想った言葉も、借り物じゃないのかと。

俺であつて、俺じゃないのかと思えた。

だからあの夢は嫌いだつたんだろう。憶えていなくても嫌悪感でたくさんだ。

『何を言つてるんだこのバカは。全部が全部お前のことだろう。優しく言わないとダメなのか貴様は。——お前はお前だ、なんて言わんぞ俺は、恥ずかしい。目覚める準備をしておけ相棒。あんなおぞましい力などなくとも、我ら本来の力を見せつけよう。——フェニックスに反撃の狼煙をあげる』

口元を恐ろしく裂けさせたドライグはそう言つた。

見える先にはフェニックスに吹き飛ばされた自身の姿が見える。

そしてリアス部長がフェニックスから庇うように俺を抱きしめていた。もうやめると叫びながら。

『この夢もやがては心臓に喰われる。ならば今のうちに言つておこう。——過去も残留思念も現世も何もかもがお前だ。赦せ、己を。認めろ、自分を。お前は赤龍帝だ、挫けることなど許さない』

ドライグはそれから俺の首根っこを口で啜えると、その大きな背中へと乗せて、翼を広げる。

そして、首だけをこちらへ向けて言つた。

『中身のない者へ届くのは、想いの力のみ。我らはそれだけの想いで結ばれているだろ

う？ この絆、決して離さない。ありがたく思え、赤龍帝ドライグからの最大の誉め言葉だ。受け取れ——兵藤一誠』

どこか、ただそんな言葉だけで嵌まらないピースがカチリと合ったような気がした。

そして——死で停まっていた歯車が動き出した。

ありがとう、と伝える。

どこまでも優しい彼に。

そして、想ってくれるドラゴンに。

だが、ドライグは鼻を鳴らし、そっぽを向いた。そして言う。

『——どんな深層意識にしようとも引きずりあげてやると約束した。それだけだよ相棒』

俺は想う。

どこまでも赤龍帝ドライグは、かっこいい。

そんなことを、まどろみの意識の中で。



「——もう止めてよ……ッ！ やめてイッセー——ッッ!!」

目が覚めた時、夢も何もかも忘れて。

そんな声を聞きながら、俺は部長に抱きしめられていたんだ。

そして——“夢”からはおそらく。

醒めるのだろう。

臆気な意識の中で、そう思った。



暖かい。

鎧越しであろうとも伝わる、この暖かさは何だろうか。ぼんやりとした頭の中で考える。

目の前で、おれを抱き締めている人がいたんだ。

ただ、こんな自分勝手に暴走していたバカな男を、自身が盾となつて庇っている女の人がいる。

——彼女は、誰だっけ。

働かない頭の中で、体がひどく痛んだ。そして、そのダメな思考を吹き飛ばす何かが始まった。

暴走していた一誠へ、強烈な打撃が襲う。

「え……」

紅の髪。ストロベリーブロンドよりもより紅い血のような。

そう、血のような。

いつか、暁の中で彼女を見たような気がする。

何もかも変わらない見た目の「別の」彼女を。

何故、今、彼女がわからなかったのだろう。

何故、彼女のことか。

——リアスがいる。

そして物凄く悲しそうな顔を貼り付けながら、泣いていた。

彼女の、右腕が左肩へと流れている。手は張り手。

そして——頬の痛み。

鎧に囲われたこの顔に届く痛みは心か。

泣いている。

嗚咽している。

王であるのに、兵士なんかを庇っていて——どうして、そこまで人を大切に出来るの
だろう。

教えて下さい、部長。

——その涙は、どんな涙ですか。

悔しいのですか。

それならば、敵を倒しましょう。

体が辛いのでしょうか。

ならば戦いを今すぐに終わらせませう。

彼との婚約がそこまで嫌ですか。

俺だって嫌だ。

何度殴られたとしても、あなたを救ったでしょう？

婚約会場に乗り込み、助けたはずだ。

「その目、止めなさい」

泣かないでください。

二度と見たくはない。

その、涙を、血を流す姿を見たくはない。

痛いから。

あなたの腕が、俺を支える腕がストーンと落ちたあの瞬間——あの感触が消えない。

もう、「リアス」の死ぬところなんか——知りたくない。

嫌だ、嫌なんだ。

「やめろって——」

ただ、俺はあなたのために、動きたい。残された俺の残像。そして、この消えない心は、後悔だけを映していて。

「——わかんないのかあ——」

……映して、いたのか。

彼女の平手打ちは、再度心に届く。そして、冷たさの中で、終わりのドラマを残した
“夢”にさえ、ひびをいれる。

“終わり”がくるのだろうか。

夢の、終わりが。

「——誰を見てるの。ねえ、私に教えてよ、誰を見てるの。いるよ、ここに。私は、いるんだよ。——リアス・グレモリーは、あなたの主はここに確かにいるんだよ？ イツセー」

咆哮。

悪魔の咆哮。

嘆きの歌は、思考から外される。

優しく紡がれた言葉はどんな叫びより耳に響いた。

触れていた。

彼女に今、触れていた。

夢よ、想いよ。

心臓——彼女の想いを、食べるな。受け止めろ。

「——言ってくれたよね。私のために神様だつて倒すつて。嬉しかったよ、本当に嬉しかった。イツセー、自分を、私を見失わないで。どこか遠くへ行つちやうようなそんな力を見せないで」

ああ、彼女の涙の理由は、全て違うじゃないか。

——泣かせていたのは。

そう、リアスを泣かせていたのは……『俺』、だった。

「私を映して——。瞳に映して。そんな目をやめて。私は『イツセー』をよく見ているよ。だから、『私』のことを、見つけて。とても暗い中にいてもね、あなたの心で私を探して。そんなひとりよがりじゃなくて。——私はあなたの全てを愛してあげる。」

……辛いなら、頭を撫でながら話を聞いてあげるから」

あなたはどこまでもそういう人だった。

何故、ここまで優しいのだろう。

世界を越えて、別のあなたを見つけた。

俺の意識は、そして、まもなく薄れてしまう。壊れる想いは、壊れないままに、かき消えてしまおうだろう。

心臓が、俺の想いを吸収し、龍帝が増加した。

涙が出る。

代わりなどいない。

あなたはあなただ。

再び、触れて。

二度、触れて。

肌を知った。温もりを思った。

どこまでも、愚王な人だ。

王が、兵士を庇うんじゃないよ。

『イツセー』という、呪いをかけて、星の先まであなたを想った。

あなたが、そういう人だから、『俺』はあなたの兵士を降りられない。

辞めることができない。

だから、今だけ。刹那な、この瞬間を――、

彼女のために、生きさせて。

混ざり合った全ての自分から、今リアス・グレモリーのために。

もう一度、彼女の兵士は立ち上がる。かつて、王を守りきれなかった真の忠信は、ここで再び炎を灯した。王の真理を天に掲げし、赤き龍。

「——お願い、目を覚まして。こんな姿になってまで私のために戦わなくていいから。——一緒に」

リアスが顔を近づけた。

鎧の兜に熱が伝わる。

二人は繋がりが合っている。

きつと、今もどこかの世界で手を繋いでいるのかもしれない。

帝王になりし、少年は。

紅髪の姫によるキスで長い夢から覚める。

運命は始まりを見せた。

『
』
過去はあった。

夢にこびり付く心の鎖は砕け散る。

兵藤一誠は、無限の希望と、不滅の夢を抱いて“赤龍帝”の王道を往く。

「大丈夫つすよ、部長。俺、あなたを必ず助けますから。最強の兵士になります。何度だって、いつだって。俺には、リアス部長が一番ですから——。一番、好きです」

栄える。

王の帝冠を、天へと高々と掲げ。

紅蓮の王者は、灼熱の業火を心に宿し、ただ主のために。

牙を剥いた。

「部長は、威風堂々と紅の髪を揺らしていなきやいけない」

そうだ。

そうなんだ。

やっと、全てがわかった気がした。

俺が、何で夢を見るのか。見せられているのか。

そして——あの人が好きなのか。

彼は、この世界の本当の彼ではない。混ざり合い、人格の消えた存在。それでも、想

いは強く、確かな奇跡を起こす。

その“心”は、“今”の一誠へと溶けていき、さらに混ざるのだろう。

イツセーであり、一誠。

同質の御霊が共鳴する。

世界を跨ぎ、全てを変えようとする赤い龍の宿主は、ここで本当の“自分”を手に入

れるのだろう。

今は——ひとりのお姫様を救う、兵士となろう。

世界は、人を苦しめる。

にやりと、終わりのエピソードを描いたまま、筆をとらずに眺めている。もかく姿を、見ている。

虎の檻に、投げ込まれた兎の結末を知りながらも、残酷に見つめている。

世界の決定。

滅び。悲しみ。終わり。そして、消滅。

運命は決められている。

だが、これは予想していたか？

世界のお前よ、想像出来ていたか？

運命は、僅かにずれ始めている。

歯車は、その歯をここで変えたぞ。車輪を入れ替えた。

それを知るといい。

人を舐めるな。

龍で遊ぶな。

世界を変えるということは、世界一つを殺すということと何が違うか。

なればこそ、貴様（世界）から殺そう。

どこの世界も、同じ道を歩むと思うなよ。

お前が予想出来なかつた結末は、お前すらも呑み込んだ運命は——ここにいます。だから、この時を、刹那を。

——これこそを。

やつと“ひとり”となつた、赤い龍帝の本来の帰還を——、

——“運命”のせいになよう。

『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

帰還

他人の心を見てしまうのは、痛いことが多かった。

人の心にいつまでもシミのように残っているものは嫌な記憶で。

泣いているものや、苦しんでいるものがとても多い。

それでも、俺が、その記憶を垣間見てるその間、やれることはなく。

過去の傷跡に干渉することは出来ない。

その様をじっと見て、目を背けることも出来ずにいる。

そして、流れこんでくるそれらの感情は俺の心に入り込み、自身も同じような痛みを

知ってしまうのだ。

しかし――、

『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

少なくとも自分の夢には片を付けたようだ。



音声は猛るように叫びを上げ、存在の変化を促し始める。

歪な鎧も不吉な呪いの真似事もなにもかもを消していけばそれでいいのだ。

きれいなモノを持っているのだから、強い気持ちをもらったのだから、ただ戻して少し強めればいい。

誰にも劣らない心を前の自分から今の自分に溶けさせることに成功したのであれば、あとは嫌なところを消して、本当の力を再現してみようか。そうすれば、たぶん、いや、きつと。

うまくいくように、仕組まれていたはずだ。

『——俺は真の伝説としてもう一度、生き返って——』

ドライグが何かを自身に戒めるように言い聞かせていた。

真の伝説とは、皮肉なのだろうか。目の前でただ動物的につんぎくような咆哮を上げ続ける火の鳥に対しての、皮肉なのか。

おまえはただの伝説だと、言いたいのか。

自分とは価値が違うのだと。

『D d r a i g × D d r a i g——』

二つの籠手何かを砕いたような音と共に、緑一色に世界を満たしていった。そこには紅もなく、金もなく、そして炎もなく。

どんな不純物も許さないように、純粹な色をフィールドに満たしていく。これ以上ない世界観をリアスとレイヴェルは見せつけられたように感じた。

「……………」

だんまり。

リアスは見ただことないものを見せられたときに人は何もいえなくなるものかと、思ったのだった。

「イツセー……さん」

アーシアは手を合わせている。目には何も映さずにじつと、脳裏で祈禱していた。合わされた手にはまる二つの指輪。その片方——金色のほうは微笑むように、光っていた気がする。

『D r a i g × D d r a i g——』

音声満たされるたびに、籠手から噴き出す紅蓮の炎。

それはたぶん、ドライグの吐息……なようが気がする。

一誠は笑みで口が裂けそうになるのを必死に抑えていた。そうしなければ、不謹慎にも笑ってしまいそう。こんな戦場で笑いをこぼすなんて、どうかしている。

しかし、伝わる愉快さは生きてきておそらく最大の数字を計測するだろう。ドライグが、ここまで——

『道具として生かされて、初めて。初めて——本当に存在していると、思えた——』
楽しんでる。

伝説が通るぞ。

龍が通る。赤龍帝がすべて力で道をこじ開ける。

『Welsh Dragon — Return to World』

今だけ夢幻の心臓に、楽しいものを詰め込んでみようか。

そうすれば、

』——』

あんなフェニックスなんて、壊すのにいくらでもつりがくる。

.....



夏風香り始める初夏の日にち、晴れた日の早朝。

紫藤イリナは質素なベッドの上で身をよじり、目覚ましをとめた。

眠気眼なその瞳をこしごしとこすり、同室同僚である青髪のゼノヴィアを横目に掛け

布団をはいだ。

そして、普段は二つに結っている鮮やかな茶色の髪をストレートに降ろしている。

彼女はそのまま部屋からでる際に、自身の少ない手持ちのバツクからポーチを取り出し洗面所へと向かった。

重かった足取りも一秒ごとに軽やかになり始め、洗面所へと着いたことには普段と変わりなくなっていた。

彼女はこれも鍛練の成果なのだろうかと、日常の行いにどこか誇らしく思い、鼻歌を歌いながらポーチから取り出した櫛で髪をときだした。

それが一通り終わったイリナは、顔を洗い、歯を磨く。そして、戦士として、なければならぬオシヤレの小さなリボンを取り出した。

それは普通に髪を纏めるためのゴムにリボンが裝飾された縁日の景品にでもありそうだが、ごく平凡なものだ。そのゴムの部分を口に甘噛みするかのように挟み、クリツとした大きな瞳で鏡を見やる。そして、左右順番ずつ、髪を結っていく。

完成した姿は、血の匂いなど微塵も感じさせない女の子だ。

その純白の綺麗な肌も然り、長い睫毛の下から覗く瞳も然り、そして特に彼女の容姿を引き立てるのはその表情だ。

まるで、これからデートでもするからのような女子の面。

キラキラとした笑顔は、幾人もの男性を振り向かせる極上のものとなっている。

恋は女を美しくする、とは。

彼女が体現したひとつの言葉だ。

彼女はそれをつけた己を見つめながら、どこかニタニタと笑んでいる。最早、不審者の如きだ。

それにも飽きたのか、イリナはくるつと体を反転させるとタッタッタと足音を響かせ、先刻まで寝ていた部屋のドアを開ける。

そして、開口一番こう言った。

「ゼノヴィア起きなさい！ 行くわよ、ニッポンへ！」



『——ライザー様の、リタイアを確認しました』

涙のほくろ

「——これからしばらく身内以外との連絡魔法陣によるやりとりを禁止にします」

リアスは部屋にて、眷属の皆を見渡しながら口にする。神妙な空気の中告げられたそれは嫌な重みを感じさせ、また頭を痛めてしまいそうな気持ちを運んできた。

全員が眉根を寄せながら頷くのは、それ相応に理由があるのだろう。

朱乃が言う。

「……私たちはリタイアしてしばらくは寝ていましたのでリアルタイムではありませんが……あれを見てしまえば、ねえ？」

「そうですね……しかしなぜ外に漏れたのでしょうか」

朱乃は頬に手を当て首を傾げる。そして隣に居合わせた祐人を見やる。

祐人も祐人で同意の動作をしたのちにリアスに問う。

リアスは首を振りながらため息を吐き、横にあったソファーに腰を降ろした。

「ぜんぜん分からないの」

「悪魔ではないのでしょうか？」

「分からないけれど……その可能性は大いにあるわ」

それぞれの種族に送りつけられた画像——。そこには真つ赤な龍が巨軀とまではないかないまでも、力強い鱗のような鎧を纏い、咆哮している。

瞳からは溢れ出すように緑光が漏れだし、知識がなければこれが赤龍帝だと思わないはずだ。

ましてや——神器による果てだと思えない。

これはこれで、ひとつの生き物として存在していると言える。そういった全貌なのだ。

「イツセー」

「……はあ」

リアスが一誠を呼ぶがその返事はなんだか気のない。

どう対処すればいいのかが分からないのだろうか。この数日ではついに一誠自身をスカウトしにくる悪魔が増えていたのだ。

それも今では悪魔側で（無意味の可能性も考慮しながら）箝口令をしき、なおサーゼクス魔王陣営が貴族を宥めるために奔放している。

「だめだ、呆けてる……」

一誠は疲れたように目をこすり、欠伸を繰り返す。寝不足なのか目が赤い。

朱乃が一誠を抱きしめ言った。

「寝ちやいなさいな。部長、私は彼を家まで送つてきますわ」

「……………」

「部長？」

「……………すぐ帰りなさいよ」

リアスはソファアの肘掛けをトントン指で鳴らしながら言う。それを見た朱乃は妖艶な笑みを浮かべ、厭らしく指を口元に添えた。

「あらあら。いいじゃないですか部長は。お家に帰れば今では一誠君と同じ屋根の下でおねんね出来ますもの。——赤龍帝に興味があるのは何も貴族だけではなくてよ？」

うふふ、と笑う朱乃には毎度疲れさせられる。しかし、からかいだと分かっているにもかかわらず反応してしまうのは長い付き合いの性だろうか。

実際にリアスは現在、兵藤宅に居候の身である。

具体的に言つてしまうと乙女心も大いに関与してしまいが、表向きとしては主のいない間に一誠を取り込もうとする不屈きモノを対策するためのもの。

決して不純な理由ではないと本人は胸を張るのだろう。

さんざんからかい終えたのか、朱乃は半分寝ている一誠の口元をハンカチで拭つてやると、背中に負ぶさり魔法陣を展開する。

そして、時間とともにその姿を溶け込めますかのように消した。行き先はもちろん兵藤

宅である。

二人が減った部内は案外それだけでも閑散としてしまう。それだけひとりひとり存在の影を濃くしているという証でもあるのだ。

リアスは、はあつ……と息を吐くと背中を預ける。祐人や小猫、そしてアーシアも思っている行動を始める。その雰囲気自体はおそらくそこらの部活と大差はなかった。

それくらいに飽和とした雰囲気の流れている。ライザーというひとつの山を越えたのだ。これくらいの休憩はしばらくの間してもバチは当たらないはずだ。まあ、悪魔にバチという概念が存在するのか疑問点はあるわけだが。

「それにしても……」

リアスが独り言のように呟く。その声はほとんど聞くことはできない。

しかし、彼らは悪魔だった。人よりも五感に自信があるのだ。

ピクリと反応する他三人。

リアスが虚空を見つめて言った。

「——『ドライブグ本体』に成ろうとしている——ね……」



「イツセー君」

「なんかすみません、朱乃さん」

「いいですよ——さあ、ここへ」

兵藤家の玄関に飛ばされた二人は、そのまま家主の母に軽く声をかけてから自室へと向かう。無論、一誠の、である。

母は少し不思議そうな目線をくれたが、それもそのはず。朱乃と兵藤母は初対面である。先日、リアスが居候を始めた。——それに続く年上風な美人に支えられている息子を見て、思うところがなければ放任主義が過ぎるだろう。

それでも、朱乃の「同じ部活、三年生の姫島と申します」との見事な腰曲げによる大和撫子風な挨拶にいくらか押された母は、「あ……どうも」といった空気の萎むような返ししかできなかった。

やがて、二人は——朱乃がまるで先導するかのよう——自室の扉を開けて、ベッドに腰を下ろした。

枕側に下ろされた一誠を、真横で見やる朱乃という図。

眠気眼であった一誠は、瞬時にこの状況に目を覚ます。というより、色香を本能的に感じ取った。朱乃の滲み出すような色気に、日本の一人部屋というのは、少し狭すぎる。充滿するのに時間はさほどいらぬようだった。

「うふふ」

「……………えっと」

帰らないんですか？ とは訊けないだろう、さすがに。そこは常識として。

微笑むように笑う先輩女性を隣に、ただその目の前に居座る自分に、一誠は戸惑う。

一誠が苦笑いを浮かべて数秒、朱乃が一誠の手を包むように撫でだした。指一本一本が這うように動く。何をしても、女くさかった。

「……………」

しばし、黙る。

ドライグは寝ている。役には立たない。というより、ドラゴンなどこの場合で役に立つものか。

朱乃が口をゆつくりと開いた。

「ありがと、イツセー君」

今度はぎゅつと握る。しかし、痛さはない。これ以上ないくらいに、ぎゅつと、そして圧力なしで握ってくる。

一誠は早まる心臓の波を均す。

朱乃の目に見える慈愛の前では、いやらしきなど皆無で。

「リアスを、ありがとうございます」

彼女は頭を下げた。

一誠は「……いえ」とだけ、言う。

「俺も——本当によかったと思つてます」

「……ほんとに、よかつた」

朱乃は、やさしく笑つた。

このまま、あのまま、ライザーとの婚約が決定していたら、きっと、眷属はおかしくなつていたら、全員が感じている。それぞれに、ライザーにもそれぞれに事情があるのは理解できるけれど、感情論として許すことはできない。

世界は想いの力で運営されている。ならば、感情論はきつとこの世界では、正しいのだ。

この世界では。

「イツセー君」

「はい」

居直つた朱乃が一転して、少し固い表情を見せた。

「——あの、禁手は……あなたは説明できますか？」

一誠が見せたあの禁手。

悪魔界——いや、世界に知られた（詳しくはわからないが、おそらくは）力は、悪魔

界では、二つの籠手による亜種の成り方ではないかと、言われている。

二つあるぶん、よりドライブに近い形をとれるのではないかと、そう認識されている。ましてや、サーゼクス自身が目撃したことだ。ドライブが宿主の身体を動かすような、そんな行動を明確に焼き付けた。

そして、心臓の光り。

明らかかな呼応。

サーゼクスは、発表せずとも、内心もしかして、ドライブの心臓が宿主に現れているのではないかとすら、思案し始めていた。

だとすれば、早めに抑えなければ、ドライブそのものが宿主になるのではないかまで、まさかと思いつながら、やはり脳裏に過ぎる思考に不安をなくすことはできなかった。

ただ、ドライブが『兵藤一誠』に見せる執着は、けして肉体ではなく、一誠個人に向いていると確信している。

神器から解放されつつある、ドライブの御霊が、故意的に宿主を喰らおうとしているわけではないと、そういうことだった。

「……がつつり、言えるわけじゃないです」

世界が、拒む。彼を拒む。

彼がいなければ、間違いなくシナリオは終焉だけとなるのに。

余計な種が植えられて、やがて芽を出し始めた。

それを許すことは基本的でない。

だからこそ、一誠から奪わなければいけなかった。

だって、ないんだもの。ないはずのものを、一人だけ持っているなんて、おかしいよと、屁理屈だけを丁寧にも並べては、精神的なものから、何かを切り離そうとする。

けれど、一誠はどうかその端を掴んで、破れはしたけれど、断片だけは手元に残した。

これは、その切れ端のノートのような、そんな話である。

「ドライグが、二体」

一誠は指を二本にする。

「——らしい、かもしれない……です。いや、意味不明か」

「……………」

「だから、籠手も二つ」

「……赤龍帝というのは、世界に二匹いたと、そういうことですか？」

絶対に違うと思いつながらも、しかしそれ以外に思いつかなかつた朱乃は疑問を頭部に浮かばせながら質問する。

「違うんですが……えつとですね、ドライグの存在感が二倍らしいです、ね。はい、ドラ

イグいわくの話ですが……」

「じゃあ、それは亜種として、何らかの作用があったとして、片を付けるほかありませんが——その、心臓は、人のもの、いや悪魔……というより人型の生物のものではありませんよね」

「……夢って、見ますか」

「夢？」

「眠るときに、夢を朱乃さんは見ますか」

一誠は、ただ真つ直ぐに朱乃を見た。そうして、訊く。

朱乃は何の意味が言外に存在するのか、どうにも計りかねながら答えた。

「はい、ときどき——ですけれど」

「その夢は、やつぱり夢ですよね」

「あの……ごめんなさい。先ほどから、意味が……」

「俺のは、夢の中でみる、現実でした」

「それって——」と、そう言いかけた朱乃を遮り、一誠は続けた。

「予知夢とか、そうじゃなくて。たぶん、どこかで本当に起こったものなんだと思います。きつと」

「……現在から過去に向かって起こった、いわゆる自身の経験ではなくて、ですか？」

「そうです、たぶんですが……」

「でも……それじゃあ、まるで他人の過去か、どこかの、それこそ歴史を俯瞰するようなものになってしまいます」

「歴史は大げさですけどね。もしかしたら前世なんてやつかもな、つてドライグが言うていました」

「……生まれ変わってなお、帝王に憑かれた……そうだと……それって、宝くじで億を百回連続して当てることよりも低そうですわね」

「でも……そうだったら、なんかカッコいいですよ」

二人して笑う。空気はいつの間にか緩和していた。あくまで、憶測の話。例え、すべてを記憶していたとしても、証明などハナから不可能。なぜなら、世界的にありえないのだから。

世界の中で息をするものに、その答えを組み立てられることがあれば、神様だろう。しかし、神はいない。

この世界で——赤と白が殺した。

一誠の心臓が鼓動する。

何度も何度も、する。そして、いろいろな想いをなお、食べ続ける。貯める。溜める。夢を、溜めていた。

「そういえば」そう言って、朱乃が言う。もう心臓のことはいいらしい。たぶん、聞いても明確な答えはないと判断した。

よくよく考えれば、不明点は多いものの、一誠は裏の世界を知り得て、日にちはアシアよりもある意味少ない。

「イツセー君って、少しエッチになりました？」

「はい？」

「……私のこと、少し、そういうことかと思つて、見たのでしょう？」

「マジでそんな目をしてました!？」

驚愕——ではあるものの、趣味趣向が多少変化したのは、わかる。

特に、胸。触りたくなる。

「してたしてた——してみますか？」

「……………」

生唾を飲み込む。

朱乃は肢体をよじり、手を一誠の太ももに乗せて、体重をかけてくる。やがて、その指先はつつつ……と一誠の顎下をなで上げた。

ぞわりと背筋が疼く。

股間にリーダーを確認。

「……もつと、誠実かと思いましたがのに、残念ですわ」

「や、やめましょう！　なんか、後戻りできなくなりますって！」

「ドラゴンって性欲が凄いと耳にしますが、はて、どうなんですか？」

「しつたこつちやねえですよ！」

「……帝王、夜の帝王」

「……いや、別に面白くないですよ」

何故だか、萎えたよ。

よかつたと、胸を撫で下ろす。すつごい厭らしいなかで、ふとんが吹っ飛ぶとロクに大差ないレベルのギャグをかまされる。

こんなこと言う人だと思つてなかつた。

「ねえ、少しくらい——」

「少しくらい、黙らつしやいな。副部长さん」

紅の髪がバサリと朱乃の黒髪を染める。

それは、血のように見えた。

「……あらあら、部長。なにしに來たのかしら」

「キレそうになつてきたわ」

「では、よそでどうぞ。ここは他人様のお家なので」

「じゃあ、他人様のお家なので、帰りましょ、朱乃」

「いえいえ」

「へえ」

「なにかしら」

「なんだと思うのかしら」

「ごめんなさい、わからないわ」

不穏な空気になってきた。一誠は間に入る。

「あ、あの部長！ ご用事は……」

「連絡よ」

朱乃を睨んだまま、リアスは告げる。

「明日——天界側から、エクソシストがこの町に来るわ」



リアスから簡潔に告げられた、言葉。

翌日の放課後の時間帯に、エクソシストがこの町の駒王学園へと足を入れる。

緊急を要するらしかった。

そして——赤龍帝がその場に存在する。そのことも、大きいようだった。今、一誠への呼び名は種により変化を見せる。

悪魔の多くは、『敵にして、最大の味方』と呼んでいるらしい。

この先——つまりは後百年も育てれば、最高の兵器となると思う悪魔はきつと多かった。自身の長、及び敵の、天界の長を殺した存在が今回は味方に位置している。

暴走させたくないのであれば、いつか未来に「どうせ起きるだろう」と思われている戦争（千年後か、それ以降かは知らないが）に置いて、最大の力となりうる。さらに、抑止力にもなり、戦争自体を起こさせないようにすることも、できると期待されている。

魔王が抑えているゆえか、民は完全な味方だと、思い込んでいる。無論、外れてはいないが。

そして、天界は——

「本物の神殺しに生まれ変わろうとする——異端者……いや、悪魔か。ぜひ、見てみたい」

「あれ、赤龍帝の復活じゃなかった？」

「そうだったか？ 赤龍帝の脱皮じゃ——」

「それ、ただの蛇じゃん」

とくに、決まっていらないらしい。



「……エクソシストか」

俯いた金色の髪に隠れる、涙のようなホクロ。それは、暗示のようだった。

いつまでも——あのとときの涙を忘れるなっていう、いわゆるひとつの……。

「龍の因子は、持っているのだろうか。持っているならば——」

手元に生み出される黒と主よりも濃い紅の色は、竜巻のように巻きながら、痛みを伝える。

「……………」

悪いけど——。

この日は、初夏の気温だというのに、やたら冷えたそうさ。

優しいバカは好きだよ。

翌日はあつという間にやってきた。気づけば——といった具合で、だ。時は駆け足で消えていく。その代わりにまた、駆け足で消えたぶん、時間がやってくるわけだが——。

……コン、コン。

静謐とした部内に木を数度叩く音——ノック音が渡った。

それを受けてリアスは、その場にいる面子に目配せをしたのち、声をかける。

「どうぞ、入りなさい」

「では、失礼するよ」

「しまーす」

リアスの固い声音とはまた違い、柔らかな声質が耳に届いてきた。少しばかり、拍子抜けである。リアスは魔王の妹であるが、天界の者などと顔を合わせる機会はあるようで、実は初めてであった。

そもそも冥界から出てきたのも、ここ数年の話である。

「まずは名を名乗ろう。私はゼノヴィアだ」

「紫藤イリナです」

青髪に一筋の緑を沿わせるのが、ゼノヴィア。その整った容姿からは鋭い針のような雰囲気を感じさせる。

一方、紫藤イリナはラフそうな、見かけのみならば普通の女子高生のそれ以下でも以上でもないといった感じ。両房のツインテールに結ばれた使い込まれたリボンがより庶民的に思わせる。

「——じゃあ早速」

リアスは話を進める。早めはやめに終わらしたい。何で私が——という気持ちもあつた。こんな政治にすら関わりそうなこと、高校生にさせるなよとすら思っている。

上同士で連絡を取り合つて、それを自分に伝えた方が絶対に面倒にならないのに。

急かそうとするリアスに、ゼノヴィアが言う。

「茶くらい、欲しいものだな」

「……………」

……………うっぜ、一言出そうになつて、それを胃の底まで飲み込み、朱乃に目配せをした。朱乃は頷くと、茶を魔法で沸かし、部屋の隅にある棚から菓子を取り出して、テーブルに出した。

「……………へえ、悪魔なのに、人間並みの茶を入れるとは大したものだ」

「……………ねえ、あなた、死ぬほど苛つくのだけけど」

「悪い、聞こえなかった。なんだ？ もつとはつきり大きな声で言え。魔王の妹なのだろう？ こちらは下っ端のエクソシストだぞ」

「……………」

「黙るな、悪魔のくせに」

リアスの首筋を朱乃が見えない所から思い切りつねっていないければ、おそらく消滅の弾を放っていた。うざい、なんなんだよこいつは。そう思わずにいられない。

こいつ、絶対、初めて行った友人の家で平気で大をできる人間だ。

そして、トイレットペーパーをぐるんぐるんに使う。

なんとか、そんな設定にして、可哀想だと憐れむことに成功する。

「わ、悪気はないのよ？ ねえゼノヴィア？」

「なにが。私の本音だが」

「ゼノヴィアは黙りなさい！」

イリナがゼノヴィアの頭部をひっぱたく。どうしようもないやつだ、こいつ。そう思った。

しかし、ゼノヴィアはイリナを一瞬で裏切る。

「で、赤龍帝は？」

「……………いいから目的を話して」

「いや、見たい」

「……なんなの。そろそろ来るわよ。あの二人体育だったから」

「ほう。それは赤龍帝が籠手で倍加しながら行うのか？」

「バカなの？ んなわけないでしょ」

「なぜだ？」

「……黙ってよ、もう」

そもそも体育というのをはつきり理解しているのかもわからない。

施設育ちのゼノヴィアは戦闘訓練と、信仰の学しか生きてきてこなしていない人種だ。イリナと違い、根っからの天然素材。そして、外国育ち。イリナのようにわずかも一般人の通う学校というものを知り得ない生き物なのだ。

「早く赤龍帝を出さないと、怒るぞ」

「基地外なんじゃないの彼女。ね、紫藤さん？」

「……どうかしら。エクソシスト、頭おかしくなりやすいから」

イリナは苦笑した。

そうしているうちに足音が慌ただしく聞こえてくる。そして、扉が勢いよく開かれた。

「——遅れました！」

「お、お待たせしました！」

一誠とアーシアが駆け足で室内に入り込んできた。それを見て——イリナの苦笑が凍った。

それを見た祐人が——剣を作り出す。殺気がした。

「……君、名前は？」

「え？ ひよ——……あの、もしかして紫藤イリナさんですか？」

一誠が反射的に名乗りそうになったところで俯き気味のイリナを捉えた。

髪型——一致。変わっていない。

リボン——一致。覚えている。自分があげたやつ、だった気がする。

雰囲気、声、輪郭——似ている。

「ねえ、名前、兵藤一誠、じゃないよね」

「……いや、そうだけど」

「そっかア……へえ。ゼノヴィア」

イリナがゼノヴィアの方へと振り向き、呼んだ。

ゼノヴィアは首を振る。

「ダメだよ、イリナ」

「なにが」

「それ以上は、種族的軋轢を濃くする」

「エクソシストは、悪魔を殺すんでしよう」

「——やるのならば、私は君を殺すが、いいかい？」

ゼノヴィアが凄んだ。

事を起こすのならば、処分しなければならぬ。それも仕事となる。

一介のエクソシストが、魔王の妹に齒を向けるのは、戦争の火種にしかならない。

ゼノヴィアは理解しているのだ。そういつたことを。

イリナは大きく息を吐いた。

「……………ふう……………」

「それでいい」

「貸しだなんて思わないで」

「思っでないよ、そんなことは」

「そう。ね、イツセー君……………」

リアスは手を宙に浮かばせたまま、なにがなんだかといった様子で固まっている。そして、「いい加減痛いじゃない！」と未だに悪魔の握力でつねり続けている朱乃の手を払った。

イリナは一誠の目の前に立った。

「帰ろ」

「……どこに、だよ」

「人間に」

その言葉に部内は騒然とした。



「……なにいつているのか、わからないな」

「きつと天界の技術を用いればどうにかなるから。イツセイ君が赤龍帝なんでしょ？」

赤龍帝は嫌われているけど、他の種に所有されているよりはずっといいって主も言うよ
ね」

「おい、イリナ」

「ゼノヴィアは黙って。ね、そうしようよ。あの紅に騙されたんだって」

イリナの言葉は続いた。それを呆然として聞くのは悪魔。ゼノヴィアは呆れている。

一誠はひどく悲しそうな顔をした。

「おまえ——」

「天界で保護してもらおう？　ね、イツセイ君」

イリナはいつの間にか、一誠の衣服を強く掴んでいた。

そう言えば、遙か昔に彼の裾を掴まんで出かけたなんてことを思い出す。このために訓練を耐えてきた。最初こそ、適性があるのかなんとかでエクソシストにされたわけだが、それでも。

途中からは、いつしか日本を職場にして、一誠の傍にいたいと思っていた。危険な存在を知った今だから、彼を守ろうと思っていたのに。十年近く、離れても、いやむしろ、それだけ離れていたから想いはより募ったのに。

ただの一般人の彼が世界を騒がす赤龍帝で、そして——自分たちと“一生”相容れない悪魔だなんて——ふざけんな。

オシャレも、遊びも、ご馳走も、学校も、友人も、この空白の年月も——全部エクソシストに注いで、毎日彼からもらったリボンをつけることが、少し楽しい、そんな感じで、情けないほど純に生きてきたのに。

殲滅対象の悪魔になっているなんて、ちよつと運命が意地悪過ぎないか。

「そうしょっ！」

「待てっつてば」

「そうしてよー！」

「落ち着け、イリナー！」

「なんでよ、なんで！」

イリナはそのままズルリと、地に落ちて、内股のまま泣き始めた。

「意味わかんないっ！　なんでイツセー君が！」

「い、イリナ……」

「触らないで！　わかんない！　わかんない！　わかんない！　なんで悪魔なんかになつてんのよオ！」

リアスは目が点。いや、なんなら一誠を除くみんながそう。

イリナはびえーんと泣き続け、やがてヒクヒクし出す。

小猫がなぜか、彼女の頭を撫でていた。そして、一誠を強く睨む。とりあえず、男は糞、そう口にしていた。意味わからないよ。

ゼノヴィアがイリナの頭を小突いた。

「ま、イリナ。人は十年すれば変わる。進化するんだよ」

「……うぐっ……十年で進化したら、人類は第二の地球でバカンスしてるわ」

「そういう意味じゃないのだが……まあ、いい。とりあえず、どつか座つてろ。おまえは邪魔だ」

「……ひど」

「くない。邪魔すぎる。消えろ」

「ひどすぎっ！ 死ねアホ！」

「失せろカス」

「くっくっ！」

イリナは涙を滲ませた赤い目でゼノヴィアを精一杯睨みつけると、彼女のスネを蹴つてから、部屋の端っこへと移動した。小猫がお供をする。

ゼノヴィアはそれを無表情で見ていたが、やがて何かに気がつき、イリナに接近して頭部に打撃を食らわせた。

「い……………つたあーい！ あにすんのよー！」

「あれ、これでおあいこだよな？ 私は数え間違えたか？」

「合ってるけど……………なんでわざわざ」

「不平等だろう。一回攻撃したのなら、私にも攻撃する権利がある」

「まじもう……………」

「なんだ？」

「……………」

無駄と判断したのか、イリナはそれから口を噤み、黙った。ゼノヴィアはしきりに首を捻りながら、リアスの前へと再び。

リアスは深く深く溜め息をつく。

ゼノヴィアは言った。

「茶が冷めた」



「……うまいなあ」

「話してよさつさと……」

「よし、本題だ。……なんだか長すぎてイライラするな。こんな予定ではなかったのだ
が」

リアスはもちろん、何も言わない。その代わりに、死ねばいいと思っている。

「実はな、エクスカリバーが盗まれたそうだ」

ふーん。そう返したくなるほどの平坦な物言いからは、おそらく新聞一面をかつさら
う盗難事件が発表された。

一同の驚きが室内を埋め尽くす。祐人のみが、強く眼光を光らせていたが。

「もつと驚け。貴様らがかすれば死ぬぞ」

「充分、驚いてるでしょ！」

「そうだな。——で、これから言うことを守ってほしいんだ」

ゼノヴィアは言う。聖剣を奪ったのは、かの聖書に名を残し大墮天使コカビエル。かつて、赤と白、及び三種族の戦争にすら生き残った化物である。

好戦的な性格からしても、明らかに前線に立っているにも関わらず、なお健在とくれば、どれだけの猛者かは察するにあまりあつた。

「ま、邪魔立てするなよ、ということだ」

「……随分と上からね」

「お願い致します」

「……いきなり下過ぎてきもいわ……」

ゼノヴィアは一度こほんど警戒し、言い直す。

「とにかくだ。これは天界の意思である以上、理解してほしい」

「……了解した——けれど、この町にコカビエルが来たのは——」

ゼノヴィアがイリナを気にする一誠を見やる。

そして、言った。

「赤龍帝を狙うだろうな」

「そうね……」

「あれ」

「気がついたかしら」

「このままでは悪魔対コカビエルになるな」

「そうね、バカね」

「そうだな、上もなかなか頭に悩めている」

「幸せね、あなた」

話はそれで終了だった。いや、とりあえず、ゼノヴィア相手では話にならないので、会話が終了していた。

とにもかくにもリアスの胸中で腹は決まった。

一誠を狙うのならば、それ相応に対応するだけだ。

これは学園のもう一眷属にも話さなければならぬし、サーゼクスにも詳細を伝える必要がある。

そこまでをざっと考えてから、リアスはぶぶ漬けを出した。しかし、意味を悟るほどゼノヴィアは日本慣れしていない。茶請けとして、ポリポリかじるだけだった。

やがて――

「では――イリナ。帰るぞ」

「……帰れば」

「自殺するのか？」

「しないわよ！ ……イツセイ君のお家がいいの、今日は。ほら、行きでおばさんにも挨拶

撈したし……」

イリナがチラリ。一誠はドキリとしたが、すぐさまリアスのフォローが入った。「え？　なに、泊まろうとしてるわけ？」

特にフォローでもなかったようだ。リアスはなんだか、一誠と以前から知り合いである風なイリナに対し、謎の危機感がある。

「……あんたに関係あるわけ？」

「いや、逆にないと思うわけ？　眷属なのだけけど」

「幼なじみなのだけけど」

「だから？」

「そつちこそ、だから？」

噂があかない。

イリナは頬に汗を垂らしながら言う。

「だいたいなに、惚れてるわけ？　下僕に？　私はエクソシストだけど、エクソシストになる前からの知り合いを手にかけてたりしないから安心して、どっか行って。積もる話が天界に届くくらいあるのよ」

「不安しかないわ。さっきだって意味不明な勧誘していたじゃない」

「……私の気持ちと、あなたの気持ち、どれだけ差があると思ってるのよ……」

イリナの言葉にリアスはカチンときた。知るか、そう吐き捨てそうになる。

「私は彼に助けられたの。その気持ちがあなたより、低いと感じちやいないわ。それに——他人と自分の想いに優劣をつけるなんて滑稽ね」

「へえ、言うわね。知ってる？ 恋愛の法則。給食の苦手なおかずを食べてもらってから意識して好きになる。そんな恋がずうっと強まっていくなんて、案外あることね。でもね、最初から熱すぎると火傷だけしちやってさ、けつきよくは冷ましていかなきゃならなくなるんだよね。」

一度、頂点をハッキリ知っちゃつてると——あとは温度下がってくただだよ。ねえ、適温つてわかる？ それ、私のこと」

「……なに、私は一気に燃え上がって、後は散るだけだつて、そう言いたいわけ？」
「そう思うなら、きつとそうなんじゃないかな」

——こいつ、嫌いだ。

二人が、リアスとイリナがほぼ同時にそう思った。

祐人は、いつエクソシストに食いついてやろうかとハイエナのように鼻を利かせているのに、意味をなさず。小猫は飽きて、菓子を——ゼノヴィアが食わなかったぶんを——食べていて、朱乃は一誠と話していた。一誠は朱乃とリアスたちを見たり、見なかったり……。

クラスでこんな感じの女子のケンカ、見たことあるなあなんて思っていた。アーシアは、右往左往しながら転んでいた。

「おっと、大丈夫かい」

「あ、ありがとうございます」

「ま——今回は殺しに来たんじゃないからね……………アルジエント……………」

「は、はい？」

ゼノヴィアが勝手に転んで、あうつと手を突いていたアーシアを起こしてやるが、その顔に目を開いた。

知っている、知っているぞ。こいつ——異端者のアーシア・アルジエント——。

「おまえ——悪魔を癒やした聖女か」

その絶対零度を籠もらせた言葉に、バカみたいな口論を続けているリアスとイリナもさすがに言葉を止めた。誰もが二人に注目した。

「問う。なぜ、悪魔を癒やし、神を裏切った？」

「……………」

ものすごい剣幕に押され、アーシアは口を開けなくなっていた。

祐人が一歩踏み出す。

「だんまりか。案外、腰抜けもいいところだな。追放されると理解した上で悪魔を癒や

したわけではなかったのか」

ふっ……とゼノヴィアは口元に嘲笑の笑みを浮かべて、アーシアを見つめた。

アーシアはやつとこき、口を開く。

「……なんにも考えてなんか、いませんでした」

「……………で？」

「……………だつて……全然違うじゃないですか」

「なにがだ。言葉が少ない」

「教えられていたのは、はぐれ悪魔という存在ばかりでっ！ あんなにも、あんなにも人と違わないなんて全然教えてくれなかったじゃないですか！」

アーシアは叫んだ。手をぎゅつと握りしめて、精一杯言った。

「あれを……痛そうな苦しそうな顔をです。人となりが違うのか、背から生えた翼以外で理解できない者もいるんです。そんな存在が、目の前で苦しそうな声を上げて、——助けてって言われて、なにもしないなんて、間違つていても、私になりたかった聖女じゃないです！」

ゼノヴィアは「へえ……」と、声を漏らした。腕を組む。そして、顎に手をやり、面白そうな目で言った。

「なるほど——君はバカだったんだな」

「……どういう意味でしょうか」

「うん？ ……ああ、怒らせたか。まあ、誤解であつてそうでない。そうだな言うなれば

——」
ゼノヴィアは続ける。

「命は平等つてことだよ」

「………」

「人は言うよね、命は平等だとき。神もそう言うのだろう。けれども、悪魔は墮天使は加算されていないようだ。どうにも、悪魔を毛嫌いする教育を受けた私でも、多少思うところはあるよ」

アーシアは驚きに目を見開いた。手で口元を覆う。

「君はバカだよ。それは勉学の類ではなくて、行動バカつてところだね。それも超バカだ」

「……ひどい」

「君は信徒だろうか？ それなのに、悪魔を助けるなんて後先考えないアホだね。だけど——優しい人間として、たぶん正しく生きた形ではあるのでは？」

皆が静聴する。ゼノヴィアは満足そうに自弁を語った。

「信徒の教えより、助けなければ——といった感情が優先されたのは、君が優しいバカ

だったからだ。バカゆえに優しかったわけじゃない。優しいバカだったんだ」

「……何回バカって言われたのでしょうか……」

「賢ければ、殺すだろう、普通。君は戦争中でも敵兵を助けてしまうような人間だったの
だろう？」 ほら、バカじゃないか」

——だが、ゼノヴィアは一度そこで区切り息継ぎをして、やがて胸に手を当てて、笑
う。

「そんなバカさに私はいくらか好感を覚えるよ。もちろん、否定はするが。私なら頭を
とって、それを褒美にパンを貰うくらいはするだろう」

「……………」

「まあ、言うなれば信徒としては君を蔑むが、人としては尊敬するということだよ。ま
—信徒⇨私なので、人としても信徒そのものなわけだから、本当は全面的に否定しなけ
ればいけないんだけどね。……なんだか、哲学みたいで頭痛いな……」

ゼノヴィアは頭を掻きながら、締める。

「結論として、君はまあ、バカだということさ」

「それ、ただのバカじゃないですか！」

「でも、そんなバカさは好きだよ、アルジエント」

「では、失礼」ゼノヴィアはそう言うと、イリナを無理やり連れて、部室から出て行った。

イリナは「あくくん！」と終始叫んでいたが、そのたびにゼノヴィアにげんこつされ、悔しそうに涙目で去っていく。

リアスはみんなを見渡して言った。

「……ま、とりあえず帰ろ。ね？」

紺碧

「……あんたのせいで、一誠くんのお家に行きそびれた」

空の色合いは朱から紺碧へと色彩を大きく変える。雲さえもが、その空色に操られるように己を変えた。

ゼノヴィアはそれを眺めながら、空がやや赤から青黒くなるのはどうにも不思議だと感じていた。

どうしてだろうか。

学は自分なりに、それこそ信徒として必要とされる範囲をこなしてきたはずだというのに、こういう時、無性に寂しさを感じる。きつと、先ほどまで一般的な『学校』に足を運んでいたから、おかしいな感傷がひよっこり顔を出した。…そう思う。

“もし”の自分をいつの間にか脳裏に浮かべている。

「拗ねるのも、愚痴るのもひっこい奴だな。お前は」

ゼノヴィアはにべもなく返す。

「だってだって。別に執着まではしないけれど、でも、もう少しくらいさ」

イリナは口先をすぼめ、不満を漏らした。

余程イリナはゼノヴィアが無理やり連れ出したことが気に入らないらしい。

しかし、それも仕方がないのかもしれない。青春盛りの年齢に、好きな相手を前にしたらそうもなろう。ましてや数年跨いでの再会。むしろ何もなければそれは薄情とすら思える。

後は付け加えるなら——これまたひとついくらいに、殴られた頭を撫でているのもなんとなくわざとらしい。

「それよりもコカビエルに対しての手段を練らねばならない。奴は一級品だ」

「でもさ、あんたも気付いてると思うけど、やっぱりこの町にコカビエルが来たのって偶然じゃないと思うの」

「分かっている。この町には魔王の親族が二人。そして、先の戦争でやり合ったであろう二匹のうちの一匹がいるからな」

赤龍帝——という伝説がこの町にはいる。かつて世界を相手に蹂躪の牙を剥こうとした龍と同等とは言えないかもしれないが、確かにいるのだ。

そして。

魔王の親族が二人。悪魔の根城がひとつ。部下の堕天使が好き勝手にした教会。

むしろ異形が集まらない方がおかしいのだ。こういった因縁が強い地域に。

「……聖剣と伝説の堕天使。よくよく考えなくても、勝率は低いな」

「でしょーね。でも、大きな成果を上げられるのなら死んでなんぼの仕事でしょ。……ゼノヴィアは天然物だし、とても珍しいけど、聖剣の因子さえあれば、エクスカリバーまでは使用することができる。適合するかの問題はあるけど——数がいるからそこまですべて問題じゃない。つまりは私たち戦士の換えなんて——」

そこでゼノヴィアが言葉を遮るようにイリナの唇へと指を当てた。

「あまり言うなよ、やる気がなくなる」

イリナの表情に憂いが去来する。そして、訥々と話し始めた。

「ごめん……。でもだって、私たち……多分、死ぬからこれで。私たち、S級のはぐれさえ手間取るのに——いつも読んでる聖書に出てくる『登場人物』が相手なわけじゃん。……怖く思うのはおかしくない」

「だから、赤龍帝にあんなにも執着を見せたのか」

死んだら、もう逢えないから。

気を抜けば震える。死を考えれば、吐きそうになる。今までは希望的観測を含めて、どうにかなると信じてやってこれた。しかし、今回は希望を観測するに至らず、明確に意識する血の匂いと今まで見てきた仲間の死に己の未来を重ねてしまう。

コカビエルは総督であるところのアザゼルとは違い、好戦的であるという。戦闘するとなれば、見逃すことはない。

そして、我らの神をも深い眠りに至らしめるほどに凶悪な龍二匹を敵にして死んでいないのだ。

奴の性格からすれば間違いなく前線で槍を振るつたに違いないというのに。

「……大丈夫だ。主が加護を下さるよ」

「……主、か」

二人は神に逢ったことはなかった。当然だった。神は生きていない。しかし、聖書には残り、こう記されている。

『——神は、戦の傷を癒すために眠りについた。主の夢見はいつまでも民を映し、そして眠りながら我らに加護をお与えになる』

実際のところ、どこまで信徒として信じていけばいいのか、果たして正解が存在するのかは分からなかった。けれども、しかし無条件で信じることこそ、真の信徒だと誰かが言うのであれば、それこそ確かに真実なような気がしないでもない。ただ、思うことひとつ。

私たち、人形みたいだわ——。

◆ 一騒動が起きたのは、翌日の旧校内でのことであり、また確かな殺意が込められていた言葉が発端となった。それを見ていた悪魔たちの数人は、戸惑いを隠すことなく挙措

を失っている。

「だから言っているんだっ！ 僕らが単独でコカビエルを迎え撃つ必要があると！」
声高な発言は、槍のように鋭く鼓膜に刺さるような感覚がする。木場祐人が叫んでいた。

アーシアが一誠の手を強く握りしめる。己の弱さを分散するようなその仕草に、どこかさらに苛きを強めたのは祐人だった。

リアスが深く瞼を閉じて、言葉を脳内で整理する。やがて、祐人の感情の波が平坦に近付くまで待つてから、ようやくと口を開いた。

「あなたは、物言いがそこまで雑だったからしら、祐人」

水柱のような言の弾は、しかし、激情を誘うだけである。けれども、リアスが開いた双眸の奥にある憐憫や慰め、そして大切に想うそれが見え隠れしているのを、騎士たる彼は見逃すことなどできなかつた。だからゆえに、ただ唇を嚙むだけである。口内で切れた皮膚から滲む血の味に、嫌な記憶ばかりが検索されるようにどこかで映像化される。

斜視してくる祐人へ、リアスは、立て板に水といった具合に言葉を並び立てた。

「エクソシストと、水面下での交流——コカビエルの迎撃共闘なら、まだいいでしょう。向こうも、結局は死なれて剣を奪われるのを望むはずもないのだから。」

ただ派遣でき、なおかつ戦力としてコカビエルに対応できる可能性のあるものが今のところ、彼女たちしかないなかった。

だからこそ、こちらが裏切りや何か金品利益を要求しないのであれば、天界も願ったり叶ったりではあるでしょうね。納得しないものもいるでしょうけれど。

でもね——」

少し、とめる。

祐人を睨んだ。

「ここで、身勝手な行動をして、それでどうなるの？ 作戦に闖入した悪魔として狙われて、誰かが死んだら責任は取れるの？ あなたの命と引き換えにでもする？ できないでしょう？」

私たちが向こうを一撃に葬るのは、難しいでしょう。けれど、エクソシストの持つエクスカリバーは——言いたくはないけれどアースシアのような防御を持たない悪魔には、必殺なの。

最悪、コカビエルに加えて、エクスカリバー所有者ふたりとの戦闘になるのよ。——
一歩間違えば全滅するわ」

——あなたは、それが分からないほどに無知ではないでしょう？

言外に込められた言葉を構築し、想像する。

言いたいことはよく理解していた。けれども、ただどこかで卑劣なことを考えてしま
う。

——やっぱり、心の底からの悪魔には、元人間の感情が残ったままである僕の、この感情の蠢きまでは理解してもらえないんだ。

悪魔は、本来徹底した合理的思考を携え存在している生き物であり、人間の言う感情的側面を重視していない。あくまでも効率を考え、それに基づいた生き方を推奨しているからだ。

ゆえに、合理性からはずれる感情の流れや一時の波に揺らされるようなことは基本的に、*“ない”*。人間と多大に関わるようになってからは、多角的な体面性や生き方を学んではいらるだろうが、しかし祐人は元天界側の存在であった。

悪魔になつてからは天界やエクソシストを睥睨するような心持ちでいるというのに、悪魔の合理性を垣間見ると、悪意になる前の自分のものの見方が案外ひよっこりと顔を出してしまう。

なんとも、ずるい日和見のような男だと、自分でも思う。

だけれども、仲間を殺されたことのないこの人たちには、どうやってもこの感情を理解できないと、考えてしまうのだ。

嫌で嫌で嫌で。そうでないながら、肯定したくてたまらない。

エクスカリバーを破壊するということは、エクソシストに憎しみを持つことは、悪魔的には間違いではない。

だから、皆が例え危険な目に遭う可能性を考慮しても、肯定していた。そして、眷属のみで、コカビエルという闖入者を倒すことを。

膠着状態が続く。祐人は、諦めの表情で言った。

「だったら眷——」

「抜けさせないわよ」

読まれ、返される言葉にしばし呆ける。

「冷静な見方をしなさい。下級であるあなたが、最上級の墮天使、およびその配下——もいるでしょう、それとエクソシストふたり。どうにかなるというのなら、その自信過剰に絶句するわよ」

祐人は喫驚の表情を見せた。

誰だ——この人。

こんなにも冷たい目線で射抜かれるなんて、誰々なんだ。

本当に部長なのか。

「じゃあ……どうしたらっ……」

泣きそうになりながら、祐人は頬に力を入れ、表情を崩さないよう努力した。

リアスの相好は一変する。

「ずっと一緒にいなさいと、昔に話したでしょう？ 離れることは許さないわ。だから、現実的に納得できる話を提示して」

私だって、散々に婚約の件で迷惑をかけた。だから、同じ分だけ迷惑をかけられても全然いいよ。けれども、祐人の言う言葉は逸脱し過ぎていて、政治的にも——平民ならまだしも、魔王の妹が絡んだとなれば、それは大事件になりかねないのだから、最低限話のいくものを出してほしい。

そう優しく、祐人の頭を撫でながらに言った。

「ずるい優しさだと思った。」

絶対に反対のできない優しさだと、そう感じた。

こういった論し方は反駁の余地がない。祐人は口を開く。

「……あのエクソシストと、話をさせては貰えませんか？」

グツドラック

場所は校庭——ではなく、旧校舎裏の平地である。さらに、そこへと集うのはどれも悪魔というわけではなく、生物学上、人間に分類される者も混ざっていた。いや、混ざっているというよりは、対峙していたのだ。

その内のひとりが眇めるような視線をくれながら、ただぼやくように口を開いた。

「なんだ？ 随分とご丁寧な結界を張り巡らせたな。そして、総迎えか」

皮肉混じりの発言はどことなく清々しさを含ませていた。

ゼノヴィアとイリナは、グレモリー眷属から使い魔によつて、呼び出しを受けていた。放課後の空は薄暮へと移ろうとしているが、しかし、張られている結界のせいだろうか。淀んでいて——もちろん外界からはそう見えることはなく、むしろ近づくことさえも無意識にさせないのだろうけれど——少しも夕刻の時を感じさせることはなかった。

警戒は互いに最大レベルまで引き上げられている。それもそのはずだった。本来ならば、殺し合うことも辞さない間柄であり、また、ひとり——金髪の青年が敵意を剥いているのだから。

それにより生じた空気の切れ目に、どこからか入り込んでくる殺気。しかし、それは

明確なものというよりは、敵意という想いが昇華した形だと言えた。

ゆえに、警戒心を下げることとはなくとも、腹の立つようなことはない。

青髪の剣士ゼノヴィアが一步前に入る。それに続くようにイリナが後方からゼノヴィアを守護できる体制を整えて、息を吸った。

春何番かは知らないが、むしろ春なのかも怪しくなる夏との裂け目ではあるが、花の香りが鼻孔をくすぐる。くしゃみが盛大に漏れそうになり、しかしそれをバレないよう必死に飲み込んだ。すると、次は腹が痛くなるような錯覚がしたが、これもまたさらに下へと押し込んだ。

昨日から何も口にしてはいなかった。公園にある水道からの水のみを頼りに夜を超えた。それはイリナがここへ到着するまでに一誠へのお土産だと言って、ゼノヴィアに隠れて郷土のものをこしらえたことによる。始め、一誠の家に寄った際に母親へと渡しておいた。

ゼノヴィアにはひどく貶されたが、ないものはすでになく、そのままに参上するはめになった。

「……茶は——」

「ないわよ」

ゼノヴィアの乞食のような発言はにべもなく返される。

あわよくば、などど期待していたがそう甘くはなかった。

昨日、あれだけ茶を催促したのも、ぶぶ漬けを全て平らげたのも、全てはイリナのせいだった。

ゆえに小猫という菓子を分けてくれる存在は、とてつもなくありがたく、ゼノヴィアは殺し合うことになっても小猫だけは殺さないでおこうとまで決めていた。

その際に、どさくさに紛れてイリナを殺しそうになるとは思うが、その時は小猫を茶髪に染め、どうにかイリナの代わりにできないものかと、昨夜から空腹の腹を慰めようと考えていた。

「祐人」

「……ありがとうございます、部長」

祐人がリアスの掛け声に一步から二歩と前へ出る。

ゼノヴィアとイリナは構える仕草を取らなかつた。祐人からの敵意は伝わる。しかし、それ以上に懇願するような屈辱のような念が飛び出し見えたからであった。

「なんだ、老けたな。グレモリーの騎士。お前は俗に言ういい男なんだろう？ 一般の女からすれば。そんな湿気た面を見せられると景気が悪くなる。笑え」

「……………決闘を、してくれないか」

「なに…………？」

祐人は繰り返す。

「決闘をしてくれないか」

ゼノヴィアは驚いた。よもや、やり合うことは覚悟してはいたが、しかし決闘などというクリーンなやり方を提示してくるとは予想外であった。

ゼノヴィアは軽く巧笑した。

「ほほう。決闘。しかし、それをしてこちらにどのような利益がある?」

「僕ら、グレモリー眷属が君たちのサポートとしてコカビエルを迎撃しよう」

「……それは勝った場合か? それとも負けた場合か?」

「どちらも——だ」

祐人は睨むように強く言った。イリナが、思わず何かを言おうとするが、ゼノヴィアが制止する。

「つまりは、ただ単に私たちと戦いたいだけだということか」

「……そうなつてしまふ」

訥々と話す祐人は続けた。

「……コカビエルは魔王の妹である僕らの王リアス・グレモリー様と二天龍である一誠くんを間違いなく狙ってくるだろう。なら、それが分かっているのならば、最初から陣形を固めて挑んだ方が何倍も生存率を高める。」

それに——赤龍帝は譲渡をできるし、僕は剣士だ。君らとの相性も悪くない」
「中身が見えているようで見えん。建て前ばかりはやめろ」

ゼノヴィアは何かを見抜いたように、凄んだ。
沈黙。

やがて、祐人は剣を形成し始めた。周囲は黒く紅く——闇色に血を混ぜて染まり上がる。

遍く結界は、日食の如くとなる。

一言、祐人が吐いた。言ったのではなく、嗚咽のように、胃の物を出すような表情で、
「僕は——エクスカリバーが、世界一嫌いなんだ」

そう、吐いた。

◆
結界というひとつの構築された世界は剣の色へと遂げ、祐人はその剣を眺めながら
言った。

「分かっているだろう?」

ゼノヴィアは目を閉じ、確かめるように言う。

「聖剣計画の生き残りか」

聖剣計画。

聖劍計画という非人道的実験は、祐人にこの剣を持たせた。

エクスカリバーは常人には扱うことはできない。親族が揃つての聖職者であったり、また特別な万人にひとりといった才覚を持ちえない限りは振ることすらできなかった。

そこで考えられたのが、

「——本当に、龍の血液を、因子を打たれたのだな」

龍は生物的最高の肉体を要し、そして肉体には全てのエキスとなる血液が流れ、DN Aが流れ——つまりは、剣を扱えないならば肉体を人から離し強引に扱えるところまで持つて行けばいいといった、暴虐な形へ落ち着いた。

人間はドラゴンの神器を持ち、使用することが可能だ。であれば、因子を埋め込むこともまた、可能でなければいけなかった。

しかし、人は必ずしも宿つたそれを使えるわけではなく、一般的な肉体であるならば——特に龍種などの特殊な生物を象つた代物であるならば、発現したその時点で心臓を止めることになる。

だからだろうか、実験により大半の子供たちは息の根をとめた。発狂するように、龍の怨念のようなものを幻覚として見ながら視界を消していった。

祐人は、生き残ってしまった。適応したそれに、人でありながら龍の因子を宿し、生き長らえた。

「君らは、その僕らからさらに抜き取った因子なりなんなりを使用しているんじゃないか？」

祐人の質問には確信が込められている。エクソシストと剣を交えた悪魔は多くいて、それが話を広めればリアスへと渡らない情報ではない。

ゼノヴィアは肩をすくめた。

「よく知っている。だが残念だ。私は天然でね——言い方は悪いが、そんなものに頼る意味はないんだ。ま、その茶髪は愚かにも他人の礎を横取りしてここにいるが」

「ちよつとぶつ飛ばすわよ！」

「反駁してみろ、恋する乙女」

「その因子があつても、エクスカリバーを扱えるかは差があるんだから、私はそれなりに優秀なのよ！　ブアーカ！　変なメツシユ！」

「貴様、ぶち殺すぞ」

「いきなりキレすぎいい！」

エクスカリバーを首もとに添えられたイリナが叫んだ。

ゼノヴィアは自分で言うには構わないが、言われるのは滅法嫌いで、さらには先のイリナの所業のせいで本当にやってしまおうか——まで考えていた。

ゼノヴィアは剣を下げると祐人へ言った。

「——で、その剣は、お前の憎む想いを体現したものか」

「ああ。龍は——戦事ばかり運んでくると信じている。そして、因果があつて、僕らは様々な目に遭い、龍を殺し——その血を使って、応報を受けたのは僕らだった」

「使われた血液は、所詮は下級龍だろう、それなりのものは見つけるのにも苦勞する。殺すのにも——苦勞する」

「下級であろうと、龍は龍たるだけで、その身を覇に任せれば、それだけで破壊の兵器だ。そして、下級なぶんに本能的で——愚かな思考をしていて、暴虐で、それはもう考えるよりも遙かに暴虐で単純で。」

だから、その血は単純な思考を助長するんだ。憎むなんて、憎悪だなんて——これ以上簡単な感情もそうないだろう？」

ゼノヴィアは祐人の剣に——紅く黒く唸るそれに視線をぶつけた。

「——で、お前は結局、剣に様々な憎しみを乗せるだけ乗せて、結果として剣は、ドラゴンスレイヤーとなった、と」

祐人は頷いた。呼吸がとでも浸透して聞こえる。三々五々——音は遍く広がり、ぶつかる。

ゼノヴィアが問うた。

「赤龍帝に対して、憎しみはないのか」

「彼は——」

祐人が一誠へと振り返り、少しばかりの伏せ顔となる。

「彼は、ドラゴンじゃなくて、悪魔だ。ドラゴンの力を使う——そうなる運命の線に乗せられて。」

神器を人は選べないし、しかし、神器も僕らを選ぶことはなく、けれども……とにかく、言えることとしては——彼が仲間で良かった。

どこかでパラドキシカルしているような気がしないでもないけれど、僕は龍がいる限りは平和は訪れないんじゃないかとも思うけれど、でも仕方ないんだ。今、ここで彼を殺せるかと言えば、それはとてもじゃないけどできなくて。

とにかく、龍は嫌いだし、エクスカリバーは憎いし、聖職者には吐き気がするし——とにかく、こんな感じなんだ」

言っている言葉、むちやくちやだろうけどね。祐人は自嘲ぎみに笑んだ。

ゼノヴィアは首を振る。

「感情から生まれた理屈と、現在の流動的感情は沿わないこともあるだろう。過去感情からのルールに従えないものは必ずあるだろうし、また、それがなくなればそれはそれでプログラムされた人形のように、不器用にも思える。」

仕方がないんだ。お前のような、過去へ異常異質な執着を持ちながらも、優しい者と

出逢った後の幸せ者は、仕方ないんだ。

過去への死者と、現在の生者への想いを均等に均せばそれが嘘にも感じられて——仕方がない」

ゼノヴィアは剣を抜き、先を祐人の頭部へと指すように向けた。

「その感情を見守ってくれる存在がいて幸運だったな、悪魔。さあ、やろうか。

エクスカリバーでその歪な剣を迎えてやる。かかってこい——幸せ者」

勘弁してやる

—— 幸せ者。

果たしてそれは、どういった意味が込められていたのか、祐人に凶ることは出来そうにもなかった。自分がどこまで幸せであったかを、顧みても、しかし記憶に浮かんでくるとはやはり当時の虐殺的映像ばかりであった。

今現在は間違いなく幸せであると言える。が、しかし幸せかと問いをかければ当時のそれがふっと、沸き出すように心の底から漏れてくる。漏れてくる。そして、やっぱり自分は幸せではないと感じる。なぜなら、今がそこまで幸せならば、ここでこうして怒りに囚われることはない、思うからだ。

つまり自分はあの日あの時からずっと、この場まで無意識に心根の奥底では不幸だと、辛いのだと訴えていたと信じてしまうのだ。

おそらくは、いや確信として、本当ならば祐人は幸せなのだ。けれど、幸せかと訊かれると首を傾げたくなり、過去を連想して、ああ、こんなにも辛いやと考える。

トラウマ——と、呼ぶのだろうか。これは。であるなら、トラウマを抱える生物はけ

して幸せにはなりえないのだろう。意識底には不幸だ辛いだ嫌だと、必ず負の感情が存在していて、結露するように心から滲み出てきて、やがては無意識にどこかで怖がるようになる。

祐人は、手を見てみた。剣があった。黒くて——本当に黒くて、常闇の空から、月が隠れたような夜の空から、剣の型だけを綺麗に抜き取って、そして誰かを斬って、その血を浴びて吸い、出来上がったみたいだった。

あまり、美しくはなかった。

自分で創り出したにも関わらず、もしも自分に突き刺せば致命傷となる。

任意に剣を創り出せる神器だなんて、なんてすごいのだろうと思う。憎しみや怒りから、ドラゴンスレイヤーまで精製出来るのだから、それを手に入れている自分って、意外にすごいんじゃないかって、そう思う。

でも、そう思っただけで。

嬉しいとか、そういうのは別に生まれなかった。平野のような感情にささくれ立った何かは、剣を黒くして赤くして、最悪自分すら危険に晒して、みんなを護るために僕はいるのに、いつの間にかみんなのことも危険に晒して。

バカ、なんじゃないかと、思った。

もう、どうすればいいのって、なる。今の幸せに準じて、ただ幸せだつてやっていた

ら、あの時死んだみんなは、僕だけでも逃がしてくれたみんなが、どこか哀想で。けれど、過去ばかり見ていたら部長とか朱乃さんとかみんなとかに嘘ついてるみたいにも思えて、相反している気がして、だからもう、死とか本当に厄介なんだとか心から今生きていることが楽しいと思えないとか、満足感から一步退いている感じがするとか。わけわかんなくなる。

エクスカリバーを壊すとか、正直な話、命掛けになるし、完全に壊すことが出来るとか本当は思えないし、そんなことしたら部長にも迷惑かかるし——だから、どうするのかが本当にいいのかわからない。

だから僕は——

「いぐぞ、悪魔」

ただ、まずは、一発。誰かに殴ってほしいだけなのかもしれない。

そして、それが奇しくも、エクスカリバー遣いだったりしたら、どうなんだろうか。



青髪に一閃の緑を添えたゼノヴィアは、臀部を落とすし、膂力を足へ注いだ。

刀身が眩く照らすように光る。けして、影響されない。祐人の、あの剣にはけして影

響されない。

夜と昼といった暗さと明るさが混雑する境界内。ひたすらに剣同士が威嚇している。ゼノヴィアが身につけていたロープを投げ捨てる。それをイリナが受け取った。

「え、てか私は何すんの?」

「お前は座って見てればいい」

「私、お付きみたいになってる!?!」

「黙っている、色ぼけが。腹が減っているんだ、話かけるな使えなイリナ」

「ああ! 聞こえた聞こえたわ! 使えないとイリナを配合したわね!」

ゼノヴィアが射抜く双眸で祐人を見やる。祐人は憂いを混ぜた相好をしていた。ゼノヴィアはそれに対して言葉を吐かない。

——世界一エクスカリバーが嫌いなんだ。

のわりには、剣呑さが物足りない。ゼノヴィアは、後方へ置いたイリナから距離を離れた。祐人へと飛び出してゆく。

「……祐人」

リアスの眩きが中空へ溶けた。

伝染する想いが空気の微粒子を通して伝わる。

不安は様々だ。

祐人は——エクスカリバーを見やる。綺麗な美しい剣であった。

見惚れるというのは、こういうことで、しかし大嫌いだからそれは有り得なくて、けれどやっぱり剣士だから、綺麗に見えた。

「龍の鱗を傷つけるのは、大変難しいらしい。けれど、これはいける。エクスカリバーはどうなのか」

喉元で小さく呟いただけだった。それを、ゼノヴィアが拾う。

「エクスカリバーを超える剣など、世には片手よりないさ。なら、その剣に龍の鱗をどうにかできるのなら、エクスカリバーは龍の肉まで届けるよ」

——そんなことないと言うのなら、エクスカリバーを超える剣だと証明してみせろ。

テレパシーのように届いてくる言外のそれに、祐人は反応する。

エクスカリバーは、伝説中の伝説だという。祐人の神器は、有象無象の剣をいくらでも精製できるというもの。

……この剣は、果たして有象無象か？

自分の半生より駆けた感情の大部分を注いで磨いて、そこにドラゴンすらも壊せるよう念を重ねたはずだった。

それが、有象無象であるなら、多分、泣いてしまうかもしれない。というよりも、死んだ彼らへの想いがずっと、思うよりも少なくて自分を殺したくなるのかもしれない。

「……そんなの、ダメだ」

ダメだよ。そんなのは、これから生きていく上でも絶対に、ダメだ。許せないと、思う。

許しちゃいけないと、思う。

この剣だけは――

「エクスカリバーを、超える剣でありたいんだ!」

祐人が駆ける。騎士の特性を生かしながら、存分に駆けた。

ゼノヴィアが口元を上げ、哄笑した。

「無理だ! そんな暗い剣は、エクスカリバーを超えられない。月の出番は、太陽よりも短い。所詮、闇の剣は光を飲み込めないっ!」

「なら、丸ごといかせてもらう! 暗闇で光りが灯るなら、覆い尽くすほどに!」
祐人が叫んだ。

「リアス部長! あなたの――グレモリー眷属の証、僕がグレモリーである証をお見せします!」

リアスは目を見開く。叫ぶ祐人など、ほとんど見たことはなかった。

熱くなる彼を、目撃したことなど、滅多になかったのだ。

「龍が嫌いだ! 聖職者も嫌いだ! エクスカリバーが嫌いだ! けれど――」

「けれど！　なんだ、悪魔！」

「僕より嫌いなものはない！」

紅が刀身を螺旋状に覆う。血——ではなくて、血よりも濃いそれは、黒さを覆い隠していく。

祐人の身体から、騎士の駒がぶれるように重ねて見えた。

ドライグが言う。

『——駒が、あいつを認めだしている』

人から悪魔へ——。

明確な、悪魔へ。グレモリーへの確信とした忠誠が、刀身を覆う。

まだ、答えが出たわけではなかった。相変わらずに、自分のことほど分からないことは、ないのだと思う。けれども、しかし、こんなどっちつかずの自分が嫌いだと、分かったのなら、まだ末期じゃない。

末期じゃないのだ。

だったら、どうにか——できそうだ。

「龍の鱗を破るは己自身。エクスカリバーにそれ以上の己があるかい」

一閃。

横薙の紅剣と化したそれは、リアスの髪色を飛ばし、ゼノヴィアを破壊しようと呼び

来る。

ゼノヴィアが目を眇め、しかしやはり哄笑して返した。

「あるさ！ なければ——伝説にはなれない！」

破壊の聖剣と呼ばれた刀剣のそれは、紅の残像すら中空へ残してゆく斬撃を砕くため、下される。

激しい爆撃のような破壊音が周囲を包む。残響が断末魔のように聞こえた。

「まだこれだけじゃあない！」

祐人が空いた片腕へと剣を生み出す。『光喰剣』が生まれる。

「そんなチャチなものが効くか——」

ゼノヴィアは構わずにエクスカリバーを振るう。祐人はそれを二本の剣で受け止めた。

「……効かないよ。けれど、」

祐人が紅剣を引く。

「意味がないわけじゃない！」

「なに——」

僅かに吸い込まれる光は、エクスカリバーを寸程度に弱らせた。全く変わり映えのないエクスカリバーは、しかし、間違はなく——小指程度かもしれないが——威力を落と

した。

祐人の紅剣が獲物目掛けて飛び出す。

「舐めたまねを——！」

ゼノヴィアが身体を翻し、半歩退いてから腰を入れ、突進した。

砂煙が立ちこめる中、剣技の重なり合う音だけが届いてくる。

それを、リアスたちは見つめていた。

しかし。

——やがて、それも静止する。

「……どうなったの」

イリナがゼノヴィアのロープを抱きしめながら、ただ呟く。固唾をのんだ。

誰もが注視するなか、砂煙が散開するように失せ始め、二人の影が見え始めた。

「僕の勝ちだ」

「私の勝ちだ」

ゼノヴィアが祐人の上に被さるようにしてエクスカリバーを首もとに添えていた。

そして、祐人もゼノヴィアの首もとに二本の剣を添えている。

「私だ」

「違う、僕だ」

「貴様、基地外か。見えんか。この、首もとの剣が」

「君こそ見えないのかい、僕の剣が」

「……認めんと、怒るぞ。いや、そろそろキレル」

「……それは、何かおかしくないかい」

「ストーツプストーツプ！」と、イリナが間に入り、互いを引き離す。

「引き分け、ね！ いいでしょ！ これから共闘するんだから、仲良く仲良く！」

「チっ……クソが……」

「舌打ちしないで！ 言葉遣い悪い！」

ゼノヴィアは不服そうにエクスカリバーを鞘へと収めた。イリナに手を引かれて祐人は腰を起こす。

「共闘の件……本当に君たちはいいのかい？」

祐人にそう訊かれ、イリナはゼノヴィアを一瞥したのち、言う。

「——ええ。どちらにしろ、そうなるのだから」

イリナは優しく笑む。祐人は、どことなくこんな笑顔を出来るから、聖職者なのだろうか、とも思った。

ゼノヴィアが冷たい声で言う。

「綱引きで言うなら、引き分けではあるものの、私のほうが半歩引つ張っていた、的な私

の勝利だ」

「……意味わかんない」

「イリナ、お前に言ってるじゃない。おい、悪魔」

ゼノヴィアが、祐人に再び近づき、左手で胸ぐらを掴み上げた。

「……………」

「な、なにかな」

「そらっ」

パチン。

ゼノヴィアの右手が、優しく祐人の頬へと当たる。

祐人が、僅かに呆然としながら訊いた。

「……………これは？」

「私は人の心にとても機敏だと言っておこう」

祐人はゼノヴィアの顔を見上げる。——殴ってほしかったんだろう、バカめ。

「いい試合だった。楽しかった。だが、力を出し過ぎたよ。これくらいで勘弁してやる」

それに祐人は、

「……………僕は——間違っていたのかもしれない」

「……………」

「……君たちのような、聖職者もいるんだね」

ゼノヴィアはリアスたちへと背を向け、一言いった。

「明日、またここへ来る」

「え？」

「作戦、たてるんだろう？」

「あ、ああ。分かったわ」

「何か、飯があると嬉しい。おい、イリナ。いくぞ」

「ういつすー、じゃあまたね」

去りゆくゼノヴィアとイリナに、リアスが声をかける。

「ねえ」

ゼノヴィアは首だけを捻ってこちらへと振り向いた。

「祐人のこと、今日のこと、ありがとう」

ゼノヴィアは、はにかんで言った。

「——こちらこそ、助け舟、ありがとう」

そこには、本当は死にたくない。そんな想いがあつたのだと、リアスは感じた。

迎撃の備えを

旧校舎二階にて、ふたりに女王を加えた形での密談があった——それは、ゼノヴィアと祐人との決闘が行われた、その日の陽が落ちた後のことであった。

支取蒼那——ソーナ・シトリー。駒王学園の生徒会長でありながら、加え、魔王セラフォル・レヴィアタンの実妹である彼女は、鼻上に掛けられた眼鏡を右手の中指で軽く押し上げた。それに釣られるように、切りそろえられた前髪の毛先が揺れる。耳元より僅かに下であるシヨートのそれは、小猫よりも短かった。

利発そうでいて、しかし、時として狡猾さを窺わせる相好はまさしく、策士という形容に沿っていた。

背後にいるのは、女王の真羅椿姫である。

ソーナは面前にいる——自分と似通った境遇である女へ視線と言葉をくれた。

「では、リアス。あなたは——いや、あなた達は、教会からの遣いと行動を共にするとうことですね？」

「……怒ってる?」

リアスは僅かに顎を引き、そして上目遣いがちにソーナの顔色を窺う。それはやは

り、グレモリーの彼女——というよりは、同胞に見せる少女のそれと言ったほうが適切にある。

ソーナは一度睨むようにしてから、しかし、首を軽く左右へと振り、そして息を吐いた。

「……呆れています。グレモリー眷属がこな町外で何かをするのなら、いいでしょう。しかしですね、この町——果てはこの駒王学園を巻き込むことになるかもしれないという状況下において、私に無断でエクソシストと手を組んだというのは、少しひどいのではないですか」

「……いや、あのさー」

「言い訳はなしですよ」

「……ごめんね」

リアスは呟くようにして、謝罪を口にした。リアス自身は、一誠のこともあって、気が回らなかつたのも確かであった。いまだに赤龍帝を欲しがる悪魔は絶えることなく、存在していた。

ひどく申しわけなさそうなりアスに対して、ソーナはこの件はとりあえずいいとして、とだけ言うのと、話題を変えた。

「赤龍帝のこともそうです。私はそれを世界に発信されたあれで知ったんですよ？ 他

にも気が付けばあなたの婚約の問題も解決していますし……私はそこまで信用がないのですか、リアス」

「ち、違うわ」

「少しはあなたのために奔放していた私を労つてもバチは当たらないでしょう。老婆心が過ぎると言われれば、悲しくもそうなのかもしれないませんが」

二度目のため息は、先程よりも深くつかれた。ソーナにとつて、正直なところ、気にとめてしまうのは町のことよりも、親友であるリアスのことであつた。

ライザーとの一件に胸を痛めていなかったということは、前述からしても有り得なく、むしろ、悩み続けていた。しかし、気がつけばそれらの全ては終わっているのだ。

なんともし難い想いである。

だからというわけではないが、今回のことで少しばかりリアスを責めたい気持ちになる。ちよつとでも自分の言葉で傷つくのもいい。それくらいは許されると、意地が悪くも思つてしまうのは、まあ、仕方がないのだろう。

今、リアスが自責の念に駆られているのかどうか、胸襟の内をソーナが見ることは叶わないが、しかしそれをする意味もないのだろうと思う。リアスが外見からでも充分に責任を感じていることが分かるからだ。

ソーナはそれを確認すると、やがて本題へと入っていく。

「まあ、いいでしょう。とりあえず——話を戻します。リアス、単刀直入に訊ねますが、あなたはコカビエル及びエクスカリバーの件をどのように解決するつもりでしょうか」
ソーナの問いに、リアスは相好をひとまず変えて、グレモリーの長としてのそれとなり、応える。

「未定の部分はあるけれど、でも、エクソシストと組みコカビエルを迎えることは決定しているわ。詳しくは明日ね。けれど、私とソーナ、そして——赤龍帝をつけねらうことは確定していると云ってもいい」

「ですね……特にあなたは狙われるでしょう。なんと云っても——ルシファアの、妹なんですから。」

それに——こう言うのはなんだか、悔しいのですが、赤龍帝を拾ったのも、ルシファアの妹であるが故に——紅髪が縁を呼んだのだ、なんて想像をしている者どももいるでしょうし、それを顧みれば、あなたはあまりに狙いやすい目標でもあります」

「だから——お願いがあるの。ソーナ」

リアスが眼光を強める。

「ここは人間が住む町。私の、町でもある。そして——コカビエルには、そんなものは関係ない。つまりは、この町ごと壊したって構わないような奴でもある。だから、」

ソーナが継ぎ、言葉を発す。

「だから、せめて私たちには後方のサポート。要するにあなた方は敵を倒すから——私たちは町を守れ、と」

ええ、と言つてリアスが頷く。

「手柄があなた方のほうが大きいようですが？」

「あら、手柄を取りたいようなタイプだっけ、あなたは？」

「まさか」

「ふふ、でしようね」

軽く互いに笑い合ったところで、ソーナが言った。

「分かりました。しかし、事前に魔王様たちにはお伝えしますよ。もちろん、エクソシストの言い分からして、天界側には悪魔との協力などあり得ないのでしようから、魔王サイドが大きく動くことは難しいでしょうが、けれどそれは向こうの都合。私たちの町に被害が出そうなのであれば、最善の形で墮天使を迎えるのは、天界の与り知るところではありません。椿姫」

「なんででしょうか、会長」

ソーナの声に真羅椿姫が反応し、前にでる。

ソーナは凜々しさを崩すことなく、告げた。

「眷属に伝えなさい。私たちは今回の件、徹底してサポートに回ることを」

して、女王の返信は。

「——了解しました、会長」

この日、この時、この場所で。

魔王実妹二名による、加えての天界的使者による墮天使コカビエル迎撃の連携が、繋がりを見ることとなった。